熊本県文化財調査報告　第130集

鞠　智　城　跡

―第 14 次 調 査 報 告―

平成５年３月

熊本県教育委員会

序　　文

鞠智城は県内で唯一の古代山城であります。

熊本県教育委員会では、遺跡の重要性から、これまでも国庫補助事業や県の自主事業により、13次にわたる調査を行ってきました。

第14次調査となります今年度は、「長者原」・「上原」地区と土塁線の調査を行いました。

調査の実施にあたりましては、文化庁、専門調査員の先生方から御指導をいただくと共に、菊鹿町教育委員会、地元米原地区の皆様など、多くの方々から御協力を賜りました。

ここに厚くお礼申し上げます。

平成 5 年 3 月 31 日

熊本県教育長　道　越　　温

例　言

1．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県鹿本郡菊鹿町米原字長者原を中心とする古代山城の『鞠智城跡』で、熊本県教育庁文化課が行った。

2．第14次調査にあたる平成４年度の調査は、国庫補助事業と県の自主事業によった。

3．整理・報告書作成は平成４年度に行った。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

4．発掘調査は大田幸博〔参事〕、山城敏昭〔文化財保護主事〕がその任にあたった。

5．発掘調査過程の写真撮影は大田と山城が行い、整理後の出土遺物の撮影は前田一生氏が行った。

6．出土遺物の実測は大田が行った。

7．本書の執筆は大田が行った。

8．出土遺物については、熊本県文化課の島津義昭〔調査第一係長〕から教示を得た。

9．本書の編集は大田が行った。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
第1節　調査の組織 …… 1
第2節　調査の経緯 …… 1
第3節　調査区について …… 4

第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 7
第1節　遺跡の位置 …… 7
第2節　鞠智城の歴史 …… 8
第3節　鞠智城の城域について …… 8

第Ⅲ章　調査の成果 …… 10
第1節　第14次調査の概要 …… 10
第2節　検出遺構 …… 14
〔1〕　36号建物跡 …… 14
〔2〕　37号建物跡 …… 20
〔3〕　38号建物跡 …… 20
〔4〕　39号建物跡 …… 21
〔5〕　40号建物跡 …… 22
〔6〕　41号建物跡 …… 22
〔7〕　42号建物跡 …… 23
〔8〕　43号建物跡 …… 25
〔9〕　44号建物跡 …… 26
〔10〕　竪穴住居址と集石 …… 27
第3節　土塁線の測量とトレンチ調査 …… 28

第Ⅳ章　出土遺物 …… 36

第Ⅴ章　まとめ …… 67

〔付論〕　鞠智城調査資料（久保山善映師　鞠智城見学私見　昭和6年3月7日） …… 71

挿　図　目　次

第１図　鞠智城跡検出遺構模式図・・・・5
第２図　鞠智城跡位置図①・・・・・・・・7
第３図　鞠智城跡位置図②・・・・・・・・7
第４図　鞠智城跡城域図・・・・・・・・・9
第５図　19調査区実測図・・・・・・・・・11
第６図　20調査区実測図・・・・・・・・・13
第７図　Ｓ15地業穴断面図・・・・・・・・14
第８図　19－1 調査区遺構実測図・・・・15
第９図　Ｓ10－Ｓ22－Ｓ15　地層観察図・20
第10図　Ｐ42断面図・・・・・・・・・・・21
第11図　掘形断面図・・・・・・・・・・・22
第12図　41号建物跡実測図・・・・・・・・23
第13図　Ｐ49断面図・・・・・・・・・・・23
第14図　42号建物跡実測図・・・・・・・・24
第15図　Ｐ55断面図・・・・・・・・・・・24
第16図　43号建物跡実測図・・・・・・・・25
第17図　Ｐ72断面図・・・・・・・・・・・25
第18図　44号建物跡実測図・・・・・・・・26
第19図　竪穴住居址実測図・・・・・・・・27
第20図　集石実測図・・・・・・・・・・・27
第21図　佐官ドン～土塁標柱箇所間地形測量図・29
第22図　灰塚～長者山地形測量図・・・・33
第23図　長者山実測図・・・・・・・・・・35
第24図　出土遺物実測図①・・・・・・・・38
第25図　出土遺物実測図②・・・・・・・・42
第26図　出土遺物実測図③・・・・・・・・44
第27図　出土遺物実測図④・・・・・・・・48
第28図　出土遺物実測図⑤・・・・・・・・49
第29図　出土遺物実測図⑥・・・・・・・・52
第30図　出土遺物実測図⑦・・・・・・・・53
第31図　出土遺物実測図⑧・・・・・・・・54
第32図　出土遺物実測図⑨・・・・・・・・55
第33図　出土遺物実測図⑩・・・・・・・・56
第34図　出土遺物実測図⑪・・・・・・・・58
第35図　出土遺物実測図⑫・・・・・・・・59
第36図　出土遺物実測図⑬・・・・・・・・60
第37図　出土遺物実測図⑭・・・・・・・・62
第38図　出土遺物実測図⑮・・・・・・・・63
第39図　出土遺物実測図⑯・・・・・・・・66
第40図　鞠智城周辺地形図・・・・・・・・69

表目次

第１表　近年の調査の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２表　第10～13次調査で検出された建物跡一覧①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第３表　第10～13次調査で検出された建物跡一覧②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第４表　第14次調査で検出された建物跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第５表　19調査区遺構概要・・・・・・・11
第６表　20調査区遺構概要・・・・・・・13
第７表　36号建物跡　礎石観察表①・・・18
第８表　36号建物跡　礎石観察表②・・・19
第９表　37号建物跡　礎石観察表・・・・19
第10表　38号建物跡　掘形観察表・・・・21
第11表　39号建物跡　掘形観察表・・・・21
第12表　41号建物跡　掘形観察表・・・・23
第13表　42号建物跡　掘形観察表・・・・24
第14表　43号建物跡　掘形観察表・・・・26
第15表　44号建物跡　掘形観察表・・・・26
第16表　出土遺物観察表①・・・・・・・37
第17表　出土遺物観察表②・・・・・・・39
第18表　出土遺物観察表③・・・・・・・40
第19表　出土遺物観察表④・・・・・・・41
第20表　出土遺物観察表⑤・・・・・・・43
第21表　出土遺物観察表⑥・・・・・・・45
第22表　出土遺物観察表⑦・・・・・・・46
第23表　出土遺物観察表⑧・・・・・・・47
第24表　出土遺物観察表⑨・・・・・・・49
第25表　出土遺物観察表⑩・・・・・・・50
第26表　出土遺物観察表⑪・・・・・・・51
第27表　出土遺物観察表⑫・・・・・・・51
第28表　出土遺物観察表⑬・・・・・・・52
第29表　出土遺物観察表⑭・・・・・・・57
第30表　出土遺物観察表⑮・・・・・・・61
第31表　出土遺物観察表⑯・・・・・・・64
第32表　布目瓦の分類表・・・・・・・・64
第33表　14次調査出土の布目瓦の分類表①65
第34表　14次調査出土の布目瓦の分類表②65
第35表　出土遺物観察表⑰・・・・・・・66

写真図版

図版１　八方ケ岳の南側山麓に築かれた鞠智城
図版２　鞠智城の北側と西側をのぞむ
図版３　鞠智城の中心域をのぞむ
図版４　鞠智城の南側をのぞむ
図版５　鞠智城の南西側をのぞむ
図版６　鞠智城を南側からのぞむ
図版７　第19調査区（下段は13次調査 12区・16区）
図版８　36～40号建物跡
図版９　41号建物跡
図版10　42号建物跡
図版11　43号建物跡
図版12　出土遺物①（19調査区）
図版13　出土遺物②（19調査区）
図版14　出土遺物③（19調査区）
図版15　出土遺物④（19調査区 瓦）
図版16　出土遺物⑤（19調査区 瓦）
図版17　出土遺物⑥（20調査区）

鞠智城跡仮整備（12～14区・16区・17区・19区）

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調 査 主 体　熊本県教育委員会

調査責任者　大塚正信（文化課長）

調査・整理総括　隈　昭志（教育審議員）　松本健郎（文化財調査第2係長）

発 掘 調 査　大田幸博（参事）　山城敏昭（文化財保護主事）

報告書作成　大田幸博（参事）

調査事務局　松崎厚生（課長補佐）　木下英治（経理係長）　高浜保子（主事）

調 査 指 導　岡田茂弘〔千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館考古研究部長〕

小田富士雄〔福岡大学人文学部教授〕　河原純一〔文化庁記念物課主任調査官〕

武末純一〔北九州市立考古博物館副館長〕　甲元真之〔熊本大学文学部助教授〕

出宮徳尚〔岡山市教育委員会文化課長補佐〕乗岡　実〔岡山市教育委員会主事〕

田辺哲夫〔熊本大学講師〕　三島　格〔元福岡市立歴史資料館長〕

協　力　者　古閑三博〔県議会議員〕

吉里哲也〔菊鹿町教育長〕

〔菊鹿町教育委員会〕早田明徳（課長）　岩井賢太（係長）　早田弘隆（主事）

〔米原地区〕木庭春生（菊鹿町文化財保護委員長）　本田啓介（保護委員）

第2節　調査の経緯

(1) 通算して第14次調査にあたる平成4年度は、文化庁国庫補助事業と県の自主事業による重要遺跡確認調査の2本立てで行った。このシステムは平成2年度からのものである。

(2) 調査は平成4年7～8月に「内城（ないじょう）」の土塁線と長者山（ちょうじゃやま）の測量を行い、10月末から平成5年まで「長者原（ちょうじゃばる）」と「上原（うえばる）」の両地区で発掘調査を実施した。これに加えて、土塁線の一部を試掘した。

(3) 測量調査では、「佐官（さかん）ドン」を基点に「灰塚（はいづか）」まで総延長約545m分を図化し、縮尺200分の1の地形図を作成した。さらに長者山については、東側半分が江戸時代から現代に至る墓地で、同じく縮尺200分の1の地形図を作成すると共に墓石の位置も総て図中に記入した。

(4) 発掘調査は長者原519-1番地と上原445-1番地の両水田で行った。なお、調査区の番号は前年度からの継続で前者を19区、後者を20区とした。その結果、19区から鞠智城の終末期にあたる9世紀代の礎石建物が初めて検出された。20区では東端の法尻(調査区の東側は一段高い地形である)に4個の掘形が検出されただけに留まり、一定区域の広がりを持つ建物の空白地帯が見つかった。建物の分布状態を知る上で極めて貴重な調査結果である。

(5) 調査の変遷と第10次～13次調査で検出された建物跡の概要は第１～３表のとおりである。

(6) 19調査区からは礎石建物２棟(内、１棟は一部のみの検出)と掘立柱建物が６棟(内、２棟は一部のみの検出) 検出されたので、この調査区は埋め戻さず、借地を延長して、遺構を一般に公開した。同時に平成３年度の調査区(12～14区、16区、17区)も公開のため借地期間を再延長した。

年　度	調　査	調　査　主　体	調査内容・その他
昭和42年度	第１・２次	鞠智城調査団 調査指導：鏡山　猛 調査団長：乙益重隆	・米原台地の水田化工事(農業構造改善事業)、及び長者山の山林開墾に伴う緊急調査。 ・多量の礎石が掘り起こされる。
昭和43年度	第３次	〃	〃
昭和44年度	第４次	〃	・宮野礎石の露出、長者原礎石群の全面露出、長者山の測量を行なう。
昭和51年度	――――	熊本県教育委員会	・8月24日付けで、名称を「鞠智城跡」と改称。
昭和54年度	第５次	菊鹿町教育委員会	・町道（立徳～稗方線）拡幅工事に伴う事前調査。軒丸瓦片が出土。 ＊昭和42・43・54年度調査概要『鞠智城跡調査報告書』
昭和55年度	第６・７次	熊本県教育委員会	・文化庁国庫補助事業。 ・第６次では上原地区の発掘。 ・第７次では宮野礎石群の全面露出。 (昭和56年11月11日付けで県史跡に追加指定) ＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』
昭和61～62年度	第８・９次	熊本県教育委員会	・文化庁国庫補助事業。 ・第８次では航空撮影による米原地区の地形図作成作業。 ・第９次では長者山礎石群を調査。多量の炭化米と瓦が出土した。
昭和63年度 平成元年度	第10・11次	熊本県教育委員会	・文化庁国庫補助事業。 ・宮野礎石群周辺及び少監ドン地域の調査。
平成２年度	第12次	熊本県教育委員会	・文化庁国庫補助事業。 ・県の自主事業による重要遺跡確認調査も加わって、調査面積は大幅に増大した。 ・長者山東側裾部一帯(宮野礎石建築址を含む)の調査。 ＊鞠智城跡調査概報 ＊熊本県文化財調査報告第116集『鞠智城跡』
平成３年度	第13次	熊本県教育委員会	・継続して文化庁国庫補助事業と県の自主事業による重要遺跡確認調査を行う。 ・町道西側一帯の調査。13年ぶりに軒丸瓦が出土する。八角形建物跡２棟を検出。 ＊熊本県文化財調査報告第124集『鞠智城跡』
平成４年度	第14次	熊本県教育委員会	・文化庁国庫補助事業と県の自主事業による重要遺跡確認調査を行う。 ・鞠智城の終末期にあたる九世紀代の礎石建物を初めて検出。 ・上原地区から建物の空白地帯が見つかる。 ・「内城」の土塁線を測量し、一部について試掘を行う。 ＊熊本県文化財調査報告第130集『鞠智城跡』

＊：調査結果収録報告書名

第１表　近年の調査の変遷

号	桁行方向	間数		検出値（m）		柱間寸法（m）		備考
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	
1	N64° E	3	5	4.5 (15尺)	10.0 (33.3尺)	1.5 (5尺)	2.0 (6.7尺)	掘立柱(総柱)
2	N70° E	1	3	2.4 (8尺)	4.2 (14尺)	1.4 (5尺)	1.4 (5尺)	掘立柱(側柱のみ)
3	N20° E	2	3	6.0 (20尺)	9.0 (30尺)	3.0 (10尺)	3.0 (10尺)	掘立柱(側柱のみ)
4	N20° E	—	—	長軸 9.0 (30尺)	短軸 6.4 (21.3尺)	—	—	礎石(地業土のみ)
5	N74° E	3	4	6.9 (23尺)	12.0 (40尺)	2.3 (7.7尺)	3.0 (10尺)	掘立柱(総柱)
6	N72° E	3	6	6.0 (20尺)	16.4 (54.7尺)	2.0 (6.7尺)	2.4 (8尺)	掘立柱(側柱のみ)
7	N55° E	3	—	6.3 (21尺)	8.4 (28尺)	2.1 (7尺)	2.1 (7尺)	掘立柱(側柱のみ)
8	N67° E	3	6	6.0 (20尺)	3.4 (11.3尺)	2.0 (6.7尺)	1.7 (5.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
9	N67° E	2	—	6.0 (20尺)	7.5 (25尺)	3.0 (10尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱(側柱のみ)
10	N67° E	2	3	6.0 (20尺)	7.5 (25尺)	3.0 (10尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱(側柱のみ)
11	東西方向	5	6	11.0 (36.7尺)	12.6 (42尺)	2.2 (7.3尺)	2.1 (7尺)	礎石・掘立柱併用
12	南北方向	5	6	11.5 (38.3尺)	13.2 (43尺)	2.3 (7.7尺)	2.2 (7.3尺)	礎石・掘立柱併用
13	南北方向	3	4	7.5 (25尺)	10.8 (36尺)	2.5 (8.3尺)	2.7 (9尺)	掘立柱(総柱)
14	東西方向	3	5	7.2 (24尺)	14.5 (48.3尺)	2.4 (8尺)	2.9 (9.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
15	N84° W	3	—	7.2 (24尺)	11.6 (38.7尺)	2.4 (8尺)	2.9 (9.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
16	N53° E	3	10	7.8 (26尺)	26.6 (88.3尺)	2.6 (8.7尺)	2.65 (8.8尺)	掘立柱(側柱のみ)
17	N53° E	3	—	7.2 (24尺)	13.25 (44.2尺)	2.4 (8尺)	2.65 (8.8尺)	掘立柱(側柱のみ)
18	N60° E	3	—	8.1 (27尺)	20.8 (69.3尺)	2.7 (9尺)	2.6 (8.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
19	南北方向	1	5	6.3 (21尺)	15.0 (50尺)	—	3.0 (10尺)	掘立柱(側柱のみ)
20	N 6° W	3	4	7.2 (24尺)	9.6 (32尺)	2.4 (8尺)	2.4 (8尺)	礎石建物
21	N 6° W	3	4	7.2 (24尺)	8.8 (29.3尺)	2.4 (8尺)	2.2 (7.3尺)	礎石建物
22	N11° W	4	4	5.8 (19.3尺)	8.0 (26.7尺)	1.45 (4.8尺)	2.0 (6.7尺)	礎石建物
23	N11° W	4	6	5.8 (19.3尺)	12.6 (42尺)	1.45 (4.8尺)	2.1 (7.0尺)	礎石建物
24	N49° E	1	—	5.7 (19尺)	10.2 (34尺)	5.7 (19尺)	2.55 (8.5尺)	掘立柱(側柱のみ) 庇が付く。
25	N45° W	3	3	5.7 (19尺)	7.2 (24尺)	1.9 (6.3尺)	2.4 (8尺)	掘立柱(総柱)
26	N12° W	3	—	7.2 (24尺)	6.0 (20尺)	2.4 (8尺)	3.0 (10尺)	掘立柱(側柱のみ)

第２表　第10～13次調査で検出された建物跡一覧①

号	桁行方向	間数		検出値（m）		柱間寸法（m）		備考
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	
27	N48° W	1	—	5.7 (19尺)	10.0 (33尺)	5.7 (19尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱(側柱のみ) 庇が付く。
28	N47° E	2	5	4.2 (14尺)	9.0 (30尺)	2.1 (7尺)	1.8 (6尺)	掘立柱(側柱のみ)
29	N50° E	6	—	12.9 (43尺)	6.9 (23尺)	2.15 (7.2尺)	2.3 (7.7尺)	礎石・掘立柱併用 建物の本体が礎石で、 庇は掘立柱。

八角形建物　　（単位：m）

号	建物構造	内径(1)	内径(2)	外径	柱間		
					内径(1)	内径(2)	外径
30	礎石建物	6.4 (21.3尺)	8.9 (29.7尺)	——	2.7 (9尺)	3.7 (12.3尺)	——
31	掘立柱建物	——	——	——	——	——	——
32	掘立柱建物	3.5 (11.7尺)	5.5 (18.3尺)	8.5 (28.3尺)	1.4 (4.7尺)	2.3 (7.7尺)	3.5 (11.7尺)
33	掘立柱建物	3.7 (12.3尺)	6.1 (20.3尺)	9.0 (30.0尺)	1.5 (5尺)	2.5 (8.3尺)	3.8 (12.7尺)

〔備考〕 ① この他、20号礎石建物の下層に34号礎石建物を構成すると思われる礎石がある。
② さらに、22号礎石建物の下層に35号掘立柱建物を構成する掘形がある。この場合、この区画には21号・22号・35号の建物が重なり合う事になる。
③ この他、第9次調査までに、宮野礎石建物(県指定史跡)1棟分、不動倉礎石建物1棟分、さらに長者山に4棟分の礎石建物が検出されている。

第3表　第10～13次調査で検出された建物跡一覧②

第3節　調査区について

(1) 航空写真で見ると(写真図版1を参照)、米原(よなばる)台地は八方ケ岳(やほがたけ)の南側裾部にあって、円形状の低平な地形の様に思える。しかし、巨視的にはその解釈で良いが、個々の地形はかなり複雑なものとなる。四方は程度の差こそあれ、谷によって完全に囲繞された状態にあり、西側からの眺望は山そのものの形容である。

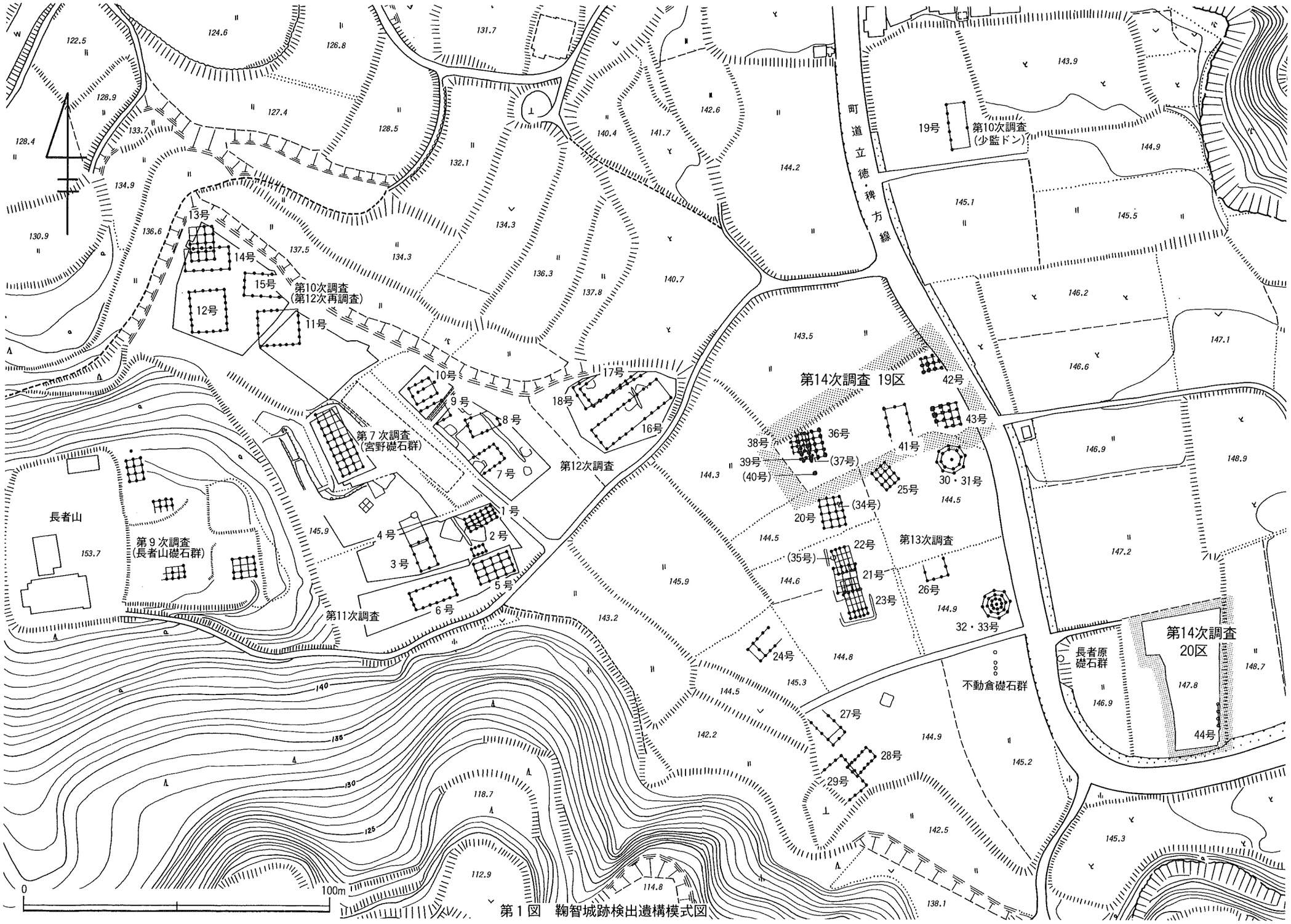
(2) 昭和57年に完成した町道(旧道の拡幅)は、台地の東寄りを南北方向に走行し、南端で東側へ大きくカーブを描き、台地を抜け出る格好になっている。

(3) 台地の上面域は、この町道を境に大きく異なる。西側一帯は町道と大方、同じレベルであるが、東側一帯は一段高く(町道に接する面で、約2mの比高差がある)、はっきりとした地形の違いがある。このため、地元では東側一帯を「上原(うえばる)」、西側一帯を「下原(したばる)」と呼び分けている。

字名は東側が「上原」で、「三ツ枝(みつえだ)」の一部がかかる。西側は「長者原(ちょうじゃばる)」と「屋敷(やしき)」である。

(4) 上原地区の上面域も一様な平坦地ではない。南東側域では、さらに一段高くなった所がある(段差面で約1mの比高差がある)。

(5) 下原地区は今日、概ね一様な平坦地であるが、北西隅のみに高台箇所が見られる(段差面で約1.4mの比高差がある)。



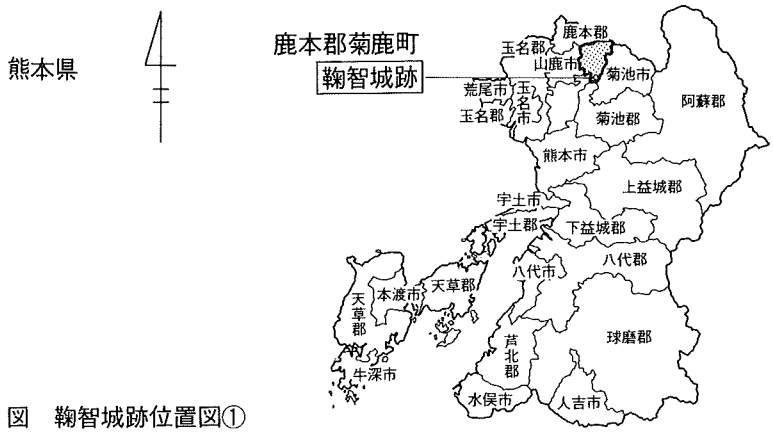
第1図　鞠智城跡検出遺構模式図

第Ⅱ章　遺跡の概要

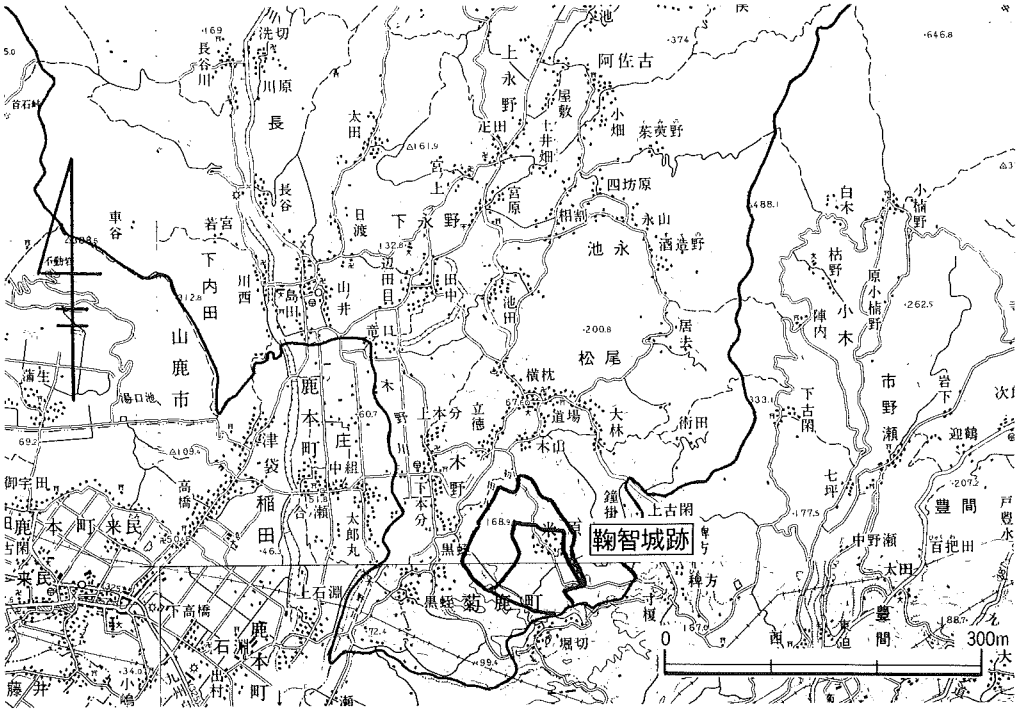
第１節　遺跡の位置

(1) 鞠智城は熊本県鹿本郡菊鹿町に所在する米原台地を利用して築城された古代山城である。国土地理院発行の２万５千分の１地形図『菊池』によると、城内の一隅を占める長者山の位置は図幅北から0.5cm、西から14.1cmの所にある。

(2) 福岡県の太宰府とは地図上の直線距離にして76km離れており、有明海へ注ぐ菊池川の河口からは20km程、内陸部へ遡った所にある。



第２図　鞠智城跡位置図①



第３図　鞠智城跡位置図②

第２節　鞠智城の歴史

六国史に見る鞠智城。

甲申。令(ソ)二太宰府(ヲ)上繕(セオホノキイクヽチ)二治大野基肆鞠智城(ヲ)一。(シム)

『続日本紀』文武天皇二年（六九八年）五月二十五日

丙辰。肥後國言。菊池城院兵庫皷自鳴。丁巳。又鳴。

『文徳実録』天安二年（八五八年）二月廿四・廿五日

肥後國菊池城院兵庫皷自鳴。同城不動倉十一宇火。

『文徳実録』天安二年（八五八年）六月廿日

肥後國菊池郡城境兵庫戸自鳴。

『三代実録』元慶三年（八七九年）三月十六日

〔参考例〕

群烏數百。噬二抜菊池郡倉舍葺草一。

『三代実録』貞観十七年（八七五年）六月廿日

＊『国史大系』吉川弘文館

西暦年号は報告書執筆者が挿入

第３節　鞠智城の城域について

(1) 築城に際しては、かなりの選地がなされている。城が築かれた米原台地が独立地形である上に、南側を除く三方は巨視的に八方ケ(やほがたけ)岳山系の山塊と支脈尾根に囲繞されており、完全な防禦地形の中にある。

地形的に開口部にあたる南側も、菊池平野とは標高にして100mに及ぶ比高差があり、さらにはその間に台（うてな）台地がワンクッションとして挟まる所に絶妙の選地がある。

(2) 朝鮮式山城の定義に基づき、米原台地の上面域を中心に土塁線－崖線－３つの城門によって囲繞される「内城(ないじょう)」が真の城域である。これに加えて、西側の「大門(だいもん)(じゃあもん)」口と南側の屏風岩の土塁ライン、さらには米原台地を取り巻く迫地や深谷を加えた一つの独立地形を「外城(がいじょう)」域と考える必要がある。これらが鞠智城の内郭である。

(3) さらに、この内郭を補うものとして、人工の手が加わったと見られる自然地形の範囲が外郭である。土塁線は西側（外郭①）と東側（外郭②）に推定される。

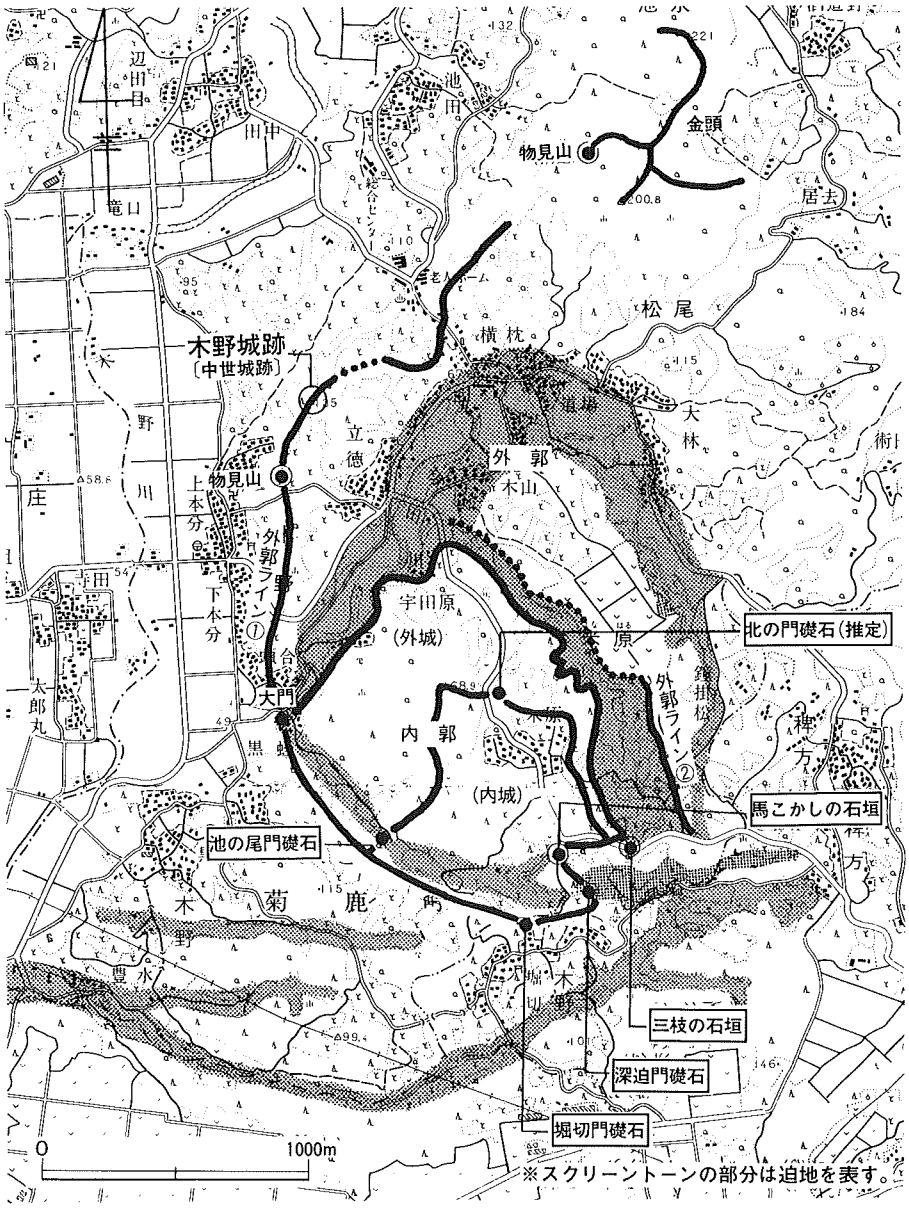
外郭①は「大門」口に端を発し、尾根線を加工した土塁線と丘陵の崖線を加えた防禦ラインである。一方、外郭②は城の搦手にあたる鐘掛松（かねかけまつ）の土塁線である。

(4)規模については、次の通りである。

〔内郭〕　内城：最大幅(東西)866m、最長(南北)982m、全周3.7km、面積55ha

外城：最大幅(東西)1.55km、最長(南北)1.13km、全周約5.82km、面積70.4ha

〔外郭〕　外郭①は全長2.4km、外郭②は全長0.9km



第４図　鞠智城跡城域図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　第14次調査の概要

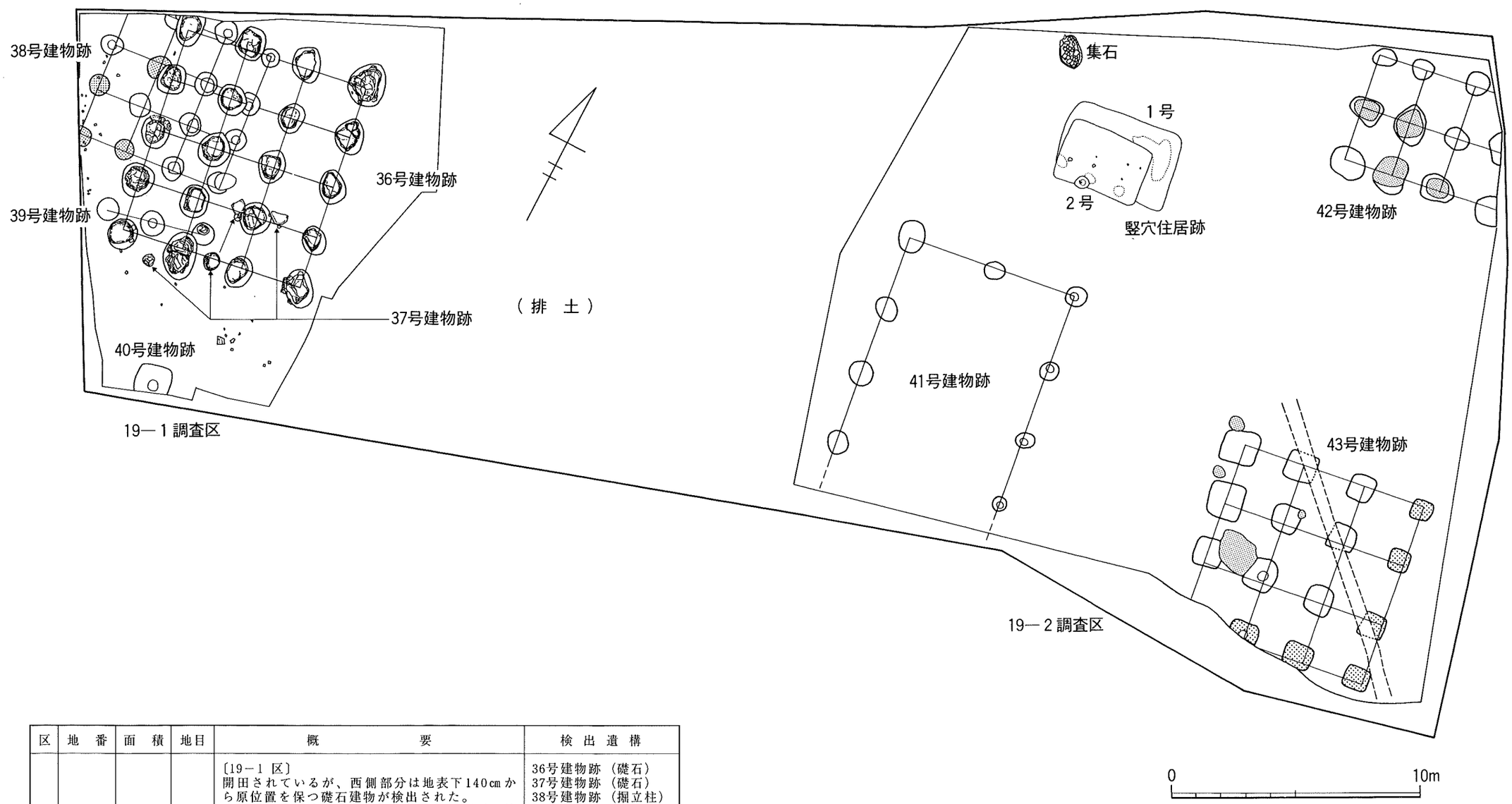
〔1〕平成４年度・第14次調査は、前半に内城の西縁となる土塁線①の測量調査（縮尺200分の1で、コンタは50cm）を行った。その範囲は北から南へ通称、佐官ドン→涼みケ御所→灰塚の全稜線に及び、さらに土塁線外となる長者山の全面測量を行った（測量図は29頁～34頁）。

〔2〕後半の調査は、去年度の調査区の周辺を行い、16調査区（北側八角形建物跡を検出）の北側に19調査区を設置し、さらに町道を挟んで東側の高台域に20調査区を設置した。調査区の番号は平成３年度の第13次調査に一連するものである。なお、19調査区は排土の関係で、調査区が二分される結果となったので、西側を19－1 調査区、東側を19－2 調査区に細分した。各調査区における遺構の概要は第５・６表のとおりである。

19・20調査区からは計９棟の建物跡が検出された。建物跡の概要は第４表のとおりである。

号	桁行方向	間数		検出値（m）		柱間寸法（m）		備考
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	
36	N９°W	3	4	7.5 (25尺)	8.8 (29.3尺)	2.5 (8.3尺)	2.2 (7.3尺)	礎石建物・総柱
37	――	―	―	――	――	――	――	礎石建物（36号に先行）
38	N６°W	(3)	(3)	5.7 (19尺)	6.0 (20尺)	1.9 (6.3尺)	2.0 (6.7尺)	掘立柱建物・総柱 (全体規模の確定には至らず)
39	――	(2)	―	3.8 (12.7尺)	――	1.9 (6.3尺)	――	掘立柱建物 (一部のみの検出にとどまる)
40	――	―	―	――	――	――	――	掘立柱建物 (38・39号に先行)
41	N８°W	(2)	(3)	7.0 (23.3尺)	9.0 (30尺)	3.5 (11.7尺)	3.0 (10尺)	掘立柱建物 (全体規模の確定には至らず)
42	N８°W	(2)	(3)	4.4 (14.7尺)	6.0 (20尺)	2.2 (7.3尺)	2.0 (6.7尺)	掘立柱建物 (全体規模の確定には至らず)
43	N８°W	(3)	(3)	7.5 (25尺)	7.5 (25尺)	2.5 (8.3尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱建物 (全体規模の確定には至らず)
44	――	(3)	―	7.2 (24尺)	――	2.4 (8尺)	――	掘立柱建物 (一部のみの検出にとどまる)

第４表　第14次調査で検出された建物跡一覧

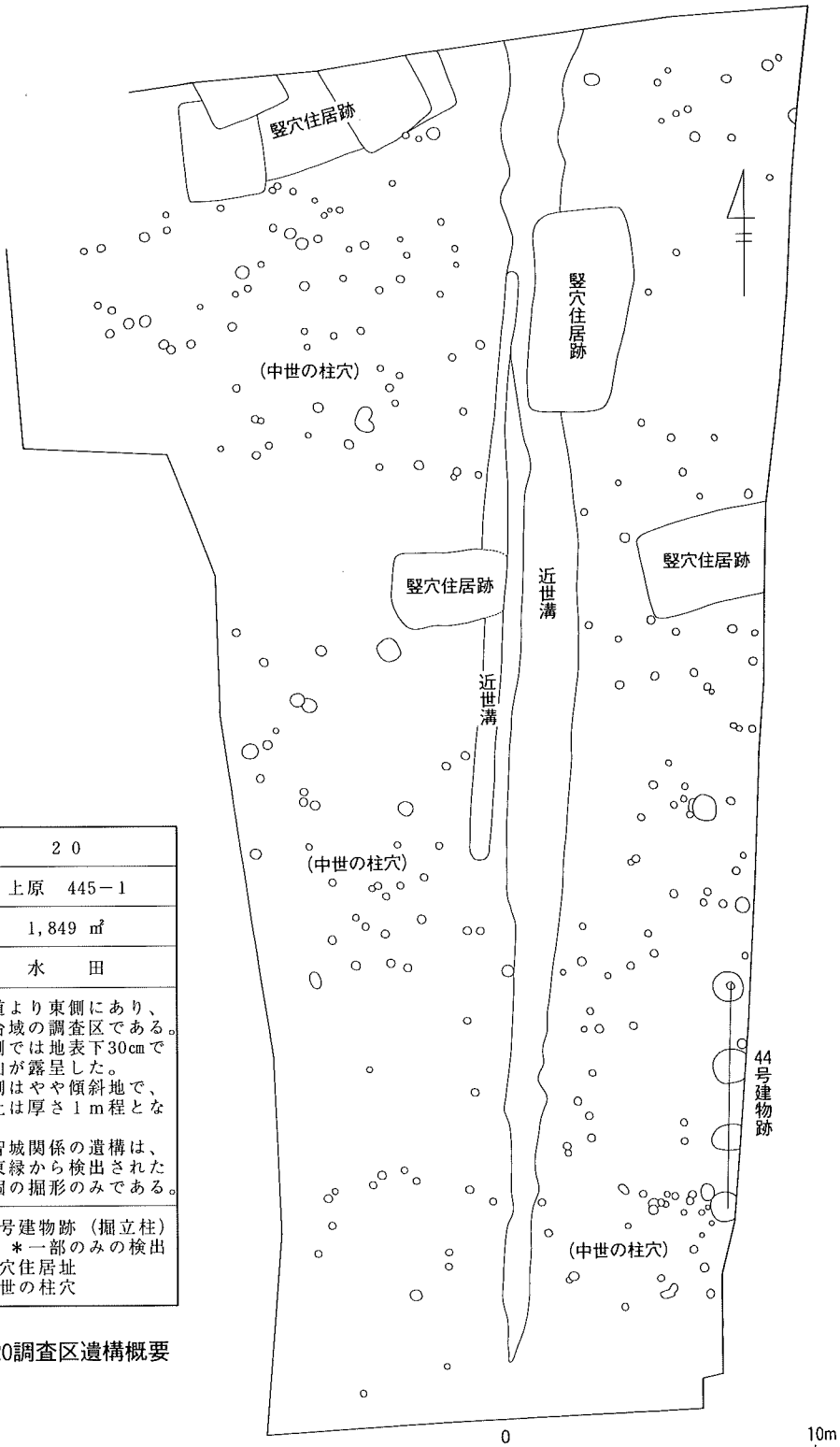


第5図　19調査区実測図

区	地　番	面　積	地目	概　　要	検出遺構
19	長者原 519－1	1,486㎡	水田	〔19－1 区〕 開田されているが、西側部分は地表下140㎝から原位置を保つ礎石建物が検出された。 さらに、下層遺構として掘立柱建物の掘形が検出された。	36号建物跡（礎石） 37号建物跡（礎石） 38号建物跡（掘立柱） 39号建物跡（掘立柱） 40号建物跡（掘立柱）
				〔19－2 区〕 地山はローム層土で、地表下25～110㎝で掘立柱建物が計3棟検出された。 その他、竪穴住居址と集石が検出された。 地山は東から西へ傾斜している。	41号建物跡（掘立柱） 42号建物跡（掘立柱） 43号建物跡（掘立柱） 竪穴住居址 集石

＊37・39・40号は一部のみの検出。

第5表　19調査区遺構概要



第6図　20調査区実測図

区	20
地番	上原　445－1
面積	1,849 ㎡
地目	水　田
概要	町道より東側にあり、高台域の調査区である。南側では地表下30cmで地山が露呈した。北側はやや傾斜地で、表土は厚さ1m程となる。鞠智城関係の遺構は、南東縁から検出された4個の掘形のみである。
検出遺構	44号建物跡（掘立柱） ＊一部のみの検出 竪穴住居址 中世の柱穴

第6表　20調査区遺構概要

第２節　検出遺構

〔1〕 36号建物跡

① 19－1 調査区の地表下140cmから検出されたもので、Ｎ９°Ｗ、３間×４間の総柱・礎石建物である。梁行7.5m(25尺)、桁行8.8m(29.3尺)の大きさで、柱間は梁行で2.5m(8.3尺)、桁行で2.2m(7.3尺)を測る。

建物を構成する礎石の中で欠けているものは無く、20個全部が検出された。石材は大部分が花崗岩で、６個(Ｓ２・Ｓ４・Ｓ６・Ｓ７・Ｓ10・Ｓ16)が安山岩であった。

礎石の上面は、丁寧な整形で平坦面を有するものが５個(Ｓ１・Ｓ５・Ｓ13・Ｓ14・Ｓ17)、整形されているがやや凸凹面を残すものが６個(Ｓ７～Ｓ９・Ｓ11・Ｓ15・Ｓ20)、非常に粗い整形で凸凹が目立つものが４個(Ｓ４・Ｓ６・Ｓ10・Ｓ16)、整形されているが自然面に近いもの(Ｓ12)、抉った感じで平坦面が確保されているもの(Ｓ18、先にあげたＳ14も僅かに抉られている)、その他、特異な形状のものが３個(３段に分かれるものがＳ19、亀の甲羅の様なものがＳ２、中央部に稜線があり両側に傾斜するものがＳ３)ある。

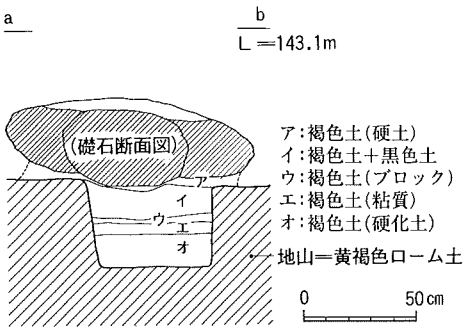
側面は、四側面とも自然面を保つものが２個で(Ｓ10・Ｓ15)、他のものはすべて割ったり、面取りされた痕跡があった。この中で特に８個(Ｓ１・Ｓ２・Ｓ９・Ｓ11・Ｓ13・Ｓ17・Ｓ19・Ｓ20)は直に大きく面取りされた状態にある。

その他、礎石の上面にヒビが入ったり、２つに割れているものがあった。Ｓ３・Ｓ10・Ｓ14・Ｓ17の４個で、これは36号建物跡に特有な現象である。

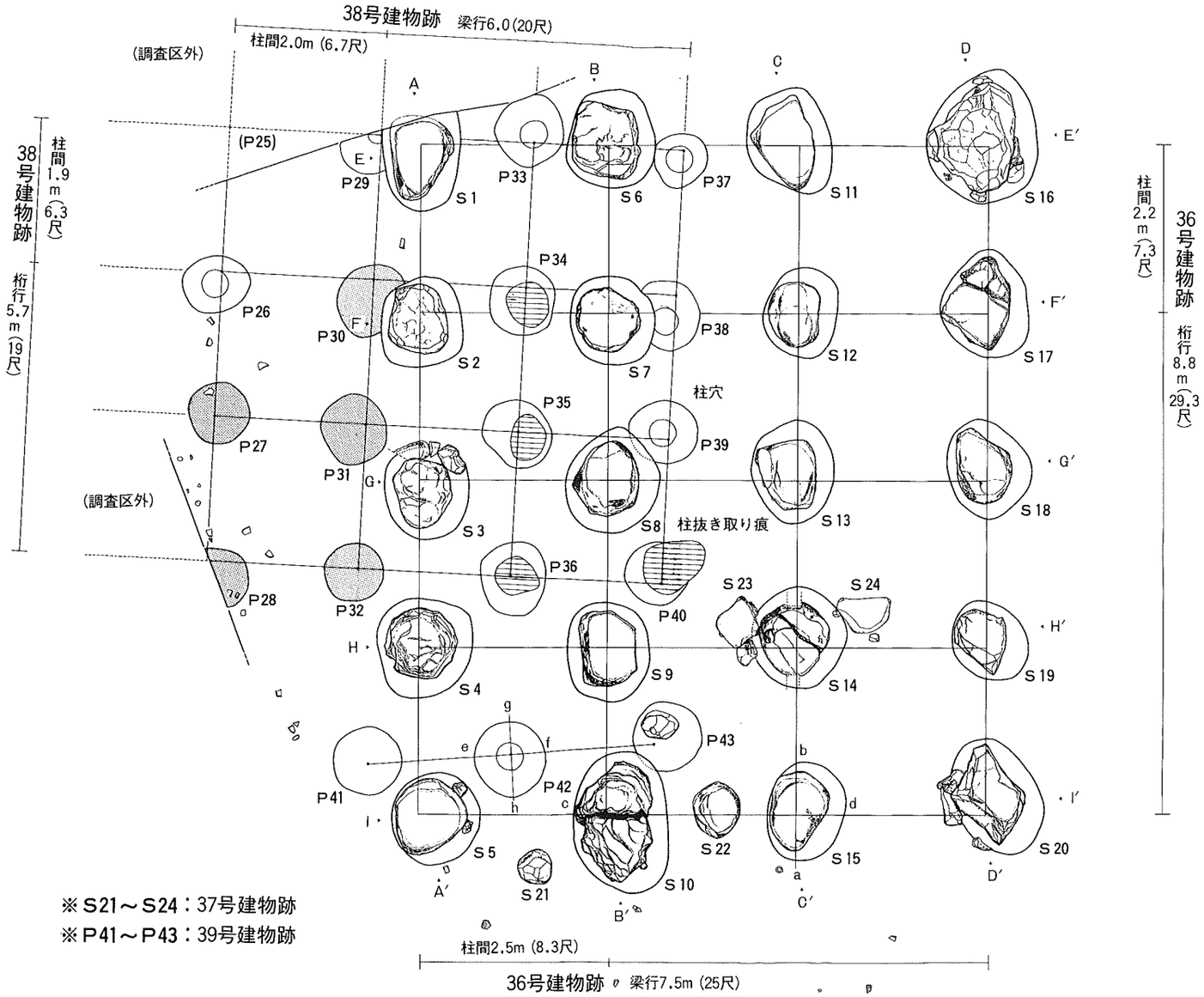
② 礎石の座り方にも大きな特色がある。17個の礎石(Ｓ２・Ｓ５・Ｓ14の３個を除く)が傾いている事で、これまで検出された礎石建物跡に見られなかった現象である。特に南隣りの20号・21号建物跡の礎石とは際立った違いを見せた(両建物跡の礎石の場合、極めて安定した座り方をしている)。礎石の傾き方向は、北側へが最も多く10個(Ｓ３・Ｓ６・Ｓ７・Ｓ８・Ｓ９・Ｓ11・Ｓ15・Ｓ17～Ｓ20)を数えた。この他、北西側に傾くものや(Ｓ４)、北東側に傾くもの(Ｓ13)があるので、大半の礎石は北方向へ傾斜している事になる。

何故、この様な現象が生じたのであろうか。大きな疑問として残る。

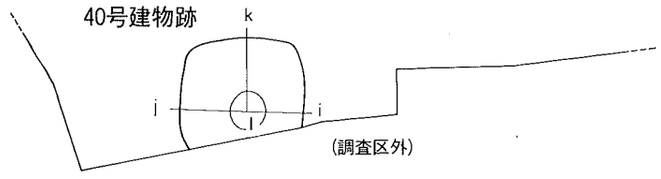
③ 20個の礎石すべてから地業穴が検出された。礎石の形状にあわせた掘形であった。この事により、礎石を建築現場へ運び込んだ後に、地業穴を掘り窪めた事がわかる。Ｓ15の地業穴を四分割したが、埋土は版築の状態にあり、５層に分層できた。版築土は地盤の褐色ローム土を主体にしたものであったが、前述の様に大方の礎石が傾いて



第７図　Ｓ15地業穴断面図

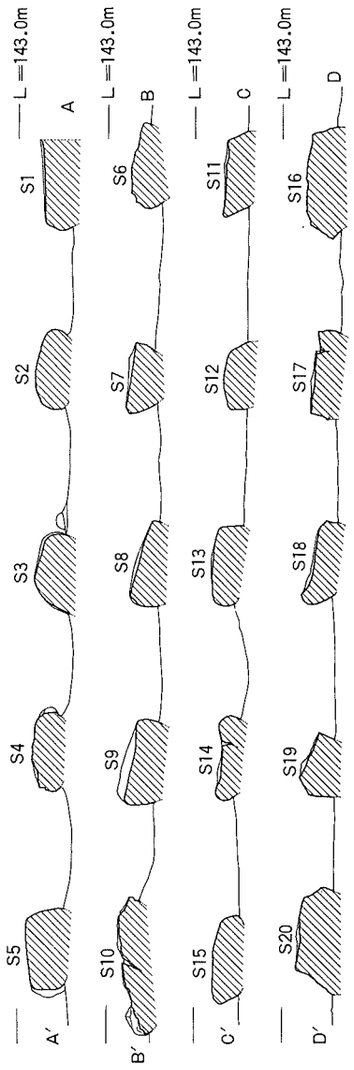


参照
- S 15地業穴断面図(a —b)：14頁第7図
- S 10—S 21—S 15断面図(c —d)：20頁第9図
- P 42断面図(e —f , g —h)：21頁第10図
- 40号建物跡掘形断面図(i —j , k —l)：22頁第11図

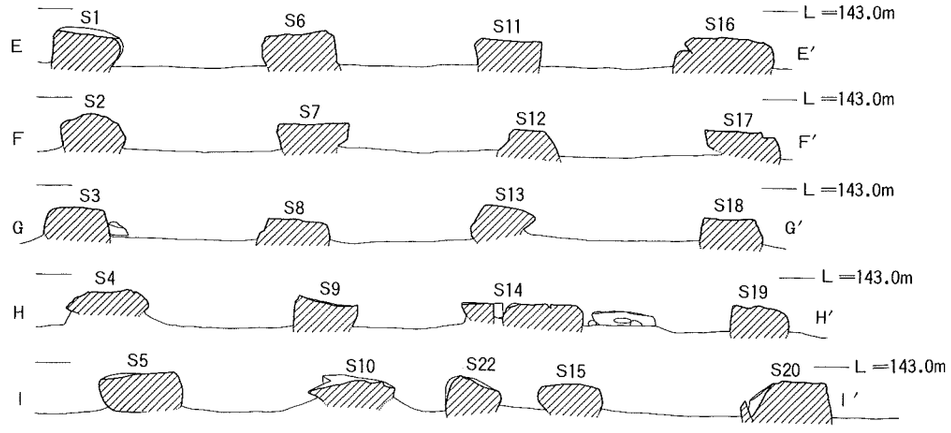


0　5 m

第8図　19—1調査区遺構実測図



36号建物跡　礎石断面図(南—北)



36号建物跡　礎石断面図(西—東)

いる事は、この版築の仕方が悪かった事になる。真実、先年の第12次調査で11号建物跡を検出したが、この時、四分割した礎石の地業土は比べものにならぬ程、バリバリの硬土であった。

④ 個々の礎石は太目で、最大クラスのものはＳ16が長軸146cm、短軸104cm、Ｓ10が長軸159cm、短軸81～97cmであった。対して、最小クラスものはＳ７が長軸85cm、短軸82cm、Ｓ12が長軸86cm、短軸66cmの大きさであった。総じて礎石自体に重量感はなく、扁平な岩石を利用したものが５個(Ｓ４・Ｓ８・Ｓ10・Ｓ14・Ｓ15)あった。

⑤ ４個の礎石(Ｓ３・Ｓ５・Ｓ16・Ｓ20)からは根固め石が検出された。しかし良く知られた礎石を軸とした環状的な配列では無く、単発的に礎石の側面を固めるものであった。これは第13次調査の20号・21号建物跡のそれと同様な検出状況である。石材は礎石に利用した岩石の破片であったが、Ｓ３の場合、縄文時代の石皿が転用されていた。

⑥ 36号建物跡の礎石も20号・21号建物跡と同様に側面の大部分が露呈の状態である事が判明した。この事は第13次調査でも大きな問題点であったので、今回も慎重に対処した。

結果として、調査区の北壁にＳ１の一部分が埋まっており、この土層セクションからも前年度の調査結果と同一である事がわかる。さらに礎石を覆っていた土層からも中世遺物の出土をを見ている(主な遺物：52頁 第29図 No.101～110)。

⑦ 部分的に叩き締められた感じの褐色ローム土が残っている。これについては、礎石建物全体の地業に関連するもので、化粧土的な残土と思われる。⑥の所見と矛盾しそうであるが、礎石を覆い尽くすような基壇状の地業がなされなかったにしろ、個々の地業穴を塞ぐ最低限度の地固めが行なわれたと解釈すればよい。

⑧ Ｓ10とＳ15の中間位置にやや小振りであるが、礎石状の岩石(Ｓ22)が座っている。これに類似するものはＳ14の周辺にもあり(Ｓ23・Ｓ24)、無視出来ない状況にある。同じ様な事は20・21号建物跡の礎石列にも見られた。今回も同様な見解を示さざるを得ないが、36号建物跡と比較した場合、礎石の大きさからして、かなり小さな建物となるわけで、疑問が残る。かといって、根石の類でない事は確かである。

⑨ Ｓ10の地業穴から高台付きの土師器椀(44頁 第26図 No.53)が出土した。明らかに９世紀の平安時代のもので、この事により、36号建物跡は国書の『文徳実録』や『三代実録』に記載された記事内容と同一期である事が判明した。鞠智城の終末期に該当する遺構は今回が初めての発見である。

⑩ さほど多くはないが、調査区から布目瓦が出土している。終末期の瓦という事になるが、残念な事に大多数が破片である。しいて特色をあげれば、凸面はナデ調整が目立つ程度である。

⑪ 36号建物跡の礎石は、南隣りの20・21号建物跡と比べた場合、雑な整形で寄せ集めの観が強い。鞠智城の終末期を象徴する様な検出状況である。

No.	岩質	大きさ	地業穴	礎石の上面	礎石の側面	備考
S 1	花崗岩	長 104 短 35～84	長(124) 短 100	丁寧な整形により、滑らかな平坦面を有する。	西側面は直に面取りされている。 東側面を粗く割っている。 南側面は自然面を保ち、丸味を帯びる。	上面は南側へ傾く。 (比高差 6 cm)
S 2	安山岩	長 83 短 56～79	長 116 短 105	亀の甲羅の様な形状である。 中央部を南北方向に稜線が走る。	西側面は粗く直に面取りされている。 他の三面はやや丁寧に整形されている。	――――
S 3	花崗岩	長 92 短 40～72	長(120) 短 109	中央部を東西方向に稜線が走る。 南北両側へ傾斜する。	西側面は粗く面取りされている。	上面は全体的に北側へ傾く。(比高差12cm) 北側面に 3 個の根固め石。内一つは縄文時代の石皿、他は花崗岩の破片。
S 4	安山岩	長 95 短 92	長 129 短 126	非常に粗い整形で、凸凹面が目立つ。	西南隅を割っている。 他の側面は自然面のまま。	扁平な岩石を使用。 上面はやや北西側へ傾く。(比高差 8 cm)
S 5	花崗岩	長 104 短 79～87	長 119 短 115	S 1 と同様。	西側面を粗く直の状態に割っている。	東側面に 2 個の根固め石。(小礫を使用)
S 6	安山岩	長 95 短 72～90	長 129 短 115	S 4 と同様。	南側面は自然面を保つ。 他の側面は粗く割っている。	上面は北側へ傾く。 (比高差14cm)
S 7	安山岩	長 85 短 82	長 115 短 110	整形されているが、やや凸凹面が残る。	北側面と西隅を割っている。	礎石は逆台形状を呈する。 上面は北側へ傾く。 (比高差12cm)
S 8	花崗岩	長 102 短 87	長 129 短 121	S 7 と同様。 (南端でやや窪む)	割った痕跡があるものの、西側面に自然面が残る。	扁平な岩石を使用。 (側面は丸味を帯びる) 上面は北側へ大きく傾く。(比高差24cm)
S 9	花崗岩	長 98 短 71	長 131 短 108	S 7 と同様。	西側面に整形の痕跡あり。 西側面は直に面取りされて、非常に目立つ。	上面は北側へ大きく傾く。(比高差24cm)
S 10	安山岩	長 159 短 81～97	長 136 短 124	S 4 と同様。 (北側寄りで東西方向に割れている)	四側面は自然面を保つ。	扁平な岩石を利用。 上面は南西側へ傾く。 (比高差24cm)
S 11	花崗岩	長 117 短 78	長 140 短 109	S 7 と同様。	西側面は直に面取りされている。	上面はやや北側へ傾く。 (比高差 6 cm)
S 12	花崗岩	長 86 短 66	長 117 短 95	整形されているが、自然面に近い感じ。	南側面を大きく割っている。 他の側面は粗い割りがなされている。	上面は南側へ傾く。 (比高差 6 cm)
S 13	花崗岩	長 90 短 40～70	長 136 短 108	S 1 と同様。 (風化により器面の剥離が目立つ)	東・西側面は直に面取りされている。 北側面を粗く割っている。	東側面は逆形を呈する。 上面は北東側へ傾く。 (比高差 8 cm)

大きさ・地業穴・・・・・単位：cm、長：長軸、短：短軸

第 7 表　36号建物跡　礎石観察表①

No.	岩質	大きさ	地業穴	礎石の上面	礎石の側面	備考
S14	花崗岩	長 90 短 90 (ほぼ円形)	長 134 短 123	S1と同様。 僅かであるが、全体的に窪んでいる。 南西側のみ一段高い。 斜め方向にヒビ割れしている。	東側面に整形の痕跡。	扁平な岩石を使用。 (側面は丸味を帯びる)
S15	花崗岩	長 103 短 77	長 129 短 100	S7と同様。	四側面は自然面を保つ。	卵形の扁平な岩石を利用。 (側面は丸味を帯びる) 上面は北側へ傾く。 (比高差8cm)
S16	安山岩	長 146 短 104	長 177 短 148	S4と同様。	西側面を粗々しく割っている。 他の側面は粗い整形の痕跡。	北側面に3個の根固め石。(花崗岩1、安山岩1) 上面はやや東側へ傾く。 (比高差6cm)
S17	花崗岩	長 100 短 85	長 141 短 122	S1と同様。 北側半分は風化により剥離が進む。	南側面と東側面は直に面取りされている。 西側面に整形の痕跡。	上面はやや北側へ傾く。 (比高差8cm)
S18	花崗岩	長 102 短 25~74	長 124 短 107	西南隅を残して抉られている。 (平坦面は確保されている)	S6と同様。	丸岩が利用されている。 上面は北へ傾く。 (比高差20cm)
S19	花崗岩	長 90 短 70	長 109 短 93	割られて東側から西側へ3段に分かれる。	西側面と南側面は直に面取りされている。 南側面は非常に目立つ。	上面は北へ大きく傾く。 (比高差22cm)
S20	花崗岩	長 135 短 96	長 157 短 110	S7と同様。	東側面は自然面を保つ。 他の側面は粗く直に面取りされている。	南西隅に3個、南側面に1個の根固め石。 (いずれも花崗岩) 上面はやや北側へ傾く。 (比高差10cm)

大きさ・地業穴・・・・・単位：cm、長：長軸、短：短軸

第8表　36号建物跡　礎石観察表②

No.	岩質	大きさ	地業穴	礎石の上面	礎石の側面	備考
S21	花崗岩	長 47 短 45	——	——	——	S5とS10の間にあるが、中間位置より南側へずれる。
S22	花崗岩	長 71 短 58	——	狭い平坦面を有する。	東・南側面は直に面取りされている。 他の側面は粗く割ってある。	S10とS15の中間位置に座る。
S23	花崗岩	長 75 短 61	——	——	——	——
S24	安山岩	長 73 短 46	——	——	——	上面は北側へ傾く。

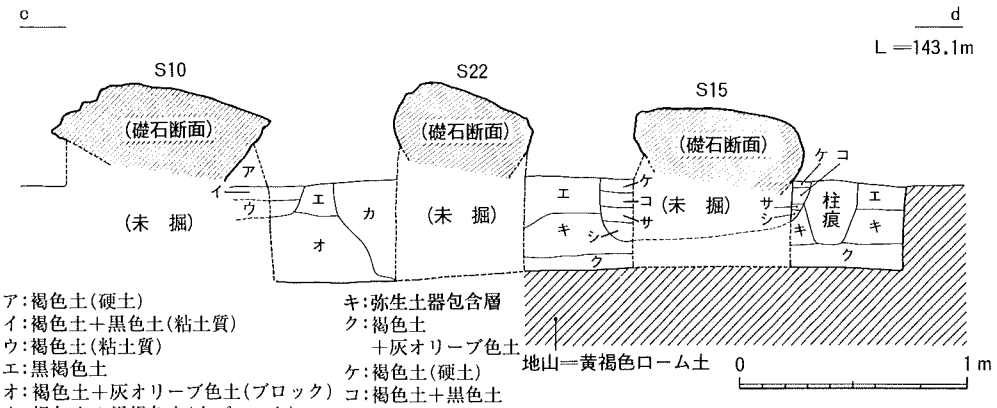
大きさ・・・・・単位：cm、長：長軸、短：短軸

第9表　37号建物跡　礎石観察表

〔2〕 37号建物跡

① 36号建物を構成するＳ10とＳ15の中間位置にＳ22が座っている。同様な事例は、第13次調査の20号建物の礎石間にも見られる。この場合、明らかに20号建物に先行する34号建物の残存礎石であった。36号建物についても、Ｓ22の他に３個の礎石状小岩（Ｓ21・Ｓ23・Ｓ24）が散在している所から、同建物に先行する礎石建物の存在が考えられる（37号建物跡）。

② Ｓ22は原位置を保った座り方をしている。Ｓ10とＳ15の間に小トレンチを入れて地層観察をした。結果として、地業穴に見合う落ち込みがＳ22の西側下で検出された。しかし、埋土は版築の状態になく、東側下では立ち上がりを捕らえられなかった。



ア：褐色土（硬土）
イ：褐色土＋黒色土（粘土質）
ウ：褐色土（粘土質）
エ：黒褐色土
オ：褐色土＋灰オリーブ色土（ブロック）
カ：褐色土＋黒褐色土（小ブロック）
　埋土は版築の状態にない
キ：弥生土器包含層
ク：褐色土
　＋灰オリーブ色土
ケ：褐色土（硬土）
コ：褐色土＋黒色土
サ：褐色土（ブロック）
シ：褐色土（粘土質）

第９図　Ｓ10－Ｓ22－Ｓ15　地層観察図

〔3〕 38号建物跡

① 19－1 調査区から検出された。桁行方向Ｎ６°Ｗで、総柱の掘立柱建物である。梁行３間と桁行３間分を検出したが、建物自体は北側と西側へさらに延びる可能性がある。

計測値は梁行で6.0m（20尺）、桁行で5.7m（19尺）、柱間は梁行で2.0m（6.7尺）、桁行で1.9m（6.3尺）を測る。

36号建物の地業穴が38号建物の掘形を切っている。

② 36号建物を建築する際に褐色ローム土を使用して地業が行なわれている。化粧土的な意味も兼ねていたのであろう。そのため掘形の確認が非常に困難である。従って、９個の掘形を確認するのにとどまった。残り５個（Ｐ27・Ｐ28・Ｐ30～Ｐ32）については今一つ線引きに確証が持てない（図中にスクリーントーンで示した）。なお、西側の桁行については、南北両端の掘形が未掘である。

③ 掘形の形状は主に隅丸方形と円形に分かれるが、中に楕円形のもの（Ｐ26）もある。大きさの最大クラスはＰ36で、長軸97cm、短軸85cm、最小クラスはＰ37で、長軸73cm、短軸70cmである。掘形からすれば建物の造りはやや小振りのタイプである。

④ 柱穴はP26・P33・P37～P39の5個から検出された。直径はいずれも35cmである。柱穴内には②で触れた褐色ローム土が流れ込んでいた。

⑤ 4個の掘形(P34～P36・P40)には柱抜き取り痕が確認された内、P40は掘形の外側から切り込まれていた。残りのものは、いずれも柱の周りを掘り込んだものであった。

〔単位：cm〕

掘形No.	形　状	長　径	短　径	柱　穴	備　　考
P 25	－	－	－	－	(欠)
P 26	楕円形	88	75	35	
P 27	－	－	－	－	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 28	－	－	－	－	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 29	－	－	－	－	S 1で掘形の大半が切られている。
P 30	－	－	－	－	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 31	－	－	－	－	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 32	－	－	－	－	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 33	隅丸方形	88	86	35	
P 34	隅丸方形	91	84	－	掘形内に柱抜き取り痕あり。
P 35	隅丸方形(やや歪)	86	78	－	掘形内に柱抜き取り痕あり。
P 36	隅丸方形	97	85	－	掘形内に柱抜き取り痕あり。
P 37	円　形	73	70	35	西端はS 6の地業穴に接する。
P 38	円　形	92	－	35	S 7の地業穴に切られている。
P 39	円　形	90	82	35	S 8の地業穴に切られている。
P 40	円　形	84	82	－	掘形の外側から切り込まれた柱抜き取り痕あり。

第10表　38号建物跡　掘形観察表

〔4〕 39号建物跡

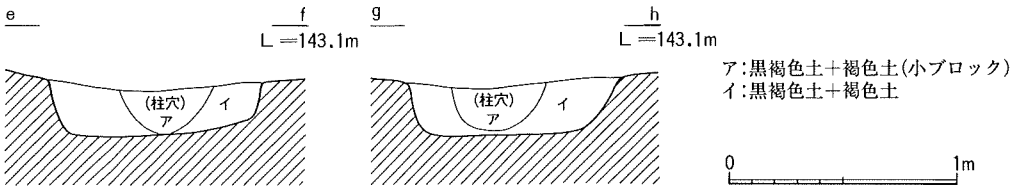
38号建物に隣接する建物で、3個の掘形を検出した。他の掘形は36号建物に伴う褐色ローム土に覆われて確認できなかった。計測値は東西方向で長さ3.8m、柱間は1.9mであった。

38号建物との間は2.4mしか離れておらず、本来、一体のものかも知れないが、東西方向の柱筋が若干南側へずれている所から別々の建物と推測した。掘形からして38号建物と同一程度の造りであったものと思われる。

〔単位：cm〕

掘形No.	形　状	長　径	短　径	柱　穴	備　　考
P 41	円　形	90	90	－	柱穴は確認できず。
P 42	やや楕円形	97	94	35	
P 43	円　形	92	92	－	小岩が掘形内に落ち込んでいる。

第11表　39号建物跡　掘形観察表



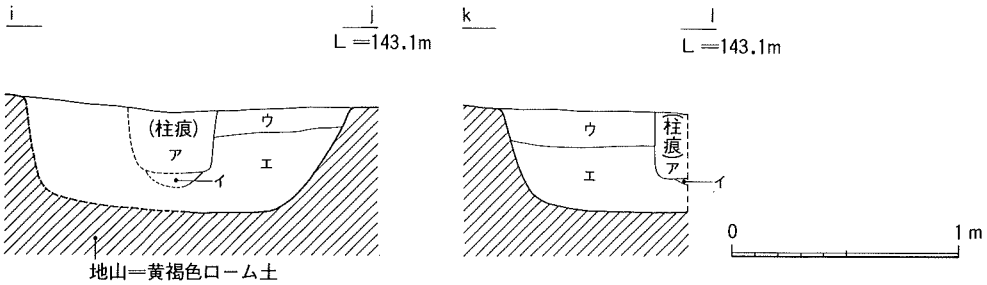
第10図　P 42断面図

〔5〕 40号建物跡

① 19－1 調査区の南西隅から1個の掘形を検出した。その部分は土層観察のため深掘りした所で、思わぬ結果をもたらす事になった。

② 掘形は地山面で確認されたもので、非常に大型の掘形である。長さは東西で140cm、南北は一部未掘であるが113cm分を測った。埋土は灰オリーブ色土がまだらに混入した状態にあった。柱穴は直径40cm程の大きさである。

③ 38号・39号に先行する建物で、19調査区では最も古い建物である。掘形の形状から大型建物が予想される。建物の変遷を考える上で極めて重要な結果である。



地山＝黄褐色ローム土

ア：〔柱痕〕明褐色土＋粘土粒子(少量)(軟土)
イ：〔柱が地面と接する部分〕暗褐色土
　＋茶褐色土(少量)(硬土)

ウ：暗褐色土＋茶褐色ブロック土
　(エと比較して黄褐色ブロック土の混入が多い)
エ：暗褐色土＋茶褐色土＋黄褐色ブロック土
　(炭化物が僅かに混じる)

第11図　掘形断面図

〔6〕 41号建物跡

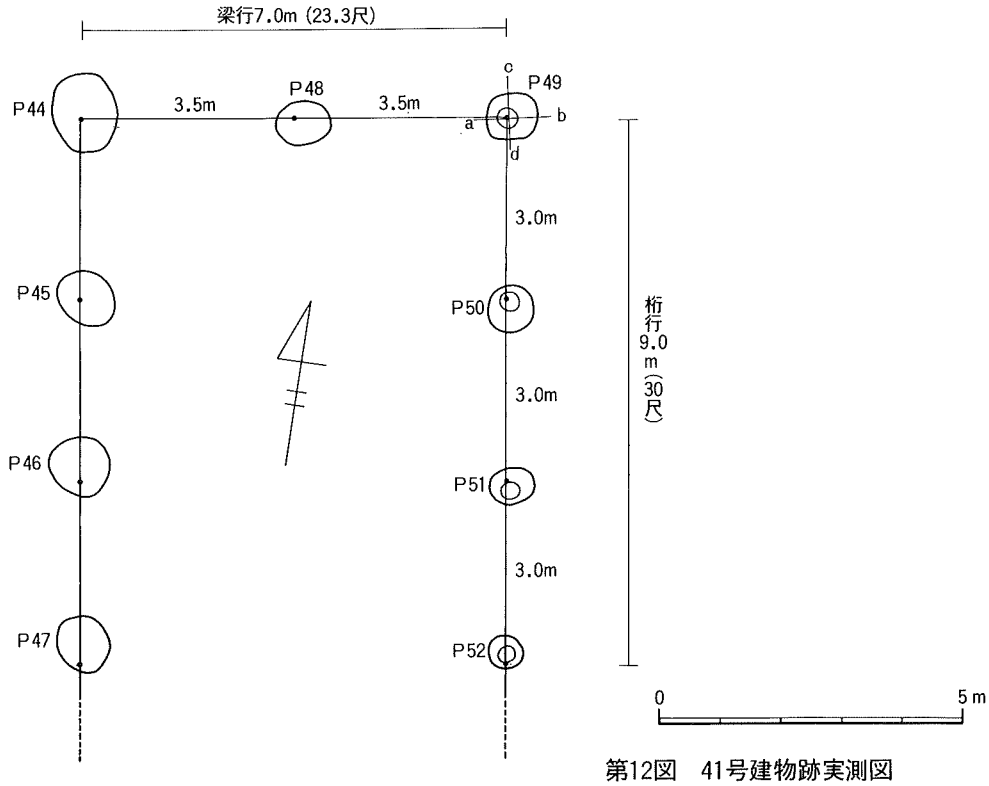
① 19－2 調査区から検出された中柱のない側柱のみの掘立柱建物である。桁行方向N 8° Wで、東側に隣接する42号・43号の両建物と柱筋を同じくする。

② 検出部分を見る限り、梁行2間、桁行3間の建物となるが、桁行は南側へもっと延びる可能性がある。

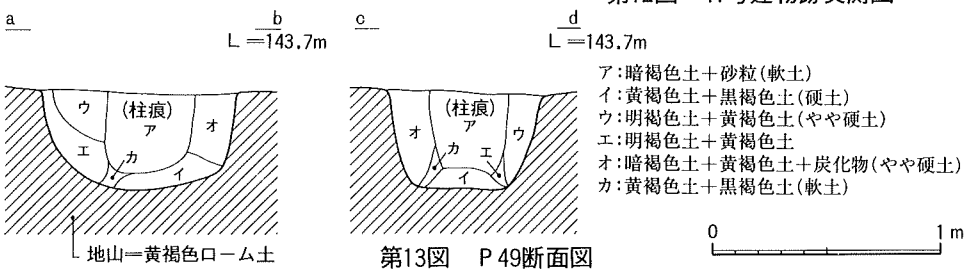
計測値は梁行7.0m(23.3尺)、桁行は検出部分で9.0m(30尺)、柱間は梁行で3.5m(11.7尺)、桁行で3.0m(10尺)を測る。

③ 当初、東側桁行を検出し、次いで西側桁行を調査したため混乱が生じた。両者を比較すると、掘形の大きさにはっきりとした違いがあるため、当初は別々の建物を想定したのである。それ程の差異が見られた。

④ 結果として、最終的に一棟分の建物である事が判明した。すなわち、東側桁行は柱が立ち腐れしたのに対し、西側桁行は柱が抜き取られたとの判断をした。後者については、柱抜き取りのため大きな穴が掘られたとの解釈である。ちなみに、前者の掘形については、すべてに柱穴が確認された。掘形自体は小振りな造りである。



第12図　41号建物跡実測図



第13図　P 49断面図

〔単位：cm〕

掘形No.	形　状	長　径	短　径	柱　穴	備　　考
P 44	楕円形	127	96	－	柱抜き取り穴。
P 45	楕円形	102	84	－	柱抜き取り穴。
P 46	楕円形	97	88	－	柱抜き取り穴。
P 47	楕円形	93	80	－	柱抜き取り穴。
P 48	楕円形	88	74	－	柱穴を確認できず。
P 49	隅丸方形	86	72	30	
P 50	円　形	76	75	30	
P 51	楕円形	77	60	30	
P 52	円　形	60	52	30	

第12表　41号建物跡　掘形観察表

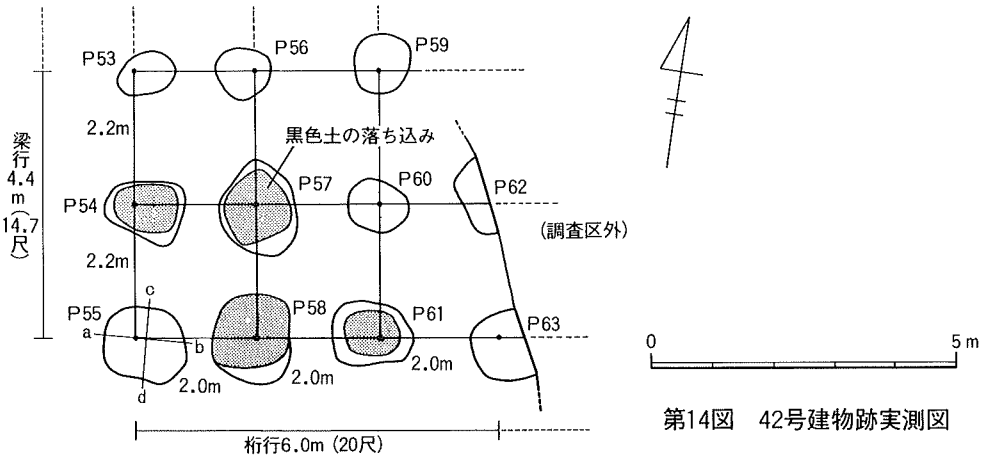
〔7〕 42号建物跡

① 19－2 調査区の北東隅から検出された建物である。建物自体は北側と東側へ延びる可能性がある。桁行方向N 8° Wで、検出部分は西側梁行で長さ4.4m(14.7尺)、柱間2.2m(7.3尺)、

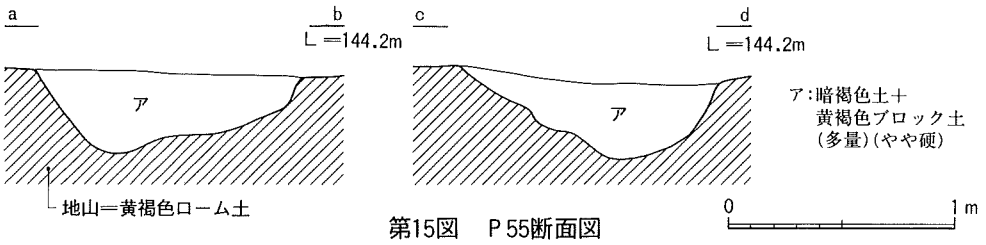
南側桁行で長さ6.0m(20尺)、柱間2.0m(6.7尺)を測る。

② 注目すべき事は、掘形から柱穴が一つも検出されなかった事である。埋土については、4個の掘形内に黒色土の落ち込みがはっきりと線引きできる(図中にスクリーントーンで示した)。黒色土は引き締まった土壌で、柱抜き取り穴を埋め戻した土とは考えにくい。今後に研究課題を残す建物である。

③ 南側の43号建物跡とは9mの距離がある。柱筋が通る所から、41号建物跡を含め、同一時代のものと考える。



第14図　42号建物跡実測図



第15図　P55断面図

〔単位：cm〕

掘形No.	形　状	長　径	短　径	柱　穴	備　　考
P 53	楕円形	95	68	−	
P 54	台形状	120	58〜96	−	黒色土の落ち込みあり。(長軸104cm、短軸82cm)
P 55	方　形	134	118	−	
P 56	方形(歪)	90	87	−	
P 57	楕円形(歪)	166	124	−	黒色土の落ち込みあり。(長軸110cm、短軸106cm)
P 58	−	−	−	−	黒色土の落ち込みあり。(長軸128cm、短軸120cm)
P 59	方形(歪)	128	−	−	
P 60	方形(歪)	100	83	−	
P 61	方形(歪)	121	107	−	黒色土の落ち込みあり。(長軸88cm、短軸74cm)
P 62	−	120	−	−	東側半分は未掘。
P 63	方形(歪)	98	91	−	東側半分は未掘。

第13表　42号建物跡　掘形観察表

〔8〕 43号建物跡

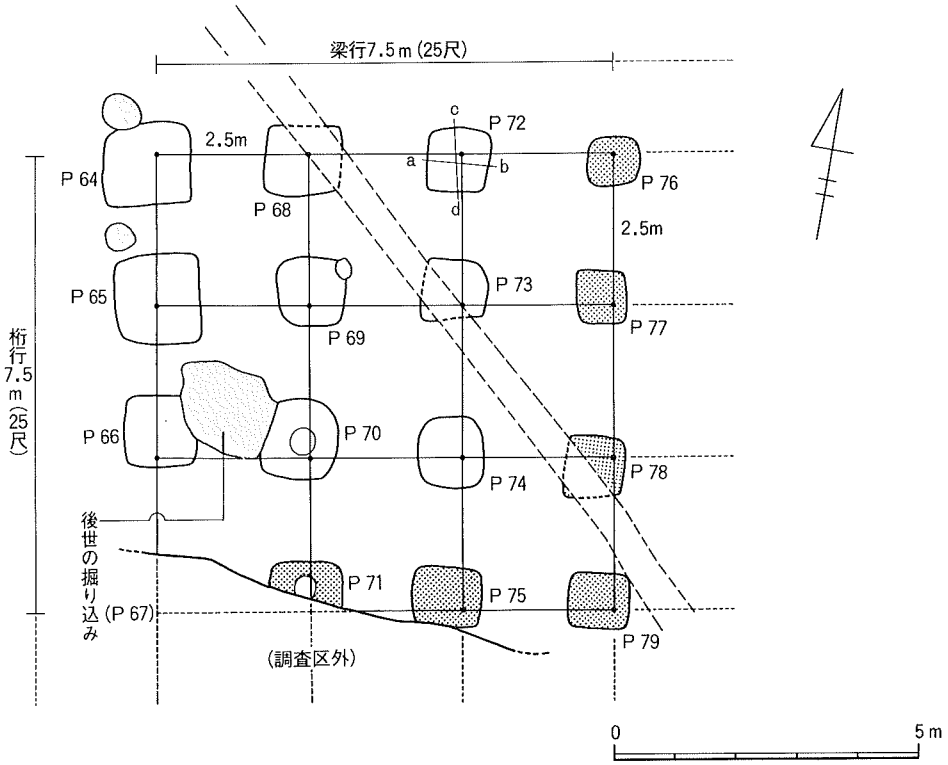
① 19－2 調査区の南東隅から検出された建物である。建物自体は南側と東側へ延びる可能性がある。桁行方向N８°Wで、検出部分に関しては、梁行３間、桁行３間の構造となる。

計測値は、梁行・桁行とも長さ7.5m(25尺)、柱間2.5m(8.3尺)を測る。

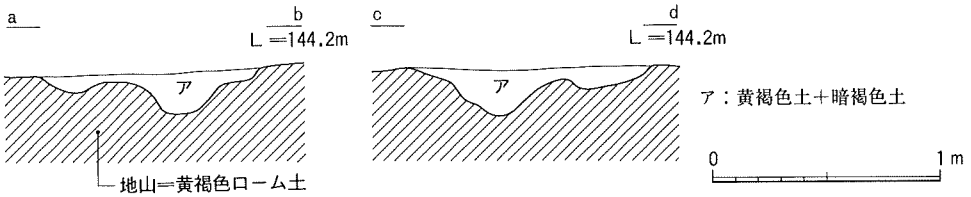
② 掘形のはっきりしているものは９個で、残り６個については線引きにかなりの困難が伴う(雨上がりに地山・ローム土面で、かろうじて推定の線引きが可能である)。後者については、図中にスクリーントーンで示した。

検出箇所については、後世、かなりの削平がおこなわれている事がわかる。

③ 柱穴がわかるものはP70とP71である。その他の掘形については、柱穴に関し、はっきりとした線引きができない。



第16図　43号建物跡実測図



第17図　P 72断面図

〔単位：cm〕

掘形No.	形　状	長　径	短　径	柱　穴	備　　考
P 64	方　形	147	140	−	
P 65	方　形	152	142	−	
P 66	方　形	120	116	−	
P 67	−	−	−	−	(欠)
P 68	方　形	124	120	−	
P 69	方　形	116	110	−	
P 70	方形(やや隅丸)	134	120	35	
P 71	−	−	−	35	柱穴のみはっきり確認できる。掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 72	方　形	106	103	−	
P 73	方　形	110	104	−	
P 74	方　形	116	106	−	
P 75	−	−	−	−	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 76	−	−	−	−	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 77	−	−	−	−	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 78	−	−	−	−	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)
P 79	−	−	−	−	掘形のラインは不確定。(推定線にとどまる)

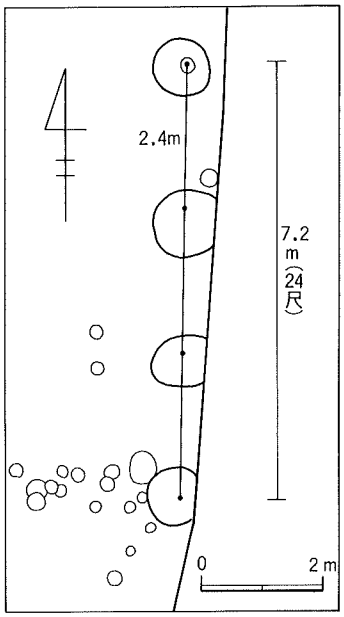
第14表　43号建物跡　掘形観察表

〔9〕 44号建物跡

① 20調査区の南東縁から4個の掘形を検出した。掘立柱建物の西側梁行部分に該当する。長さ7.2m(24尺)で、柱間は2.4m(8尺)を測る。

P81の掘形を四分割したが、深さは20cm程で、柱穴は検出できなかった。P80からは柱穴も確認されているので、単なる土坑の並列とは考えにくい。

② 掘形が段差面の裾部から検出された事は不可解である。ちなみに、調査区の東側は高さ2m近い法面となっている。検出状況からすれば、高所側に建物本体が埋没している事になる。この事が真実とすれば、調査区は後世かなり削平をうけた事になる。しかし、現況からすれば、段差面の2mを無関係とするような、大規模な造成工事があったとは思えない。現に調査区からは竪穴住居址や中世の柱穴が検出されている。



第18図　44号建物跡実測図

〔単位：cm〕

掘形No.	形　状	長　径	短　径	柱　穴	備　　考
P 80	円　形	92	90	25	
P 81	楕円形(？)	(104)	110	−	東端は未掘。
P 82	楕円形(？)	(90)	82	−	東端は未掘。
P 83	円形(？)	94	−	−	東端は未掘。

第15表　44号建物跡　掘形観察表

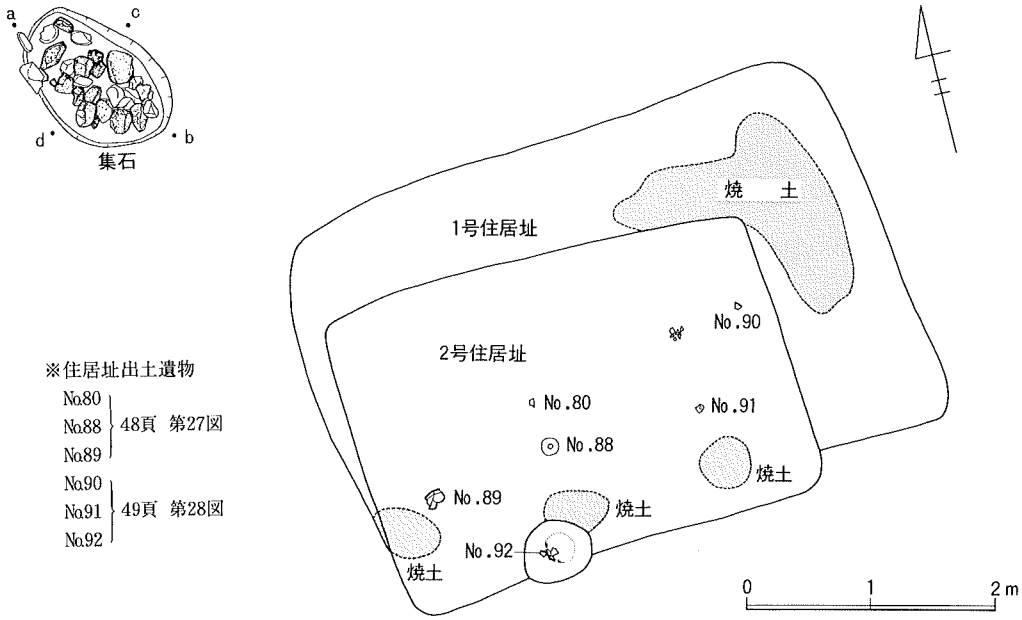
〔10〕 竪穴住居址と集石

① 竪穴住居址

19－2 調査区から、6世紀中葉～後半の竪穴住居址が2基検出された。切り合っているが、両者間にさしたる時期的な違いはないと思われる。

遺物実測図(48～49頁)に掲げた No.80・88～92 は2号住居址の覆土から出土した。1号住居址については図示しなかったが、広口小壺(土師器)の細片が出土している。

大きさは、1号住居址が 4.7m×3.05m、2号住居址が 3.5m×2.4mを測る。住居址は共に上層部が削平されて、床面のみの残存である。1号住居址からは焼土箇所が検出された。



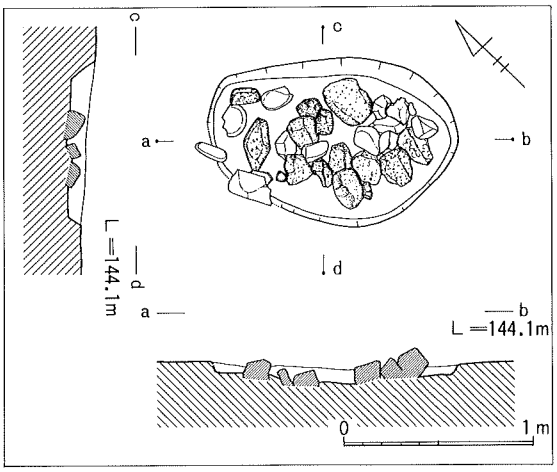
※住居址出土遺物
No.80
No.88
No.89
48頁 第27図
No.90
No.91
No.92
49頁 第28図

第19図 竪穴住居址実測図

② 集石

竪穴住居址の北東側から、土坑を伴う集石が検出された。集石は凝灰岩と軽石が大部分で、長軸133cm、短軸90cm、深さ10cm未満の皿状の土坑に投げ込まれていた。

遺物は出土していないので、時期的なものは不明である。但し、周辺の調査区から凝灰岩を並べた近世の排水路が見つかっているので、これに関連した遺構であるかも知れない。



第20図 集石実測図

第３節　土塁線の測量とトレンチ調査

１．佐官ドン

米原台地の西縁と北縁の一部を巡る土塁線の中で最高所を示す。今日、西側の山腹は大きな崖崩れをおこし絶壁となっている。現地に立てば土塁というよりは尾根線に見る頂きの観がある。標高168.89mで米原台地内の上原地区とは約22m、西側麓の迫地とは約114mの比高差がある。この箇所につき、第一次調査と第三次調査で発掘がなされている。調査結果は下記のとおりである。

〔第一次調査〕

礎石状の花崗岩が６個、土塁の裾に、ほぼ南北に並んで露出している。南側の１号石だけは原位置を保っていると思われる。調査によって、さらに７個の石が埋没している事が判明。床面に炭化物や焼土を伴っていた。

〔第三次調査〕

調査の目的は第一次調査の結果に基づき、建築遺構の有無を追求することと、土塁の切断作業によって人工的な遺構を確認することにあった。

13個の石の中で原位置をとどめるものは皆無である事を確認。礎石群があったとみるべきか疑問が残る。しかし、現地は平坦部が掘り広げられ、地積を拡張した形跡が認められるので、最終的に礎石建物があったと推察する。

佐官ドンの土塁は自然の尾根を加工して造られたらしく、外側は切り落としによる断崖で、深谷に望む。内側は車路が設けられ、階段状の斜面をなす。

トレンチ調査の結果、尾根の外側を切り落とし、あるいは土盛りしている事が判明。

２．佐官ドン～涼みケ御所の尾根線

この間は土塁線の観がある。佐官ドンよりやや下った所を尾根線が走行する。地形的には涼みケ御所寄りで西側に大きく張り出す箇所が目につく。この箇所は地表面も平坦に近く、人工的な色彩が濃い。見張り所に関連した何らかの遺構の存在が考えられる。

３．ゴンゲンさん

涼みケ御所に至る尾根線は、その直前に西方へ枝分かれをする。地形的には馬の背の様な形状をしており、土塁線そのものの観がある。先端部は小山状の高まりを見せ、上面は平坦である。この箇所につきゴンゲンさんと呼ばれている。礎石状の花崗岩も散在し、石祠が祀られている。このゴンゲンさんと佐官ドンの尾根筋でＵ字形の深谷が造り出される事になる。

ただし、このゴンゲンさんに至る尾根筋は鞠智城の土塁線ラインから外されている。地形的

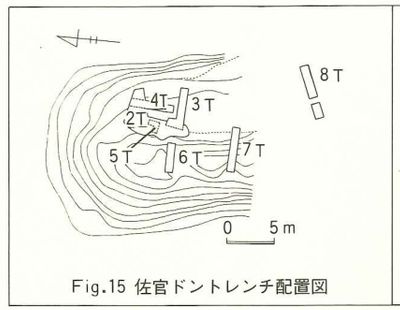


Fig.15 佐官ドントレンチ配置図

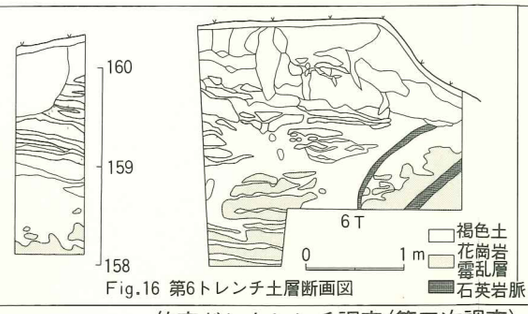


Fig.16 第6トレンチ土層断画図

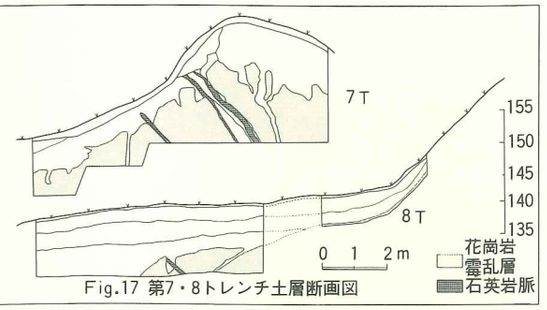


Fig.17 第7・8トレンチ土層断画図

佐官ドントレンチ調査（第三次調査）

熊本県文化財報告第59集『鞠智城跡』より再トレースした。

涼みヶ御所２トレンチ断画図

第21図　佐官ドン～土塁標柱箇所間地形測量図

に見て、馬蹄形状に巡る本来の土塁線からはみ出るためである。この点につき調査者として疑問が残る。

4．涼みケ御所

一見すれば中世城の様な景観である。お椀を伏せたような小山の山頂部分は平らに削平され、裾部に腰曲輪状の削平地が巡るからである。加えて、その間の山腹はいずれも削り落としの痕が顕著である。

故乙益重隆教授は、生前、調査者に「この箇所は、古代山城の土塁線を中世に城へ改修している」との見解を示された。

〔1－ a～d トレンチ〕

山頂部分に設定したトレンチである。表土の堆積土は数センチにすぎず、すぐに褐色ローム層土混じりの地山が露呈した。確たる遺構は検出されなかった。糸切り土師器が一片、出土したのみである(1－c)。この点に関し、中世的色彩がうかがえた。

なお、山頂の東縁にいずれも小規模なものであるが、土塁状の土盛りと溝が遺存していた。この遺構は木庭春生氏（菊鹿町文化財保護委員）の談によれば、明治時代の西南戦争時に造られた防備施設であるが、それを立証する手がかりは得られなかった。さらに同氏によれば今から20～30年前にこの山頂に掘った穴から炭が出土したとの事であった。しかし今回の調査ではそれらしき跡地の穴はなく、証言に疑問を持った。これまで「烽火の痕地ではないか」と語りつがれてきたが、トレンチ調査の結果では、何とも言えない状況にある。

ちなみに、中世遺物の出土により後世に改造した可能性は有とみた。

〔2トレンチ〕

山頂直下の東下裾部に設定したトレンチである。この地は地形そのものが腰曲輪的な状況を呈しており、中世城にありがちな周濠的、溝の埋没が考えられた。従って地形を縦断する形でトレンチを設定した。結果として土層断面図(第21図 左下)から、溝の存在を把握したが、肩部の土塁の土色が今一つ不確かで、やや疑問が残った。溝の埋土と掻き上げ土塁はいずれも花崗岩のばいらん土で土色の識別が困難であった。遺物の出土はなかった。

〔3～5トレンチ〕

涼みケ御所の地形は東側裾部において腰曲輪的なものが、そのまま、南西方向へ帯状にのびる事になる。端部にはワクド石という巨石が横たわり、信仰の対象となっている。

ここに3ケ所のトレンチを入れたが、結果を得る事はできなかった。地山はいずれもシラスで、3トレンチにつき、2トレンチからの溝は延びておらず、単なる傾斜地であった。4トレンチ・5トレンチは表土厚が20cm程で、シラスを切り込む遺構はなかった。いずれのトレンチからも遺物は出土しなかった。

5．涼みケ御所～土塁線標柱箇所間の尾根線

涼みケ御所の南端裾部にあたる土塁線は一旦、括れる格好となっている。仮に涼みケ御所を中世城の施設と目立てた場合、この様な地形には堀切の埋没が考えられる。従って、ここに3ケ所のトレンチ（6～8）を設定した。結果として、堀切の存在はなく、7トレンチから柱穴状の深い掘り込みを検出したにとどまった。遺物の出土はなかった。

6．土塁線標柱箇所

尾根線が小山状に盛り上がっている所で、ここに菊鹿町教育委員会が建てた標柱がある。柱には土塁線と明記されている。素人目には土盛りを連想させる様な地形である。ここに地形を縦・横に断ち割るトレンチを入れた。前者を9トレンチ、後者を10トレンチとする。

〔9－a・bトレンチ〕

地形の上面部分は厚さ数cmの表土を剥ぐと地山（花崗岩のばいらん土）が露呈した。杭跡の様な落ち込みは皆無であった。表土から極めて粗悪な中世土器の胴部片が出土した。

〔10トレンチ〕

土層断面を見るに表土の下は地山であった。幾度となく精査したが最終的に版築状態にはないとの判断をした。しかるに、この地形が土塁とするならば地形の削り出しという事になるが、その確証も掴めなかった。

7．土塁線標柱箇所～灰塚間の尾根線

この間の尾根線は、特に北側半分がまさに馬の背の様な地形である。この部分については、古代山城の土塁線にふさわしい。地形的にも城の外側にあたる西側斜面は急斜面で、内側の東側が緩斜面である。前者は削り落としの加工がなされ、後者の階段状地形は車路であろうとの解釈は、今日、定着した観がある。

灰塚寄りの箇所に尾根線を断ち割った古道部分があり、この部分について壁面を精査したが、やはり、版築状態になく、花崗岩のばいらん土そのものであった。土塁線標柱箇所と同一の調査結果である。

8．灰塚

地形的には尾根線の南西隅にあたる。小山状に大きく突き出ており、標高165mで佐官ドン箇所よりわずかに低い。土塁線はこれより南側山腹をかけ下って池の尾門礎と連結するというのが一般的な解釈である。しかし、尾根線そのものは東側へ向きを変え、長者山の墓地へ延びる事になる。見る限りにおいては、これも土塁線である。

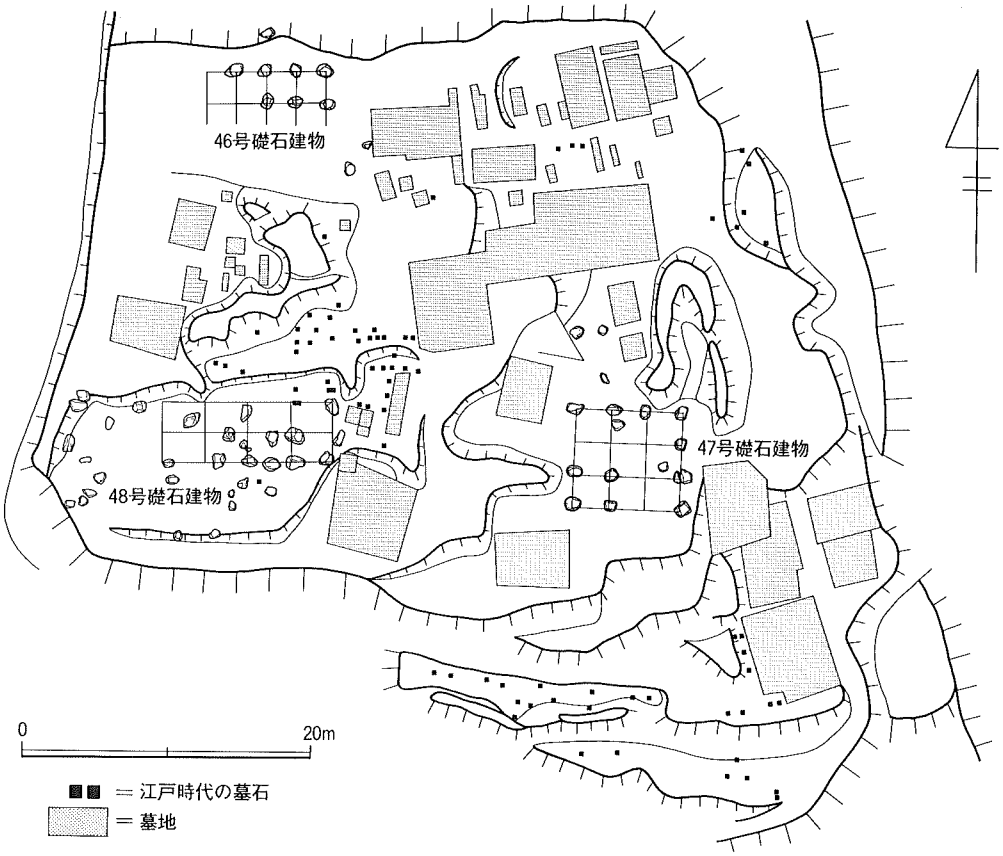
灰塚自体は非常に特異で、ピラミッドそのものの格好をした山である。

第22図　灰塚～長者山地形測量図

9．長者山

尾根線の東端部にあたる。ここだけは楯を伏せた丘の様な地形をしている。普通「長者山」と呼ばれているが、実際は、字・長者原地内の長者山であって、灰塚～池の尾門礎間の尾根にも字長者山（大字木野）が存在する。

山の東側半分は村の共同墓地で、西側半分は削平されて牛舎となっている。墓地内には少なくとも４棟分の礎石建物が確認できる。礎石の配列からすれば、水田や畑地箇所から検出された礎石建物とは異なり、構造的に見て、プレハブ的な要素がうかがわれる。



第23図　長者山実測図

第Ⅳ章　出土遺物

1．19調査区

〔須恵器〕

1～22は蓋であるが、口径が復元できるものは6点(1～6)に留まる。最大口径は4・5で15.0～15.1cm、最小口径は2の10.1cmである。1には宝珠摘みが付く。

この中で18～22は身受けを欠く。身受けを有するものについては、ローリングの影響もあろうかと思われるが、先端部が鋭角なもの(1・2・7～11)、丸味を帯びるもの(3・5・6・12・13・15)、扁平なもの(14)、とに分かれる外、非常に小さく内傾するもの(4・17)、丈が高く弯曲しながら外傾するもの(6)とに細分される。

蓋の下端部は弯曲するもの（1・4・5・6・8～11・13・17・18）がある。この中で13はその度合いが最も大きい。

器壁が肉太なものは5・17で、5は厚さ9.0mm、17は厚さ8.0mm。対して薄壁なものは22で、厚さ2.5mmである。

23は高台付きの椀である。付け高台で、弯曲しながら外側へ張り出す。復元底径9.4cm。

24は杯である。底部は肥厚し、外底端は尻上がりでやや角張る。底径7.0cm。

25～42は甕の破片である。外器面の叩きは格子目(26・27・29・30～32・34・35)、短冊(33)、平行(37～41)の3種がある。内器面は大方が円文叩きで、33と36が平行叩きとなる。

〔土師器〕

43～52・69はヘラ切りの杯であるが、69に限り糸切り離しの可能性もある。器形も舟形で、中世らしき感じもする。53～67は高台付きの椀である。

杯の中では43が軽量土器で、厚さ3.0～4.0mm、内底面は大きく窪む。46は掘形(19区の掘立柱建物)から出土した。復元底径6.0mm。49・50・52は平底である。

高台付きの椀は66を除き、いずれの高台も外側へ張り出している。66は例外的に直立する。53は礎石の地業穴(19区の礎石建物)から出土した。復元口径13.8cm、器高4.5cm、底径9.1cm。

〔弥生土器〕

70～76は壺、77～87は甕、88・89は小壺である。70～72の頸部は肉太で大きく外弯し、上位の断面は方形を呈する。73～76の頸部は逆「く」の字を呈する。

77～80の口縁部は薄壁でやや外弯する。81～85は胴部で、85には突帯が付く。85の口唇部は大きく肥厚し、小長円形の押文がある。

88は脚部で、器面に3つの小穴が開いている。89は復元口径15.8cmで、全体的に肉太である。

〔土師器〕

90～93は広口小壺、94は脚部、95・96は口縁部である。90は全体的に薄壁で、復元口径10.3

cm。91は復元口径11.0cmである。93の外器面には横と縦方向の叩きが残る。96は復元口径16.5cmで、口縁部は大きく肥厚する。

〔縄文土器〕

97・98は底部で、99は口縁部、100は口縁部である。98は平底でススが付着する。99は口縁部に貼り付けの刻み目を有する突帯が付く。

〔中世遺物〕

101は青磁、103は白磁、104～107は瓦質擂鉢である。108は中世雑器、109は糸切りの土師皿、110は常滑の小壺である。103は小皿で、復元底径4.7cm。

〔布目瓦〕

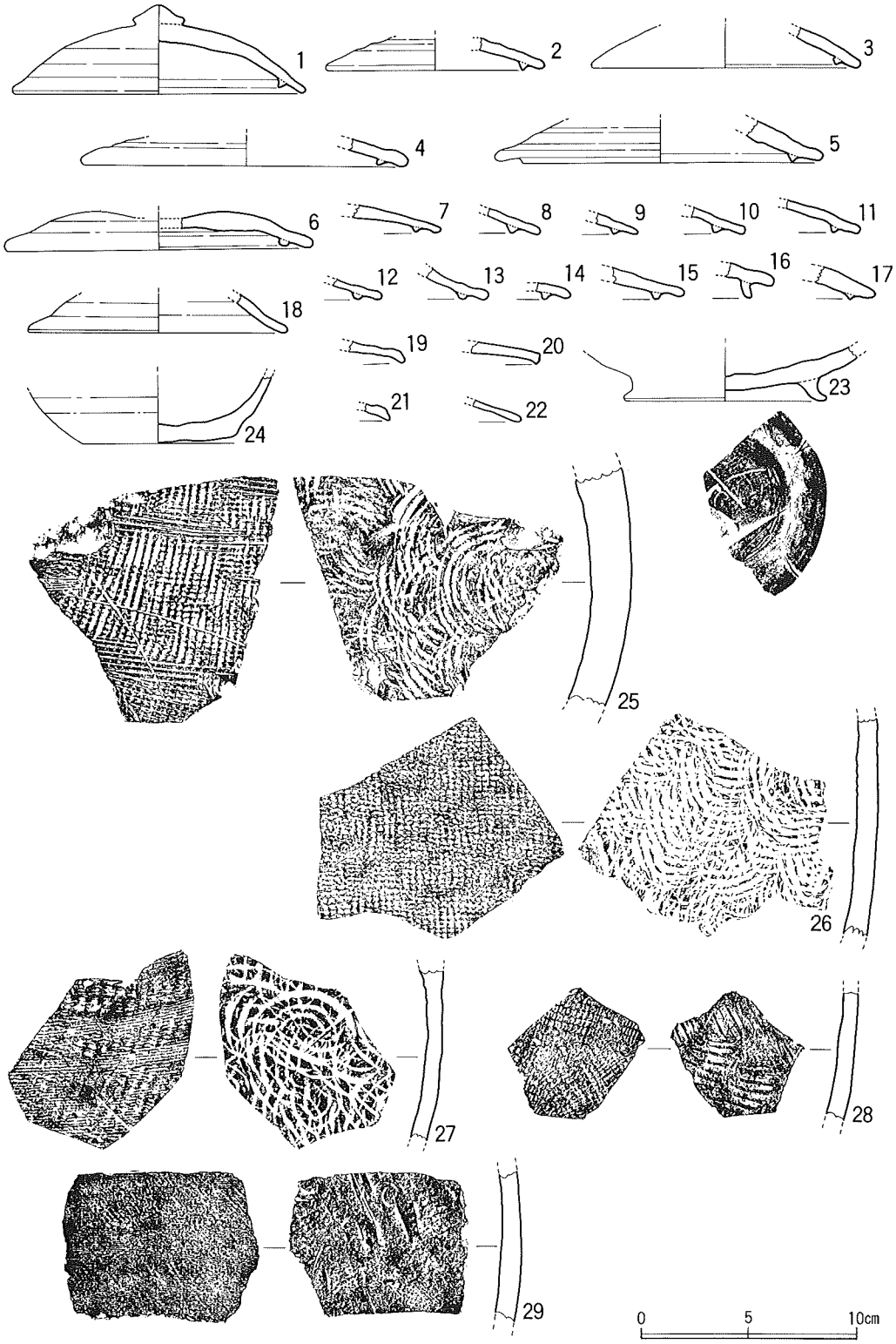
111～135は平瓦で、136～140は丸瓦である。

＊平瓦……凸面の調整方法は後述する(56頁)。113の凹面には細長板による圧痕がある。116の側面は破面が目立つ。129の凹面は特殊な布目で小斑点状の圧痕が残る。

＊丸瓦……136は歪な造りである。

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　態	調　整
1	須恵器 蓋	上位 8.0 中位 6.0 下端 3.0	精　良 混入物 (極少量)	灰　色	良　好	復元口径　13.5cm 器高　4.1cm 宝珠摘みが付く。 下端部はやや弯曲。 身受けは鋭角。	〔外器面〕 ロクロ回転ナデ。上位から中位に、強いナデが加わる。 〔内器面〕 ロクロ回転ナデ。上位に軽い不定ナデが加わる。 (丁寧な造りの土器)
2	須恵器 蓋	上位 6.0 中位 4.5 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	灰　色	良　好	復元口径　10.1cm 身受けは鋭角。	〔内外器面〕 丁寧なロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 中位に鮮明なロクロ回転ナデ痕が残る。
3	須恵器 蓋	中位 5.0 下端 4.0	精　良 混入物 (少量)	灰白色	非常に甘い	復元口径　12.4cm 身受けは内側がやや丸味を帯びる。	〔内外器面〕 ローリングが進む。
4	須恵器 蓋	中位 5.0 下端 6.0	鉱　物 (やや多し)	灰　色 ｜ 灰黒色	良　好	復元口径　15.0cm 下端部寄りで、僅かに弯曲する。 下端部は肥厚し、丸味を帯びる。 身受けは非常に小さく、内側に傾く。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 自然釉がかかり器面はザラ付く。
5	須恵器 蓋	中位 9.0 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰白黒色 〔内器面〕 灰白色	良　好	復元口径　15.1cm 器壁は全体的に肉太。 下端部寄りでやや弯曲。 下端部は若干、丸味を帯びる。 身受けの先端は、やや丸味を帯びる。	〔外器面〕 非常に丁寧なロクロ回転ナデ。 〔内器面〕 ロクロ回転ナデ。

第16表　出土遺物観察表①



第24図　出土遺物実測図①

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
6	須恵器 蓋	上位 4.5～9.0 中位 5.0 下端 5.0	精　良 白色粒 (少量)	〔外器面〕 灰白黒色 〔内器面〕 灰白色	良　好	復元口径　14.1cm 上位と中位の間は肥厚し、丸味を帯びる。 外端部寄りで弯曲。 外端部と身受けは丸味を帯びる。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 不定ナデが加わる。
7	須恵器 蓋	上位 6.0 中位 4.0 下端 3.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰白黒色 〔内器面〕 灰白色	良　好	身受けは鋭角。	〔外器面〕 ロクロ回転ナデ。上位～中位は不定ナデが加わる。 〔内器面〕 丁寧なロクロ回転ナデ。
8	須恵器 蓋	中位 4.0 下端 3.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰黒色 〔内器面〕 灰白色	良　好	下端部寄りで、僅かに弯曲。 身受けは鋭角。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 不定ナデが加わる。
9	須恵器 蓋	中位 4.5 下端 2.0	鉱　物 (やや多し)	白灰色	甘　い	下端部寄りで、僅かに弯曲。下端部は、やや鋭角気味。 身受けは鋭角。	〔内外器面〕 ローリングが進む。 胎土が手に付く。
10	須恵器 蓋	中位 4.0 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰黒色 〔内器面〕 灰　色	良　好	下端部寄りでやや弯曲 下端部は丸味を帯びる 身受けは鋭角（先端部はシャープ）。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 不定ナデが加わる。 〔内器面〕非常に丁寧なロクロ回転ナデ。
11	須恵器 蓋	上位 4.0 中位 5.0 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰(黒)色 〔内器面〕 灰白褐色	やや甘い	下端部寄りで、やや弯曲。 身受けは、やや鋭角。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 上位に不定ナデが加わる。(端的な調整で、シャープな器形)
12	須恵器 蓋	中位 3.0 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰黒色 〔内器面〕 灰白色	良　好	下端部と身受けは丸味を帯びる。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。
13	須恵器 蓋	中位 5.0 下端 5.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰黒色 〔内器面〕 灰　色	良　好	下端部寄りで大きく弯曲。 身受けと下端部は丸味を帯びる。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔内器面〕 中位に不定ナデが加わる。
14	須恵器 蓋	下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	褐白色	甘　い	身受けの先端は、やや扁平(2mm幅)。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 ローリングが進む。
15	須恵器 蓋	中位 7.0 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰黒褐色 〔内器面〕 灰黄色	良　好	下端部は丸味を帯びる 身受けは、やや丸味を帯びる。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔内器面〕 身受けより内側に、鮮明なロクロ回転ナデ。
16	須恵器 蓋	下端 5.0	白色粒 (やや多し)	灰　色 〔内器面〕 下端部は灰黒色	良　好	下端部は丸味を帯びる 身受けは丈が高く(1cm)弯曲しながら外側へ開く。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。

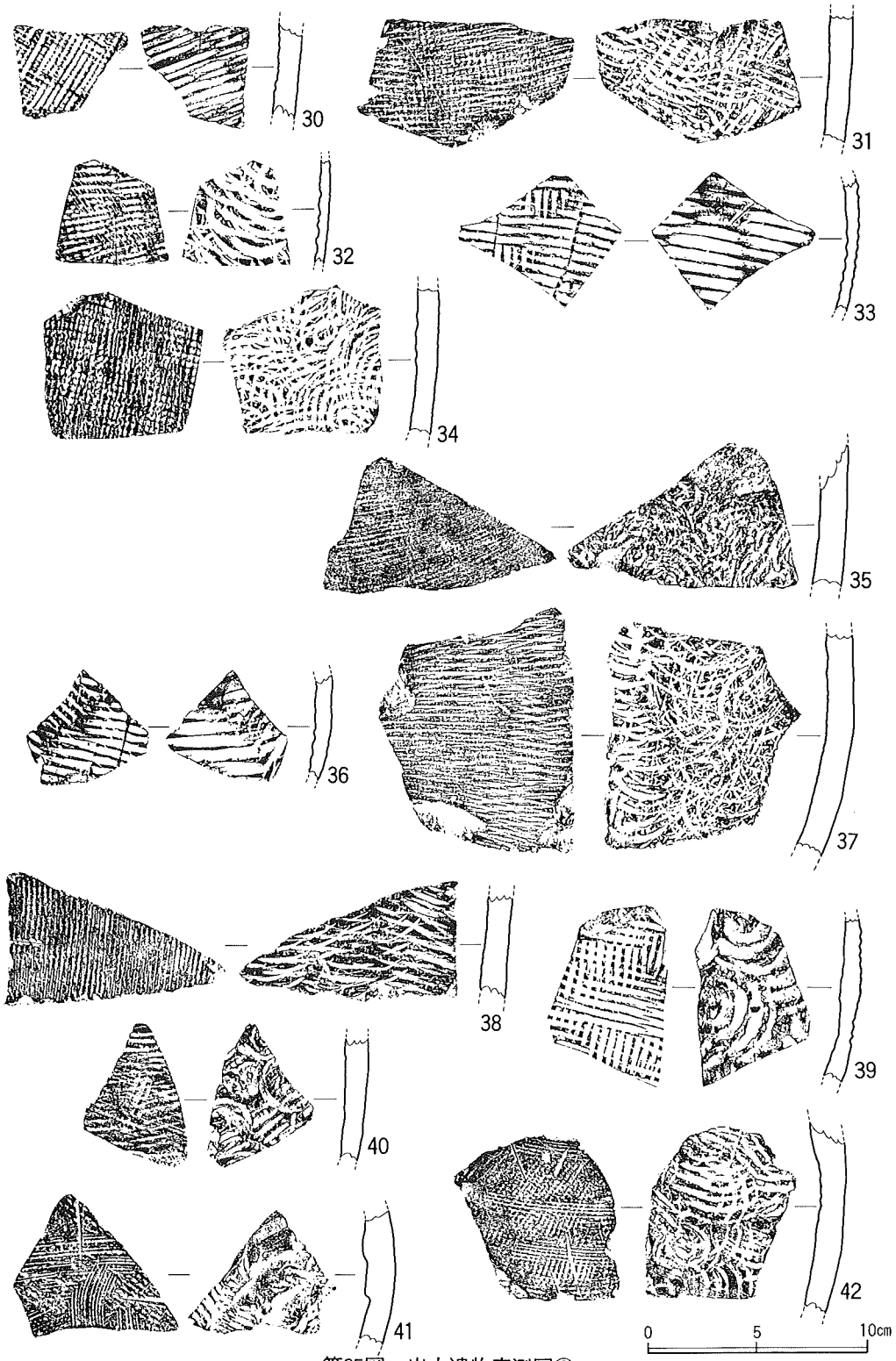
第17表　出土遺物観察表②

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
17	須恵器 蓋	中位 8.0 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	灰黒色	良　好	器壁は全体的に肥厚し非常に小さい身受けが付く。 下端部寄りで僅かに弯曲。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 不定ナデが加わる。
18	須恵器 蓋	中位 4.5 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰(褐)色 〔内器面〕 灰白褐色	甘　い	復元口径　11.9cm 下端部寄りで、やや弯曲。 身受け無し。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔内器面〕 下端部寄りで強いナデが加わる。
19	須恵器 蓋	中位 5.0 下端 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰(褐)色 〔内器面〕 灰白(褐)色	やや甘い	下端部は大きく外側へ張り出す。 身受け無し。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 不定ナデが加わる。 外端部の縁に強いナデが加わる。
20	須恵器 蓋	中位 5.5 下端 5.0	精　良 白色粒 (少量)	灰　色	良　好	下端部は外側へ張り出し、縁はやや窪む。 身受け無し。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 不定ナデが加わる。
21	須恵器 蓋	下端 4.0～5.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 褐茶色 〔内器面〕 灰白褐色	やや甘い	下端部は外側へ張り出し、縁は窪む。 身受け無し。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。
22	須恵器 蓋	中位 2.5～3.0 下端 3.5	精　良 混入物 (極少量)	灰　色	良　好	器壁は全体的に薄壁。 軽量土器。 下端部寄りで一旦、括れる。 身受け無し。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。
23	須恵器 椀 (高台付)	底部 8.0 外底端 9.0 体部 6.5	精　良 混入物 (極少量)	〔外底面〕 褐白色 〔内底面〕 白灰色	良　好	復元底径　9.4cm 付け高台(高さ5～8.5mm)で、弯曲しながら外側へ張り出す。 器壁は肥厚。	〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔内底面〕 不定ナデ。指頭痕も加わる。 〔外底面〕 不定ナデが加わる。 (外底面に窯印)
24	須恵器 杯	底部 8.5 外底端 10.0 体部 3.5	精　良 混入物 (極少量)	灰(褐)色 一部は乳褐色	やや甘い	底径　7.0cm 底部は肥厚。 外底端は尻上がりで、やや角張る。	〔内底面・内器面〕 ロクロ回転ナデ。 一部に不定ナデが加わる。 〔外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外底面〕 ヘラ切り後、強いナデが加わる。
25	須恵器 甕 (胴部)	上位22.0 中位18.0 下位17.0	精　良 混入物 (極少量)	灰　色	良　好	分厚い器壁。 胴部は内弯。	〔外器面〕 細かい格子目叩き。 凹：1×3mm。凸：1mm。 一部に細かい平行叩きが加わる。 凸：2mm。凹：0.5mm。 〔内器面〕　円文叩き。

第18表　出土遺物観察表③

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　態	調　整
26	須恵器 甕 (胴部)	上位 9.0 中位10.0 下位11.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰黒色 自然釉に より一部 灰黄色 〔内器面〕 灰　色	良　好	胴部は僅かに内弯。	〔外器面〕 細かい格子目叩きにナデが加わる。 凹：2×3mm。凸：1mm。 〔内器面〕 非常に鮮明な円文叩き。 (角張った感じあり)
27	須恵器 甕 (胴部)	上位 9.0 中位 7.0 下位 6.0	精　良 不純物 (極少量)	〔外器面〕 灰黒色 〔内器面〕 灰　色	良　好	――――	〔外器面〕 細長の格子目叩きに強い刷け目が加わる。 凹：4×1mm。凸：1mm。 〔内器面〕 押さえのきいた円文叩き。 3～5mm幅で扁平な感じ。
28	須恵器 甕 (胴部)	上位 7.0 中位 8.0 下位 8.5	精　良 不純物 (極少量)	灰　色	良　好	胴部はやや薄壁で、僅かに弯曲。	〔外器面〕 細小の格子目叩き。 凹：1.5×3mm。凸：1×1mm。 〔内器面〕叩き。
29	須恵器 甕 (胴部)	上位14.0 中位11.0 下位10.0	精　良 不純物 (極少量)	灰白(褐)色	良　好	胴部は肥厚し、やや弯曲する。	〔外器面〕 極小の格子目叩き。 凹：1.5mm。凸：1mm。 一部に小さい平行叩きが加わる。凹凸：1mm。 〔内器面〕 やや太目の円文叩き。 凹：2mm。凸：4～5mm。
30	須恵器 甕 (胴部)	中位11.0 下位10.5	精　良 白色粒 (少量)	黒灰色	良　好	――――	〔外器面〕 鮮明な細目の格子目叩き。 凹：1.5～2mm。凸：0.5mm。 〔内器面〕平行叩き。 凹：2.5mm。 凸：(扁平)1～4mm。
31	須恵器 甕 (胴部)	上位10.0 中位10.0 下位10.0	鉱　物 (やや多し)	〔外器面〕 灰白褐色 〔内器面〕 乳白色	やや甘い	――――	〔外器面〕 細目の格子目叩き。 凹：1×2mm。凸：1mm。 一部に平行叩きが加わる。 凹：1mm。凸：2mm。 〔内器面〕 円文叩き。
32	須恵器 甕 (胴部)	上位 4.0 中位 5.0 下位 4.5	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰白色 〔内器面〕 灰(黒)色	良　好	胴部は薄壁。	〔外器面〕 細目の格子目叩き。 凹：2×1.5mm。凸：1.5mm。 不定ナデが加わる。 〔内器面〕 円文叩き。
33	須恵器 甕 (胴部)	上位 6.0 中位 5.0 下位 5.0	精　良 鉱　物 (少量)	〔外器面〕 灰茶色 〔内器面〕 茶褐色	良　好 (堅緻)	胴部は薄壁で、弯曲。	〔外器面〕 短冊型の格子目叩き。 凹：3.5～3.6mm。 凸：1～1.5mm。 一部に短冊型の格子目叩きが直交する。 凹：3～4×12mm。 凸：1～1.5mm。 〔内器面〕 平行叩き。 凹：3～4mm。凸：1～2mm。

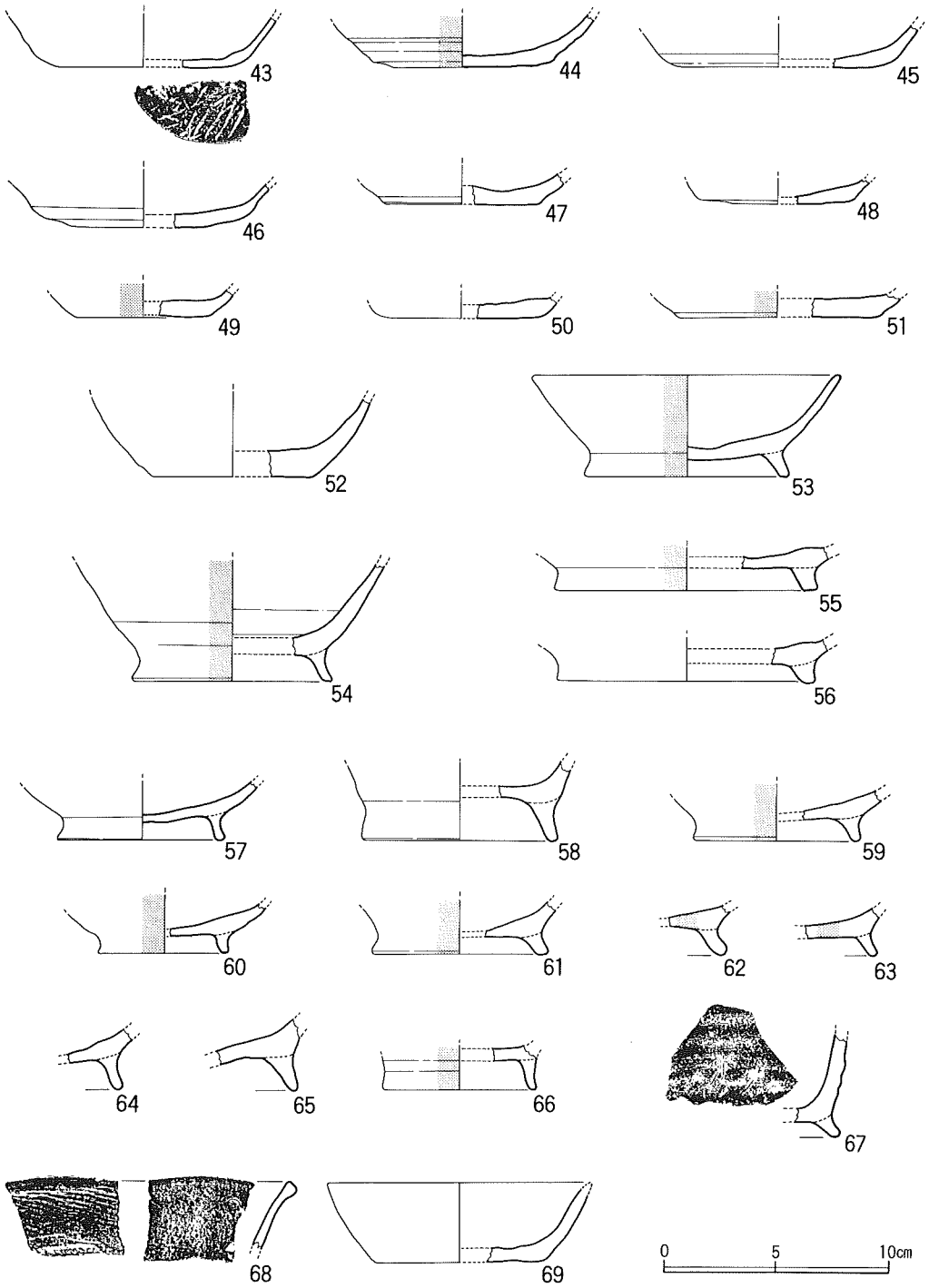
第19表　出土遺物観察表④



第25図　出土遺物実測図②

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
34	須恵器 甕 (胴部)	上位10.0 中位10.0 下位10.0	精　良	〔外器面〕 灰色・黒色 〔内器面〕 灰　色	良　好 (堅緻)	胴部は肥厚。	〔外器面〕 細目の格子目叩き。 凹：1×2mm。凸：1mm。 ナデが加わる。 〔内器面〕 円文叩き。
35	須恵器 甕 (胴部)	中位12.0 下位13.0	精　良 白色粒 (少量)	〔外器面〕 灰白色 〔内器面〕 灰　色	良　好	胴部は肥厚。	〔外器面〕 格子目叩きを完全になくす様な平行叩きが加わる。 凹：0.3mm。凸：2mm。 〔内器面〕 円文叩き。一部に指頭圧痕が加わる。
36	須恵器 甕 (胴部)	中位 7.5 下位 6.0	精　良 鉱　物 (極少量)	〔外器面〕 小豆色 灰白黒色 〔内器面〕 灰小豆色	良　好	――	〔外器面〕 平行叩き。 凹：3mm。凸：1～1.5mm。 〔内器面〕 平行叩き。 凹：5mm。凸：1mm。
37	須恵器 甕 (胴部)	上位12.0 中位12.0 下位12.0	白色粒 (やや多し)	〔外器面〕 灰(黒)褐色 〔内器面〕 灰(褐)色 〔断面〕 褐灰色	良　好	胴部は肥厚し、弯曲する。	〔外器面〕 平行叩き。一部に斜行叩きが重なる。 〔内器面〕 非常に密な、円文叩き。 (質量感のある土器)
38	須恵器 甕 (胴部)	中位11.0 下位12.0	白色粒 (やや多し)	〔外器面〕 灰　色 〔内器面〕 灰白色	良　好	――	〔外器面〕 細目の平行叩き。 凹：0.5mm。凸：1～2mm。 〔内器面〕 円文叩き。
39	須恵器 甕 (胴部)	上位 6.0 中位 9.0 下位 9.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰白茶色 〔内器面〕 灰褐色	良　好 (堅緻)	胴部はやや弯曲。	〔外器面〕 平行叩きが直交。 凹：2mm。凸：2mm。 〔内器面〕 太めの円文叩き。 一部に指頭圧痕。
40	須恵器 甕 (胴部)	中位10.5 下位 8.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰(黒)色 〔内器面〕 灰白色	良　好	――	〔外器面〕 横方向の平行叩きに、斜め方向の平行叩きが重なる。 〔内器面〕 円文叩き。 一部に指頭圧痕。
41	須恵器 甕 (胴部)	上位11.0 中位13.0 下位11.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 灰褐色 〔内器面〕 灰　色 (一部小豆色)	良　好	胴部は肥厚。	〔外器面〕 細目の平行叩き。 凹：1～2mm。凸：2mm。 横方向の刷け目が加わる。 (粘土が3層に重なり合った状態)
42	須恵器 甕 (胴部)	上位11.0 中位12.0 下位10.0	精　良	〔外器面〕 灰白色 〔内器面〕 灰　色	良　好	――	〔外器面〕 非常に細かい格子目叩き。 〔内器面〕 円文叩き。

第20表　出土遺物観察表⑤



第26図　出土遺物実測図③

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
43	土師器 杯	底部 3.0 外底端 5.5 体部 4.0	茶色の 小斑点 (粟粒大)	〔外器面〕 鈍い橙色 〔内器面〕 乳褐色	良　好 (堅緻)	復元底径　7.8cm 軽量土器。 全体的に薄壁。 内底端は大きく窪む。	〔内器面・内底面〕 ナデ。 〔外器面〕 ロクロ回転ナデ。 稜線が残る。 〔外底面〕 ヘラ切り後、ナデ。 板目圧痕が残る。
44	土師器 杯	底部 5.0 外底端 8.0 体部 4.0	精　良 混入物 (少量)	丹塗り 〔地肌〕 乳褐色	良　好	復元底径　8.0cm 外底端は尻上がり。	〔内外器面〕 ローリングが進む。 〔外器面〕 稜線は残る。 〔外底面〕 ヘラ切り。
45	土師器 杯	底部 4.0 外底端 7.0 体部 4.0	精　良 金雲母 (少量)	鈍い橙色	良　好	復元底径　9.0cm 底部は中央よりで薄壁。 外底端は肥厚し、丸味を帯びる。	〔内外器面〕 ローリングが進む。 〔外底面〕 ヘラ切り後、ナデ。
46	土師器 杯	底部 6.0 外底端 6.5 体部 2.5	鉱　物 (混入)	褐白色	良　好 (堅緻)	復元底径　6.0cm 外底端は極端に尻上がりとなる。 体部は薄壁。	〔内底面〕ナデ 〔外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外底面〕 ヘラ切り後、ナデ。 (19区掘立柱建物の掘形より出土)
47	土師器 杯	底部 6.0～8.0 外底端 8.0 体部 5.5	精　良 鉱　物 (少量)	褐白色	良　好 (堅緻)	復元底径　6.8cm 外底端は丸味を帯びる。 内底面の中央部は凸。	〔内底面〕ナデ。 〔外器面〕 丁寧なロクロ回転ナデ。 〔外底面〕 ヘラ切り後、ナデ。
48	土師器 杯	底部 3.0 外底端 7.0 体部 3.0	精　良 鉱　物 (少量)	鈍い橙色	普　通	底径　7.0cm 底部は中央で薄壁。 外底端は尻上がり。	〔内底面・外器面〕 ローリング。 〔外底面〕 ヘラ切り。
49	土師器 杯	底部 6.0～8.0 外底端 7.0 体部 4.0	茶褐色の 小斑点 (やや多し)	丹塗り 〔地肌〕 乳褐色	やや甘い	復元底径　6.0cm 外底面は平底気味。	〔内底面〕指頭圧痕。 〔外器面〕 丁寧なロクロ回転ナデ。 〔外底面〕 ヘラ切り。
50	土師器 杯	底部 6.0 外底端 9.0 体部 4.0	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 褐白色 〔内器面〕 鈍い橙色	良　好 (堅緻)	復元底径　7.0cm 平底。	〔内底面〕 丁寧なナデ。指頭圧痕。 〔外底面〕 ヘラ切り。
51	土師器 杯	底部 8.0 外底端 9.5 体部 6.0	精　良 混入物 (極少量)	丹塗り 〔地肌〕 乳白色 〔断面〕 灰黒色	良　好	復元底径　9.0cm 外底端は丸味を帯びる。	〔内底面・外器面〕 ローリング。 〔外底面〕 ヘラ切り。
52	土師器	底部11.0 外底端 13.0 体部 4.0	精　良 混入物 (極少量)	白黄褐色	良　好	復元底径　7.0cm 外底端は、やや角張る。 平底。 体部は丸味を帯びる。	〔内底面・内器面〕ナデ。 ローリング。指頭圧痕。 〔外器面〕指頭圧痕。 ロクロ回転ナデ。 〔外底面〕 ヘラ切り。

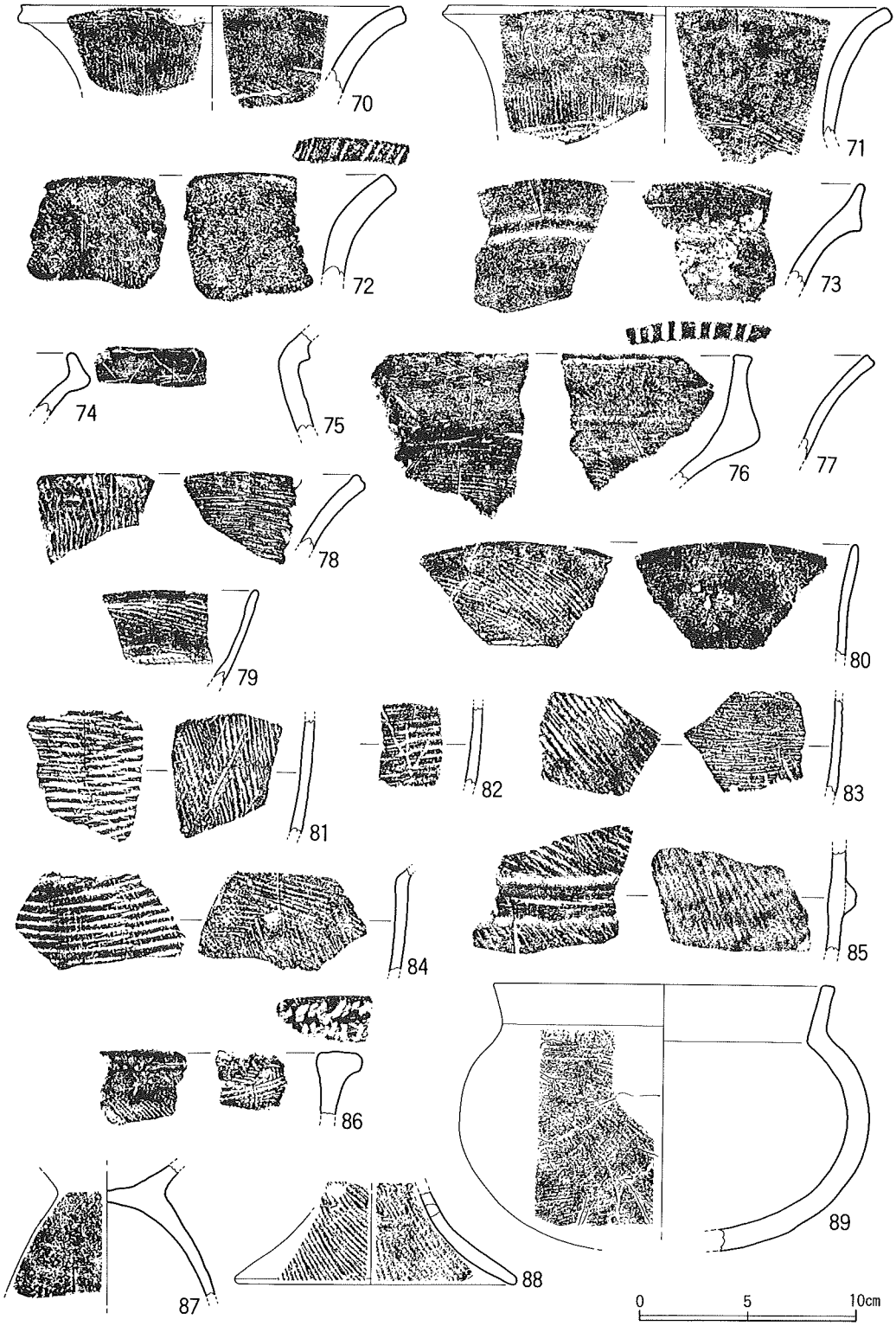
第21表　出土遺物観察表⑥

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
53	土師器 高台付 椀	底部 5.0～7.0 外底端 8.0 体部 中位4.0 上位3.0	精　良 混入物 (極少量)	丹塗り 明橙色	やや甘い	復元口径　13.8cm 器高　4.5cm 底径　9.1cm 付け高台(高さ7.5～9.5mm)で、外側へ張り出す底部は中央で凹む。	〔内底面〕 ロクロ回転ナデ。 〔内外器面〕 ローリング。 〔外底面〕 ヘラ切り。
54	土師器 高台付 椀	底部 8.0 体部 中位6.0 上位4.0	あまり 良くない	丹塗り 〔地肌〕 乳白色	良　好 (堅緻)	復元底径　9.0cm 高台高　1.2cm 付け高台は丈が高く、弯曲しながら外側へ張り出す。	〔内底面〕 指頭による強い横ナデ。 その分だけ凹む。 〔内外器面〕 ロクロ回転ナデ。 〔外器面〕 下位はやや粗いナデ。 〔付け高台〕 内外は丁寧な横ナデ。
55	土師器 高台付 椀	底部 4.5～5.0 外底端 9.0 体部 6.0 高台 8.0	金雲母 鉱　物 (やや多し)	丹塗り 〔地肌〕 乳褐色	良　好	復元底径　11.8cm 内底は全体的に、やや凹む。 付け高台(高さ1cm)は太め(厚さ8mm)。 畳付きは扁平(幅7mm)。	〔内底面〕 ロクロ回転ナデ。 〔付け高台〕 内外は横ナデ。
56	土師器 高台付 椀	底部 7.0 外底端 10.0 体部 5.0 高台 8.5	精　良 鉱　物 (少量)	褐白色	良　好	復元底径　11.4cm 内底は僅かに窪む。 付け高台(高さ7.5mm)は太め。 畳付きは扁平(幅6mm)。	〔内底面〕 ロクロ回転ナデ。 〔付け高台〕 内外は丁寧なナデ。
57	土師器 高台付 椀	底部 3.0～4.0 外底端 5.5 体部 4.0	鉱　物 (多量)	鈍い橙色	甘　い	底径　7.4cm 全体的に薄壁。 軽量土器。 付け高台(高さ8～10mm)で、丈が高く、弯曲しながら外側へ張り出す。	〔内外器面〕 ローリング。
58	土師器 高台付 椀	底部 5.0 外底端 10.0 体部 5.0 高台 7.0	精　良 金雲母 (少量)	鈍い橙色	良　好	復元底径　8.6cm 体部の立ち上りは、大きく弯曲する。 付け高台(1.9cm)は肉太で、丈が高く、直線的に外側へ張り出す。 継目の修正痕が残る。	〔内底面〕 指頭による強いナデ。 その分だけ凹む。 〔外器面〕ローリング。 ロクロ回転ナデ。 〔付け高台〕 内外は丁寧なナデ。
59	土師器 高台付 椀	底部 4.0 外底端 7.0 体部 5.5 高台 6.0	精　良 茶色の 小斑点 (少量)	丹塗り 〔地肌〕 褐白色	甘　い	復元底径　7.6cm 底部は中央寄りで薄壁。 付け高台(高さ9.5～10mm)は肉太で、外側へ張り出す。	〔内底面・外器面〕 ローリング。 〔付け高台〕 内側は丁寧な横ナデ。 畳付きは強いナデ。
60	土師器 高台付 椀	底部 3.0 外底端 8.0 体部 4.0 高台 4.5	精　良 混入物 (極少量)	丹塗り	甘　い	復元底径　5.8cm 底部は中央寄りで薄壁。 付け高台(高さ7.5～8.5mm)は弯曲しながら、やや外側へ張り出す。 畳付きは、しゃげて外側へめくり上がっている。	〔内底面〕 ローリング。中央部は指頭圧痕。 〔外器面〕 鮮明なロクロ回転ナデ。 〔付け高台〕 外側は鮮明な横ナデ。 内側と内外底面は強いナデ。

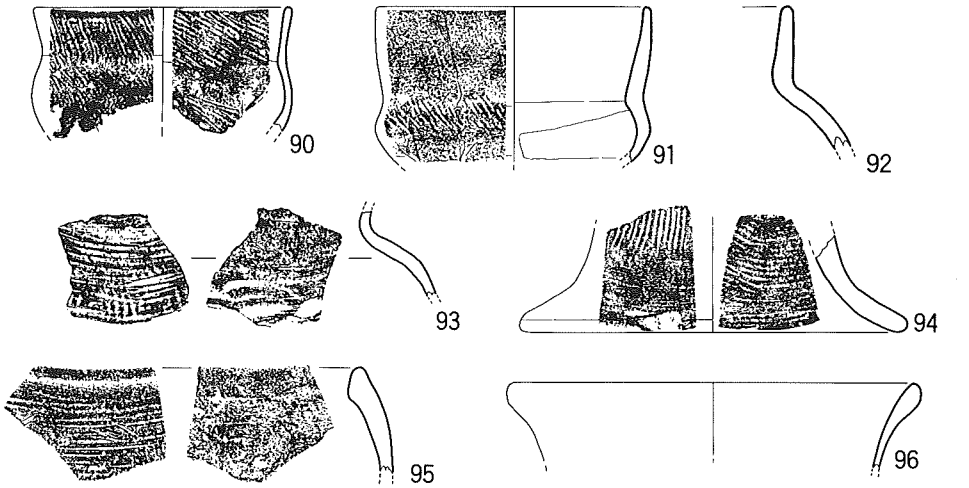
第22表　出土遺物観察表⑦

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　態	調　整
61	土師器 高台付 椀	底部 3.0 外底端 9.0 体部 5.5 高台 6.0	精　良 混入物 (極少量)	丹塗り	甘　い	復元底径　7.8cm 底部の中央は薄壁。 付け高台(高さ7.5mm)で、外側へ張り出す。	〔内底面〕 指頭圧痕。 〔外器面・付け高台〕 ローリング。
62	土師器 高台付 椀	底部 4.0 外底端 10.0 体部 5.0 高台 6.5	黒雲母 (少量)	丹塗り 〔地肌〕 乳褐色	甘　い	分厚く、大きな付け高台で、外側へ張り出す。(両側から摘んだ痕が残る)	〔内底面・外器面〕 ローリング。
63	土師器 高台付 椀	底部 6.0 外底端 9.0 体部 5.0 高台 4.5	白色粒 黒雲母 (やや多し)	丹塗り 〔地肌〕 鈍い橙色	良　好	付け高台は底部の大きさに対して小型で、外側へ張り出す。	〔内底面〕 ローリング。 部分的に指頭圧痕。 〔外器面・高台〕 ローリング。
64	土師器 高台付 椀	底部 4.0 外底端 8.0 体部 6.0 高台 4.5～5.0	赤茶色の 小斑点 (やや多し)	鈍い橙色	良　好	中途で括れる付け高台で、丈が高く(1.4cm)、外側へ張り出す。 継目の修正痕がはっきりと残る。	〔内底面〕 ナデ。指頭圧痕。 〔付け高台〕 外側は横ナデ。内側は丁寧なナデ。
65	土師器 高台付 椀	底部 6.0 外底端 12.0 体部 8.0 高台 7.0	鉱　物 (やや多し)	鈍い橙色	良　好 (堅緻)	付け高台も大型で、丈が高く(1.4cm)、外側へ張り出す。	〔内底面〕ナデ。 〔外器面〕横ナデ。 〔外底面〕 強いナデに寄る凹線(9mm幅)あり。
66	土師器 高台付 椀	底部 5.5 高台 5.5	精　良 混入物 (極少量)	丹塗り 〔地肌〕 乳褐色	良　好	復元底径　6.8cm 付け高台は、やや弯曲するが、直立気味に立つ。	〔内底面〕ナデ。 〔付け高台〕丁寧な横ナデ。 〔外底面〕 非常に丁寧なナデ。
67	土師器 高台付 椀	底部 6.5 外底端 10.0 体部 5.5 高台 5.5	白色粒 (やや多し)	〔外器面〕 褐　色 〔内器面〕 褐白色	良　好	体部は、やや直立気味に伸びる。 付け高台は丈が短く(7mm)、大きく張り出す。 継目の修正痕が残る。 〔外器面〕 ススの付着あり。	〔内器面〕 ローリング。 〔外器面〕ロクロ回転ナデ。 稜線が目立つ。 (但し、器面は凸凹) 〔付け高台〕 外は丁寧なナデ。
68	土師器 杯	体部 上位3.5 中位3.5 下位5.0	精　良 鉱　物 (少量)	鈍い橙色	やや甘い	体部は、直線的に伸びる。	〔内外器面〕 ローリング。
69	土師器 杯	底部 6.5 外底端 8.0 体部 上位4.0 中位5.0	不　明	鈍い橙色	良　好	復元口径　11.7cm 器高　3.5cm(推定) 復元底径　7.3cm 体部は直線的に外側へ大きく開く。	〔内外器面〕 ローリング。 器面に粘土が付着。 〔外底面〕 糸切り離しの可能性あり。

第23表　出土遺物観察表⑧



第27図　出土遺物実測図④



第28図　出土遺物実測図⑤

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
70	弥生土器 壺 (頸部)	上位 8.5 中位 9.0	精　良 混入物 (極少量)	乳褐色	良　好	復元口径17.5cm 頸部は大きく外弯し、上位の断面形状は方形。口唇部は窪む。	〔内器面〕叩き。ナデ。 〔外器面〕刷け目。
71	弥生土器 壺 (頸部)	口径 6.5 中位 7.5 下位 5.5	鉱　物 (やや多し)	乳白色	良　好	復元口径　20.3cm 頸部は大きく外弯し、上位の断面は方形を呈する。 口唇部はやや窪む。	〔内器面〕 叩き。ナデ。 〔外器面〕 縦方向の刷け目。 横ナデ。
72	弥生土器 壺 (頸部)	上位10.0 中位11.0 下位10.0	精　良 白色粒 (少量)	乳白色 〔内部〕 灰　色	良　好	頸部は大きく外弯し、上位の断面は方形を呈する。	〔内器面〕叩き。ナデ。 〔外器面〕刷け目。ナデ。 〔口唇部〕刻み目。
73	弥生土器 壺 (頸部)	上位 4.0 中位13.5 下位 8.0	精　良 混入物 (極少量)	乳白色 〔内部〕 灰黒色	良　好	頸部は「十」や逆「く」の字の形状を呈する。 屈曲部分は大きく肥厚する。	〔内器面〕 ローリング。 〔外器面〕 非常に丁寧な横ナデ。
74	弥生土器 壺 (頸部)	上位 4.5 中位10.0 下位 6.5	精　良 混入物 (極少量)	〔外器面〕 乳白色 〔内器面〕 くすんだ褐灰色	良　好 (堅緻)	頸部は逆「く」の字を呈し、上位は内傾の状態になる。 屈曲部分は肥厚する。	〔内器面〕横ナデ。 〔外器面〕丁寧なナデ。 〔口唇部の外縁〕 波状の沈線文。
75	弥生土器 壺 (頸部)	中位12.0 下位 8.0	鉱　物 白色粒 (やや多し)	乳白色 〔内部〕 灰黒色	良　好	頸部は逆「く」の字を呈すると思われる。 屈曲部分に突帯が付く。	〔内外器面〕 ローリング。
76	弥生土器 壺 (頸部)	上位 8.0 中位19.0 下位 6.0	精　良 混入物 (極少量)	褐灰色	良　好 (堅緻)	頸部は逆「く」の字を呈する。 屈曲部分は大きく肥厚する。	〔内外器面〕 横ナデ。
77	弥生土器 甕 (口縁部)	上位 6.0 中位 4.5 下位 4.5	小石粒 (多量)	乳白色 〔内部〕 黒　色	甘　い	口縁部は外弯する。	〔内外器面〕 ナデ。ローリング。
78	弥生土器 甕 (口縁部)	上位 8.0 中位 6.5	精　良 金雲母 (少量)	〔外器面〕 灰(褐)色 〔内器面〕 褐白色	良　好	口縁部は、やや外弯する。 口唇部はやや窪む。	〔外器面〕斜めの刷け目。 〔内器面〕 横方向の刷け目。 〔口唇部〕強いナデ。

第24表　出土遺物観察表⑨

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
79	弥生土器 甕 (口縁部)	上位 5.0 中位 4.0 下位 3.5	精　良 鉱　物 (少量)	乳白色 〔内部〕 灰黒色	良　好	口縁部は、やや外弯し口唇部で肥厚する。	〔外器面〕横ナデ。 〔内器面〕ナデ。
80	弥生土器 甕 (口縁部)	上位 4.0 中位 3.0 下位 3.0	金雲母 黒雲母	〔外器面〕 灰褐色 〔内器面〕 褐白色	良　好	口縁部は、やや外弯する。	〔外器面〕 斜めの刷け目。 〔内器面〕 ナデ。
81	弥生土器 甕 (胴部)	中位 4.0 下位 5.0	精　良 金雲母 (少量)	褐白色 〔内部〕 灰黒色	良　好	――	〔外器面〕 横方向の叩き。 〔内器面〕 横方向の刷け目。
82	弥生土器 甕 (胴部)	中位 4.5 下位 5.0	精　良	〔外器面〕 灰白黒色 鈍い橙色 〔内器面〕 鈍い橙色	良　好	――	〔外器面〕 横方向の叩き。 〔内器面〕 ナデ。
83	弥生土器 甕 (胴部)	中位 3.0 下位 5.0	精　良	〔外器面〕 黒　色 (スス付着) 〔内器面〕 褐白色	良　好	――	〔外器面〕 横方向の叩き。 〔内器面〕 丁寧な斜めの刷け目。
84	弥生土器 甕 (胴部)	中位 5.5 下位 5.0	精　良	〔外器面〕 乳白色 灰黒褐色 〔内器面〕 乳白色	良　好	――	〔外器面〕 横方向の叩き。 〔内器面〕 横方向と斜めの刷け目。
85	弥生土器 甕 (胴部)	中位 6.0 下位 6.0	鉱　物 (やや多し)	〔外器面〕 乳白色 〔内器面〕 灰白褐色	良　好	胴部に突帯が付く。	〔内外器面〕 斜めの叩き。
86	弥生土器 甕 (口縁部)	口唇部 21.0 中位 7.0	鉱　物 (やや多し)	〔内外器面〕 褐灰色 〔口唇部〕 灰黒色	良　好 (堅緻)	口唇部は大きく肥厚、小長円形の押文あり。	〔外器面〕 ナデ後、一部に斜めの刷け目。 〔内器面〕 不定方向の叩き。
87	弥生土器 甕 (脚部)	底部 5.5 胴部 5.5 脚部 上位13.0 中位 4.5	白色粒 (多量)	乳白色	良　好	――	〔内外器面〕 ナデ。ローリング。
88	弥生土器 甕 (脚部)	脚部 中位 6.0 下位 4.5	精　良	乳白色	良　好	復元底径　13.1cm 有孔。3つの小穴。 脚部は弯曲しながら、外側へ大きく張り出す。	〔内外器面〕 器面一杯に、斜めの刷け目。
89	弥生土器 小壺	上位 6.5 中位10.0 下位11.0	精　良	〔外器面〕 灰橙色 (一部にススが付着) 〔内器面〕 褐灰色	良　好	復元口径　15.8cm 復元胴部径　19.0cm 全体的に肉太。	〔外器面〕 横ナデ。斜めの叩き。 〔内器面〕 丁寧なナデ。 屈曲部に斜めの刷け目。
90	土師器 広口小壺	上位 3.0 中位 3.0 下位 4.0	精　良	灰黒色 灰褐色 褐灰色	良　好	復元口径　10.3cm 全体的に薄壁。	〔外器面〕 斜めの刷け目。 〔内器面〕 斜めの刷け目。 ヘラ削り。

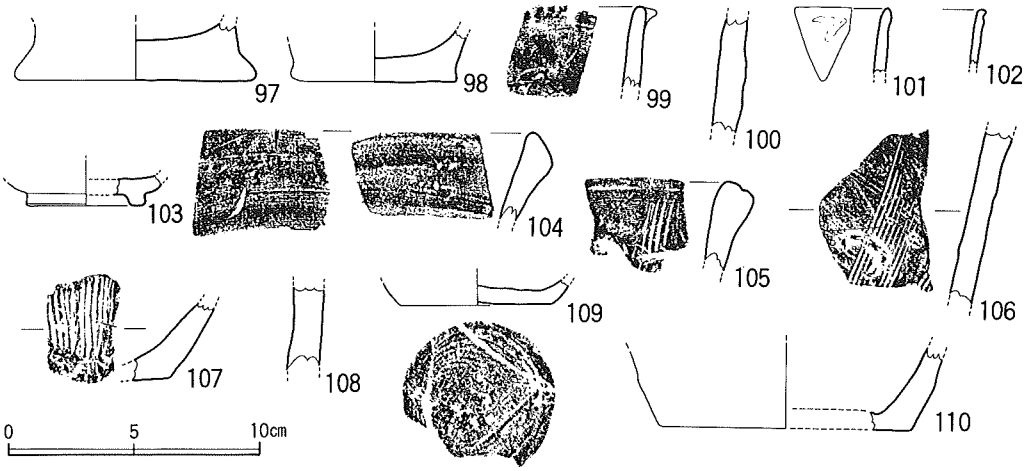
第25表　出土遺物観察表⑩

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
91	土師器 広口小壺	上位 3.5 中位 7.0 下位 3.0	精　良	鈍い橙色 黒　色 (ススが付着)	良　好	復元口径　11.0cm	〔外器面〕 横ナデ。斜めの刷け目。 〔内器面〕 斜めの叩き。ナデ。
92	土師器 広口小壺	上位 4.5 中位 8.0 下位 6.0	精　良	〔外器面〕 鈍い橙色 黒　色 (ススが付着) 〔内器面〕 乳白色	良　好	――	〔外器面〕 斜めの刷け目。 横ナデ。 〔内器面〕 横方向の刷け目。ナデ。
93	土師器 広口小壺	上位 4.0 中位 6.0 下位 4.0	精　良	〔外器面〕 灰白色 〔内器面〕 明褐色	良　好	――	〔外器面〕 横方向と縦の叩き。 〔内器面〕 横ナデ。下位に叩き。
94	土師器 (脚部)	中位 9.0 下位 6.0	精　良	〔外器面〕 鈍い橙色 〔内器面〕 橙白色	良　好 (堅緻)	復元底径　15.4cm	〔外器面〕 横ナデ。 縦方向の刷け目。 〔内器面〕叩き。
95	土師器 無頭壺 (口縁部)	上位10.0 中位 8.0 下位 5.0	精　良	鈍い橙色	良　好 (堅緻)	――	〔外器面〕 横ナデ。横方向の叩き。 〔内器面〕 強い横ナデ。
96	土師器 (口縁部)	上位 8.0 中位 4.0 下位 2.5	小石粒 (多量)	褐白色 〔内部〕 灰黒色	良　好	復元口径16.5cm 口縁部は大きく肥厚す。	〔内外器面〕 ローリング。 〔内器面〕 横ナデ。

第26表　出土遺物観察表⑪

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　　態	調　　整
97	縄文土器 (底部)	底部16.0	黒雲母 (やや多し)	褐白灰色	良　好	復元底径　9.8cm 外底端は大きく外側へ張り出す。	〔内外器面〕 ナデ。
98	縄文土器 (底部)	底部10.0 体部 6.0	精　良	褐灰色 〔内部〕 黒灰色	良　好	復元底径　6.8cm 平底。(ススが付着)	〔内外器面〕 強いナデ。 〔外底面〕 針穴状の小穴あり。
99	縄文土器 (口縁部)	上位14.5 中位 7.0	精　良	鈍い橙色	良　好 (堅緻)	口縁部に貼り付けの刻み目。 突帯を有する。	〔外器面〕 ナデ。 〔内器面〕 強い横ナデ。
100	縄文土器 (胴部)	中位 9.0 下位11.0	白色粒 (多量)	〔外器面〕 褐灰色 〔内器面〕 灰黒褐色	良　好	――	〔内外器面〕 ナデ。
101	青　磁 (口縁部)	上位 4.0 中位 4.5	精　良	〔釉色〕 オリーブ 黄色	良　好	口縁部は外器面側で、やや窪む。(貫入なし)	〔外器面〕蓮弁文様。 〔内器面〕 非常に丁寧なナデ。
102	白　磁 (口縁部)	上位 4.0 中位 3.0	精　良	灰白(黄)色	良　好	口唇部はやや扁平。 〔外器面〕 口唇部の下位は3mm幅で、大きく窪む。 〔内器面〕 小沈線あり。	〔内外器面〕 非常に丁寧なナデ。

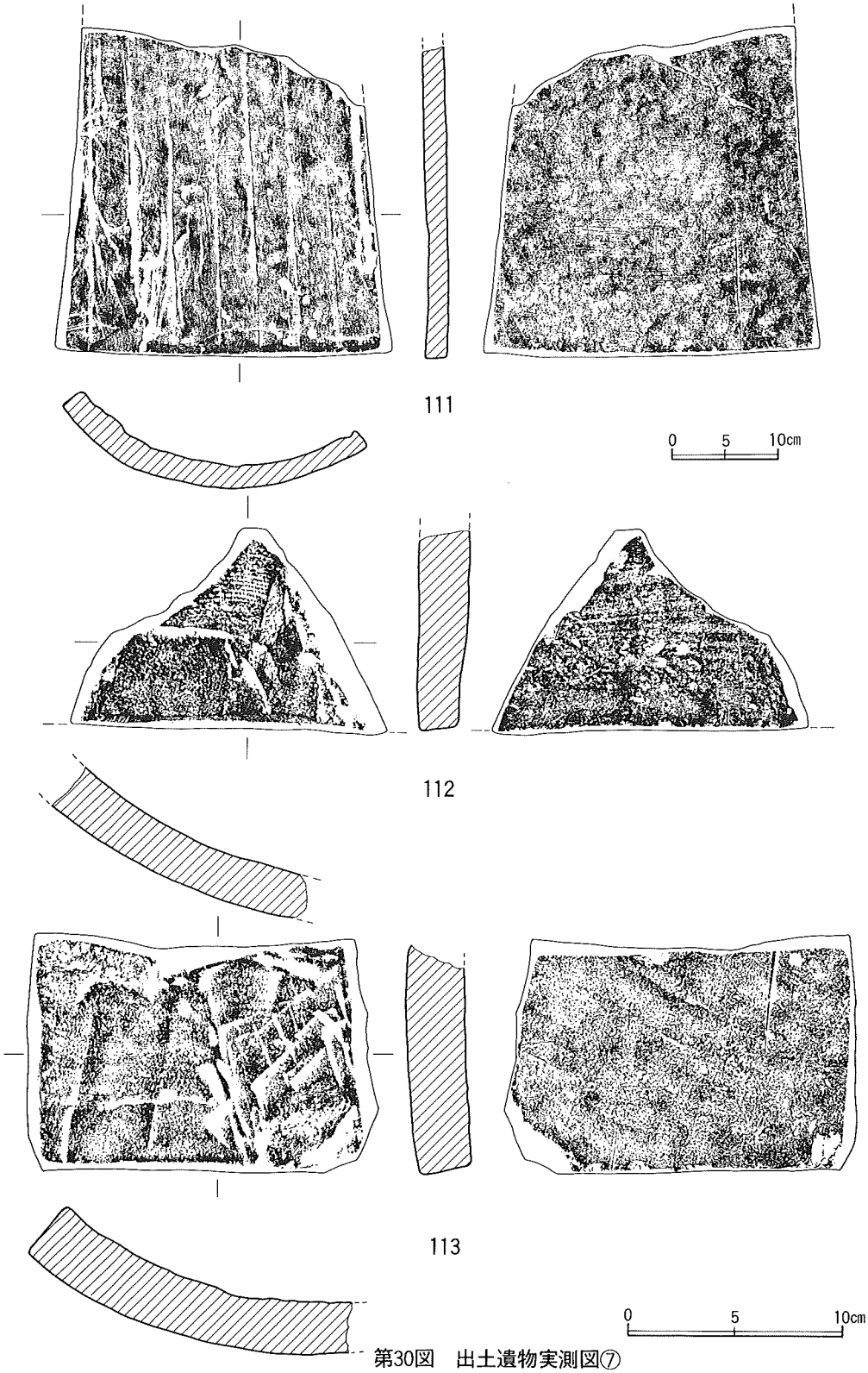
第27表　出土遺物観察表⑫



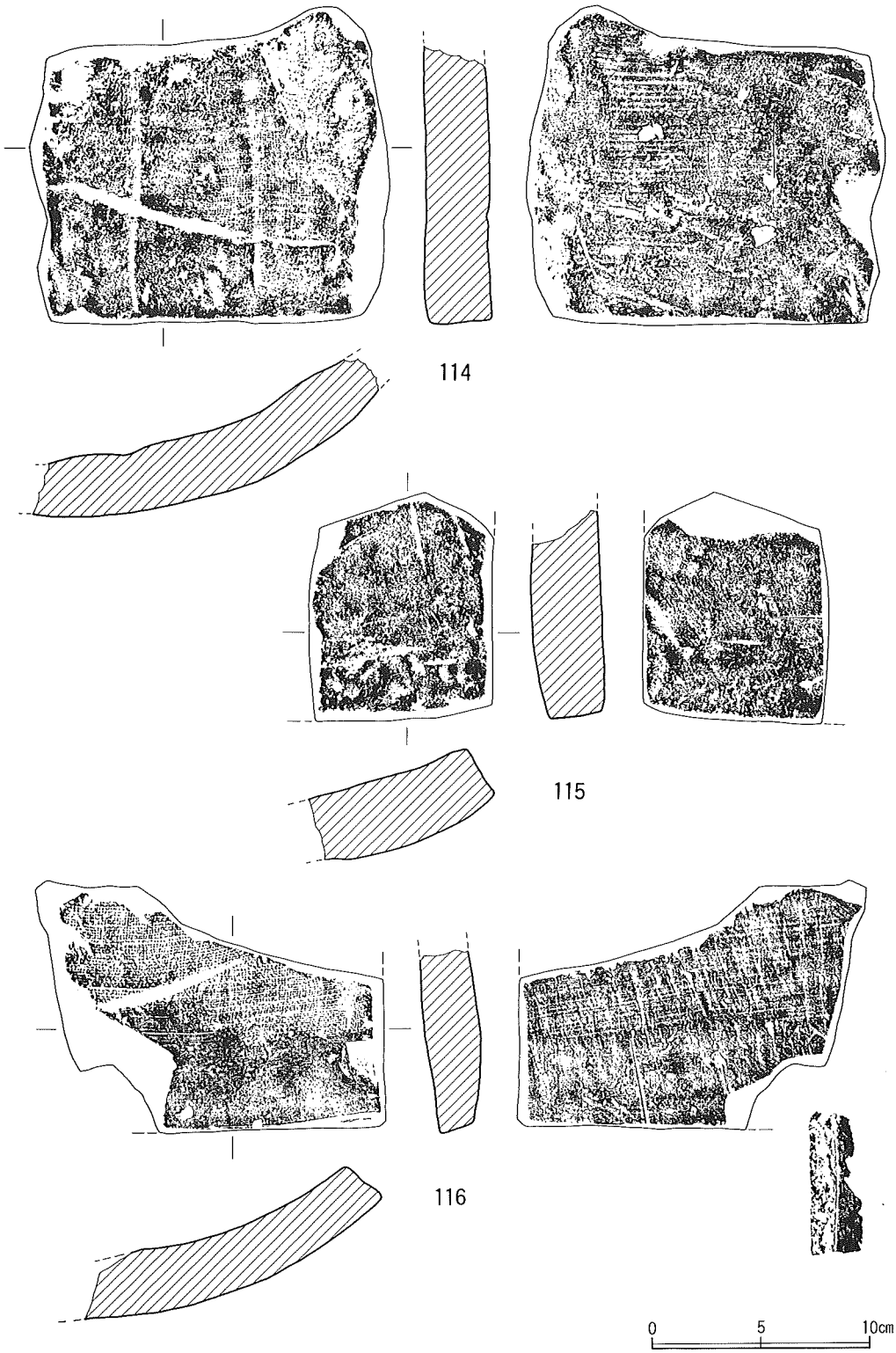
第29図　出土遺物実測図⑥

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　態	調　整
103	白　磁 小皿	底部 6.0 高台 6.5 体部 4.5	精　良	〔釉色〕 褐白色	良　好	復元底径　4.7cm 高台の畳付きは端部が尻上がりとなる。	〔高台〕 丁寧なヘラ削り。
104	瓦質擂鉢	上位13.0 中位 8.0	精　良	灰白色	良　好	〔外器面〕 上位で逆「く」の字の形状となる。 〔内器面〕 直線的に伸びる。	〔外器面〕 上位は丁寧なナデ。 中位は横ナデ。 〔内器面〕 横ナデ。
105	瓦質擂鉢	上位15.0 中位 9.0	精　良	〔外器面〕 灰黒色 〔内器面〕 灰黒白色	良　好	口縁部は上位で大きく肥厚。 条線の一単位は4本。 幅…凹1mm。凸1.5mm。 口唇部に2.5mm幅の沈線あり。	〔外器面〕 ナデ。指頭圧痕。 〔内器面〕 上位は横ナデ。 中位はナデ。 〔口唇部〕横ナデ。
106	瓦質擂鉢	上位11.0 中位 9.0	精　良 白色粒 (少量)	灰　色	良　好 (堅緻)	条線の一単位は9本。	〔外器面〕 ナデ。指頭圧痕。 〔内器面〕 ナデ。掻き目。
107	瓦質擂鉢	底部 8.5 外底端 13.0 体部 7.0	精　良	〔外器面〕 灰白褐色 〔内器面〕 灰　色	良　好 (堅緻)	条線が器面一杯に掻かれている。	〔外器面〕横ナデ。 〔外底面〕ナデ。 〔内器面〕掻き目。
108	中世雑器 陶器 (胴部)	上位12.0 中位13.0	精　良	〔外器面〕 緑黄釉 〔内器面〕 灰(褐)色	良　好	〔内器面〕 器面は凹凸。	〔外器面〕 ナデ。 〔内器面〕 ナデ。指頭圧痕。
109	糸切り 土師皿	底部 6.5 外底端 6.5 体部 4.0	精　良 金雲母 (やや多し)	鈍い橙色	良　好	底径　6.1cm 平底気味で、一部に板目圧痕。	〔外底面〕 糸切り離し。 〔内底面〕 ナデ。
110	常滑小壺	底部 6.5 外底端 8.5 体部 7.5	精　良	小豆色	良　好	復元底径　10.1cm 平底。 外底端は角張る。	〔外器面〕 ナデ。指頭圧痕。 〔外底面〕 強いナデ。 〔内器面〕 強い横ナデ。

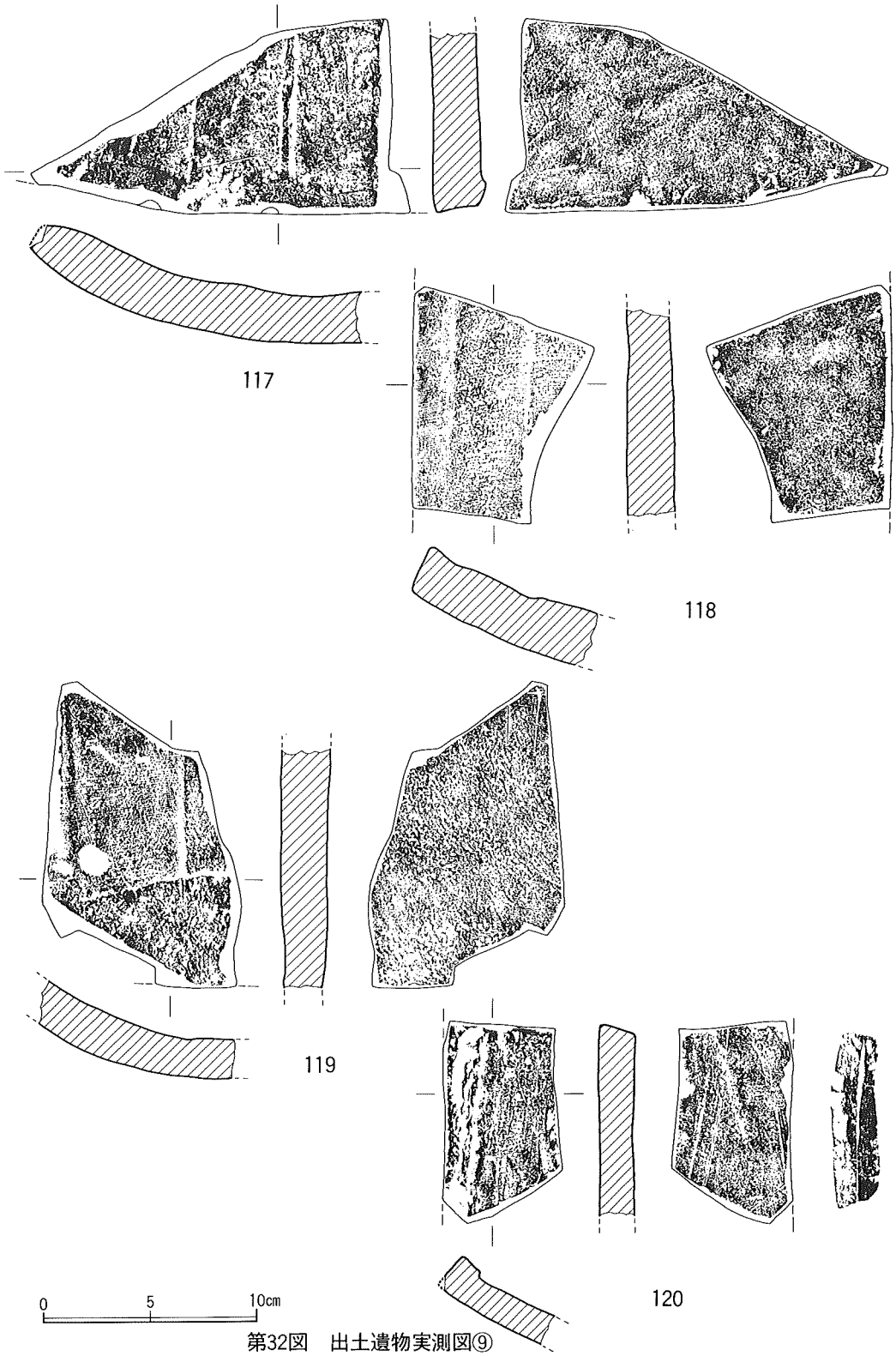
第28表　出土遺物観察表⑬



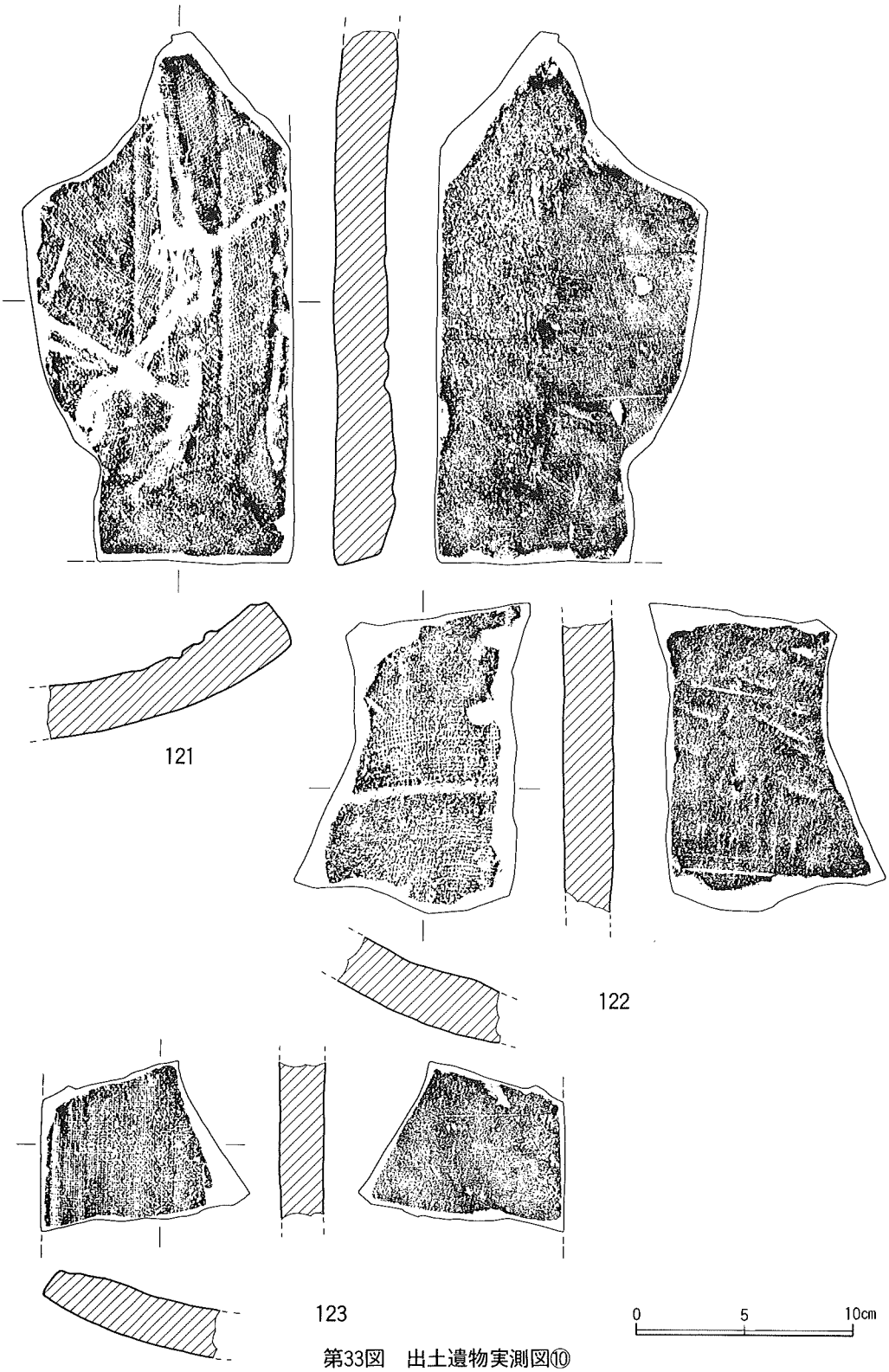
第30図　出土遺物実測図⑦



第31図　出土遺物観察図③



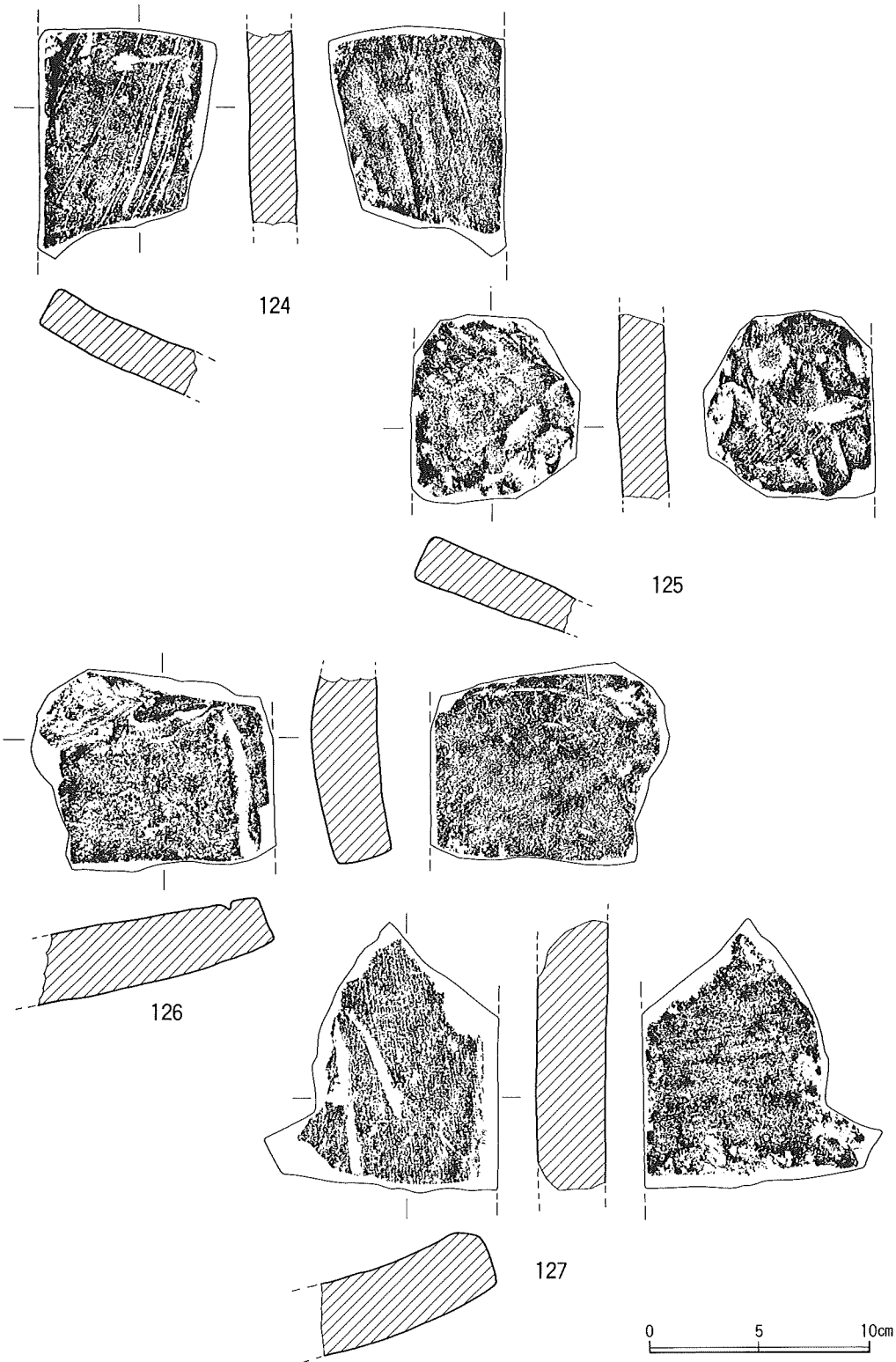
第32図　出土遺物実測図⑨



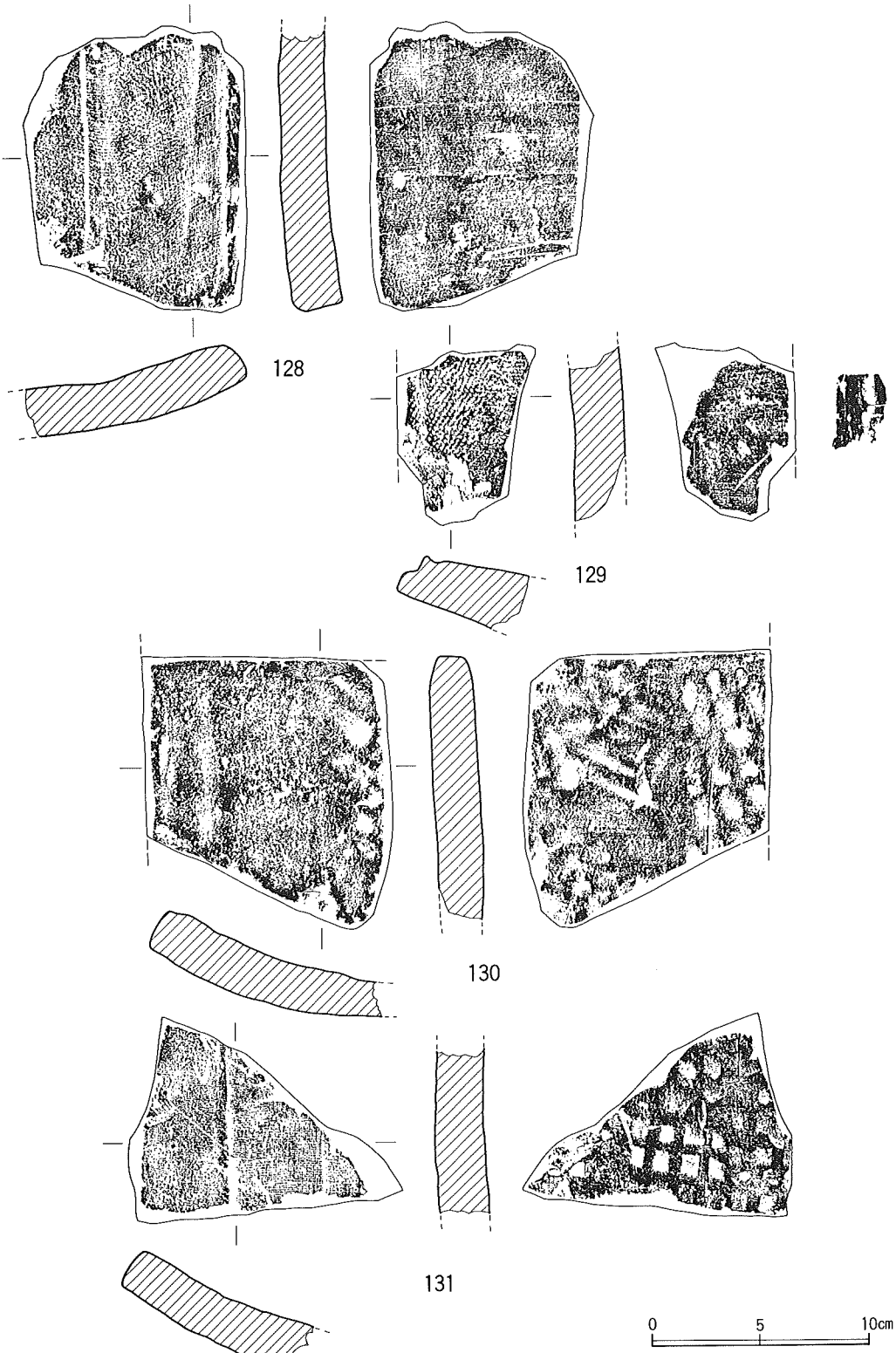
第33図　出土遺物実測図⑩

No.	器　種	器　厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼　成	調　　整
111	平 瓦	縦位　狭 2.0 　　広 2.0 横位　中 2.1 側　2.0～2.5	3,000.00	精　良 白色粒 (やや多し)	〔凹面〕 灰　色 〔凸面〕 灰色～灰黒色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。分割界線。 ヘラ削り。 〔凸面〕ナデ。
112	平 瓦	縦位　狭 2.3 　　広 1.7 横位　中 2.2 側 2.4	266.23	白色粒 (混入)	鈍い橙色	良　好	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 ヘラ削り。 〔凸面〕ナデ。
113	平 瓦	縦位　狭 2.7 　　広 2.5 横位　中 2.3 側 2.8	583.19	精　良	白灰色	甘　い	〔凹面〕布目。布端痕。 細長板による圧痕。 〔凸面〕斜め方向のナデ。
114	平 瓦	縦位　狭 2.8 　　広 2.9 横位　中 2.5 側 2.1	745.19	白色粒 (混入)	〔凹面〕 灰白褐色 〔凸面〕 白灰褐色	やや甘い	〔凹面〕布目。粘土紐痕。布端痕。 細長板による圧痕。 〔凸面〕横と斜め方向のナデ。
115	平 瓦	縦位　狭 3.0 　　広 2.4 横位　中 2.9 側 2.5	322.14	鉱　物 (混入)	白灰色	甘　い	〔凹面〕布目。布端痕。 〔凸面〕ナデ。ローリング。
116	平 瓦	縦位　狭 2.3 　　広 1.6 横位　中 2.8 側 2.2	450.51	精　良	灰白黄色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。強いヘラ削り。 〔凸面〕ナデ(斜めの小さな切裂が入る)。 〔側面〕破面が目立つ。
117	平 瓦	縦位　狭 2.1 　　広 2.0 横位　中 2.4 側 1.2	366.82	白色粒 (混入)	灰　色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。ヘラ削り。 〔凸面〕ナデ。
118	平 瓦	縦位　狭 2.0 　　広 2.2 横位　中 2.6 側 2.2	258.12	白色粒 (粟粒大) (多量) 鉱物　(混入)	灰白黒色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。 〔凸面〕ナデ。
119	平 瓦	縦位　狭 2.2 　　広 1.8 横位　中 1.8 側 1.9	334.96	白色粒 (多量に混入)	〔凹面〕 灰白褐色 〔凸面〕 灰白色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。布端痕。 〔凸面〕ナデ。
120	平 瓦	縦位　狭 1.7 　　広 1.7 横位　中 1.5 側 1.8	126.41	白色粒 (混入)	〔凹面〕 灰白色 〔凸面〕 灰白黒色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目が消えている(ナデのためか)。分割界線。 〔凸面〕ナデ。 〔側面〕破面。
121	平 瓦	縦位　狭 2.6 　　広 2.1 横位　中 2.4 側 2.3	914.69	鉱　物 (茶褐色) (混入)	鈍い橙色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。粘土紐痕。 ヘラ削り。 〔凸面〕ナデ。
122	平 瓦	縦位　狭 2.3 　　広 2.2 横位　中 2.4 側 2.4	364.99	鉱　物 (茶褐色) (混入)	鈍い橙色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。指頭圧痕。 粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
123	平 瓦	縦位　狭 2.1 　　広 1.9 横位　中 2.0 側 1.8	161.51	鉱　物 (混入)	褐　色	やや甘い	〔凹面〕布目。分割界線。 〔凸面〕ナデ。

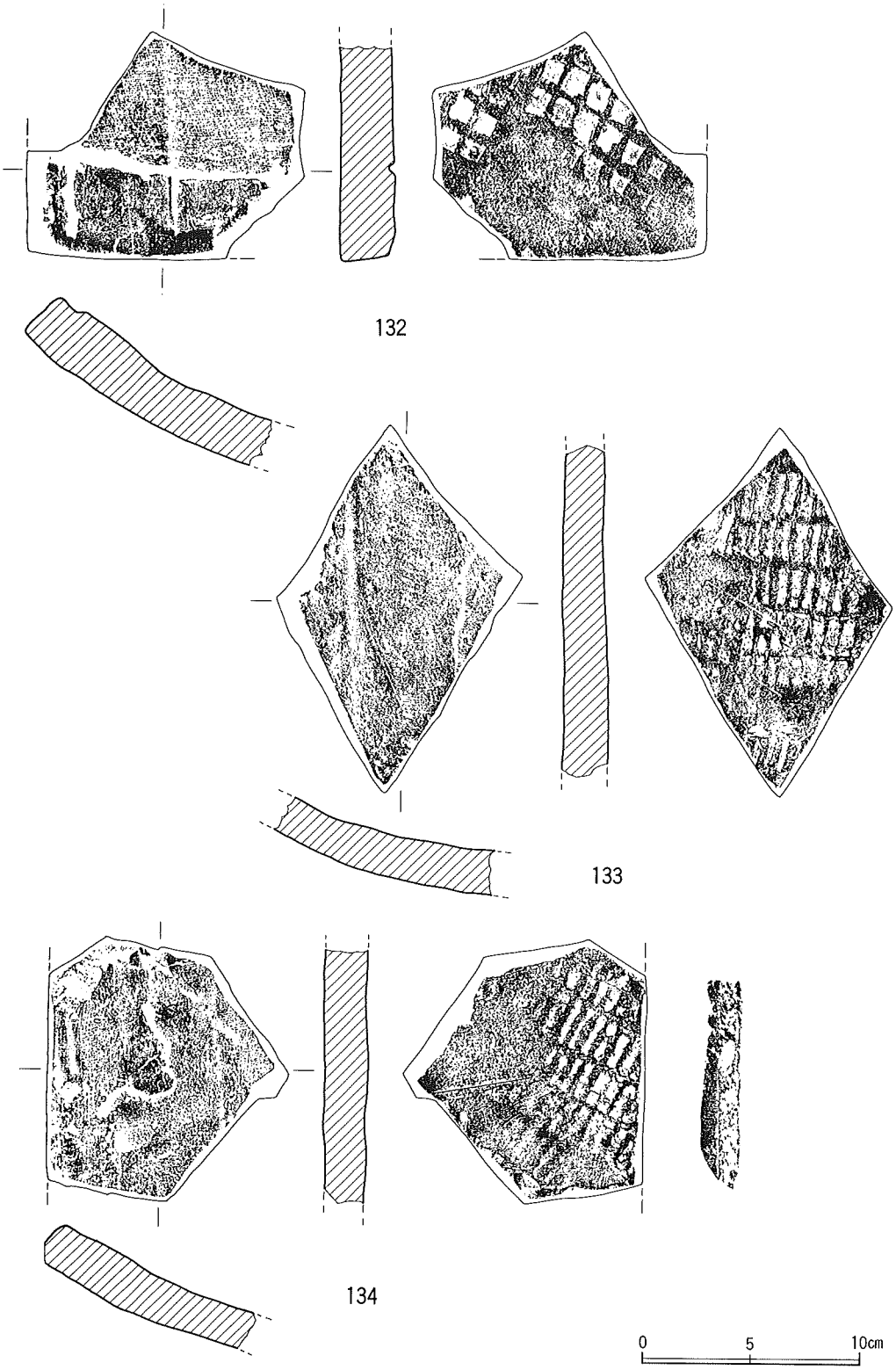
第29表　出土遺物観察表⑭



第34図　出土遺物実測図⑪



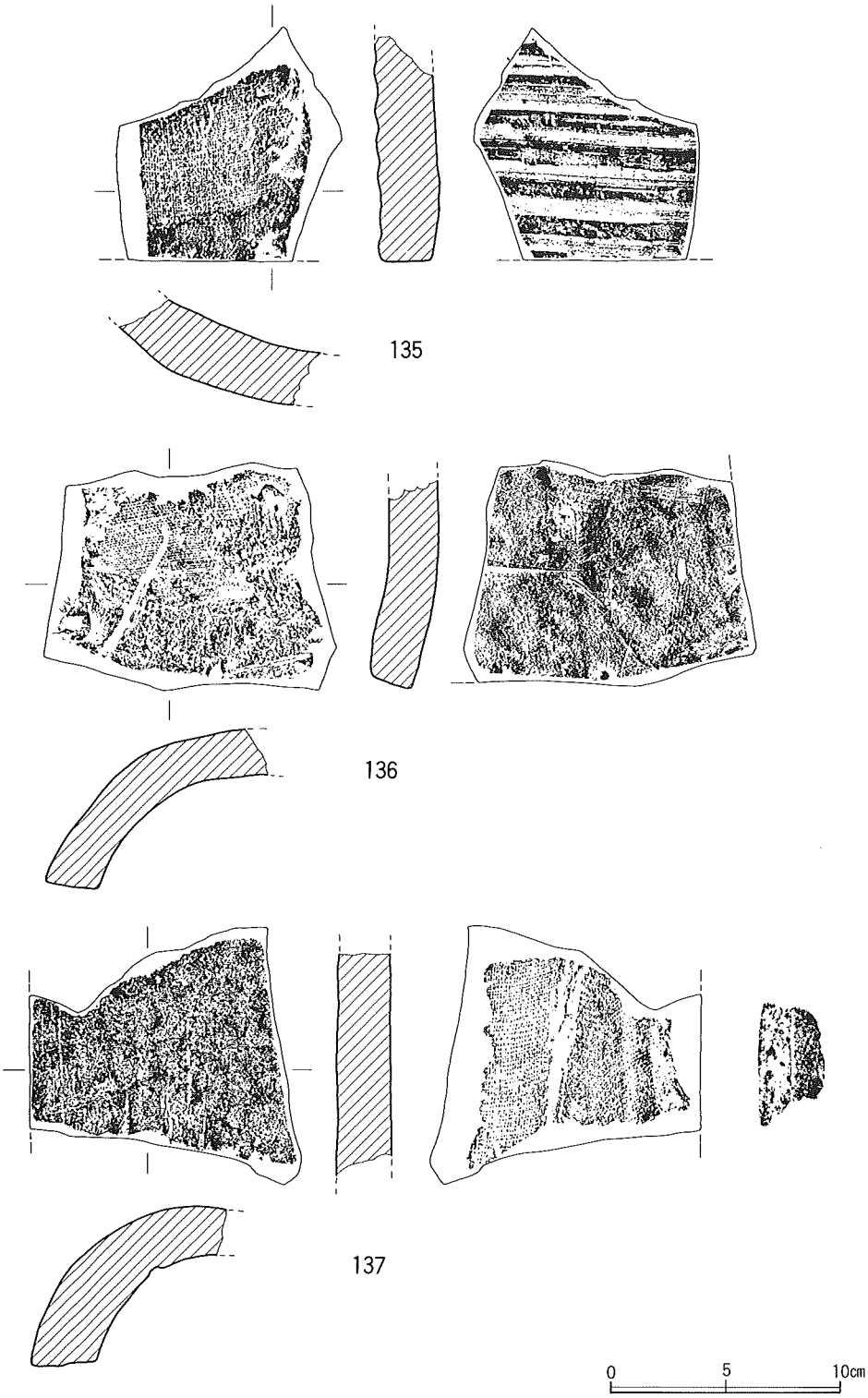
第35図　出土遺物実測図⑫



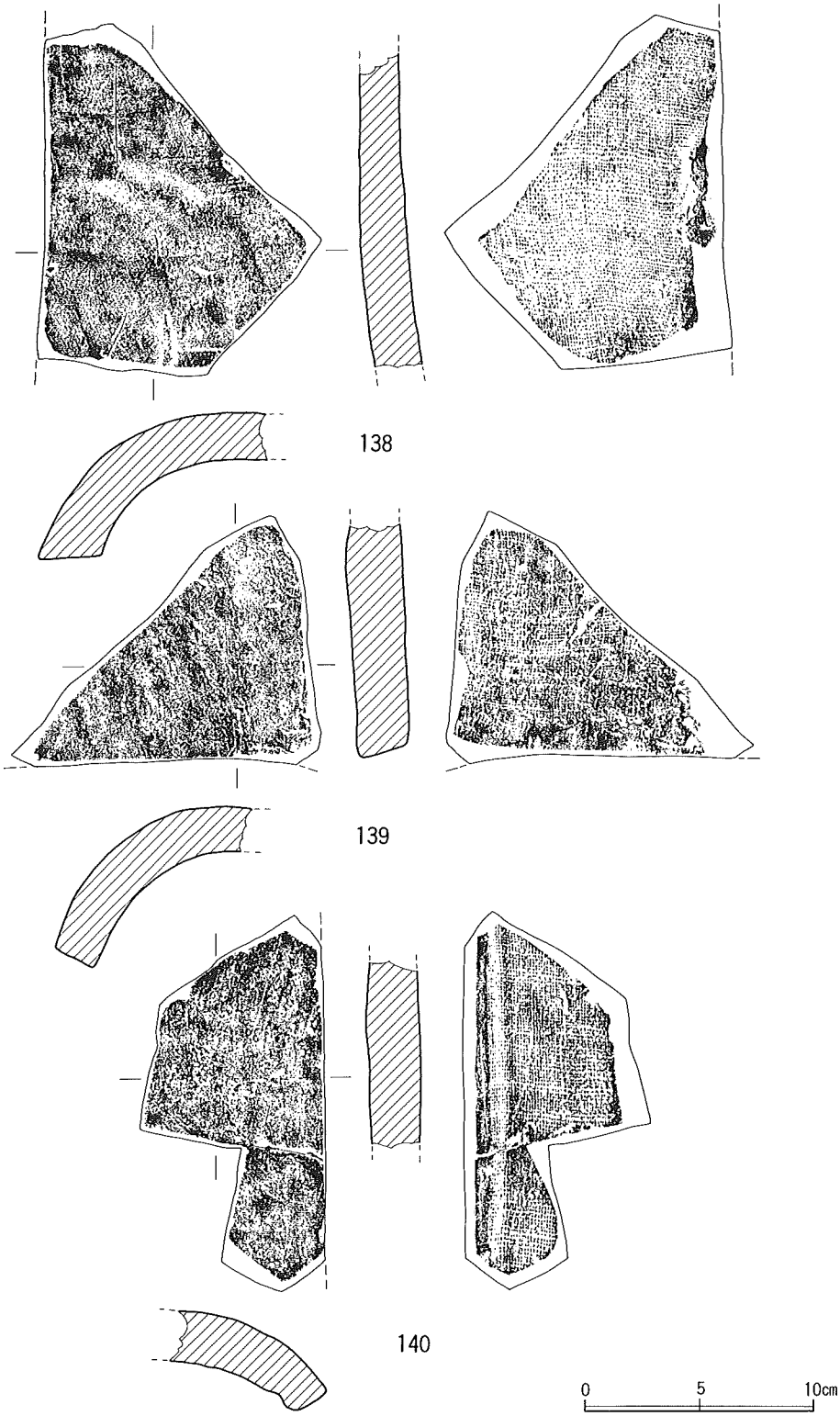
第36図　出土遺物実測図⑬

No.	器　種	器　厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼　成	調　　整
124	平 瓦	縦位　狭 2.1 　　広 2.0 横位　中 2.0 　　側 1.9	223.26	鉱　物 (混入)	〔外部〕 灰褐色 〔内部〕 橙色~鈍橙色	やや甘い	〔凹面〕布目(消滅・ローリング)。 細沈線。 〔凸面〕ナデ。
125	平 瓦	縦位　狭 2.0 　　広 2.1 横位　中 1.6 　　側 2.1	171.40	鉱　物 (混入)	褐灰色	やや甘い	〔凹面〕ローリング。 〔凸面〕ナデ。指頭圧痕。
126	平 瓦	縦位　狭 2.6 　　広 2.6 横位　中 3.0 　　側 2.2	365.08	鉱　物 (茶褐色) (混入)	鈍い橙色	良　好	〔凹面〕布目。分割界線。 〔凸面〕ナデ。
127	平 瓦	縦位　狭 3.2 　　広 3.1 横位　中 3.2 　　側 3.0	459.16	白色粒 小石粒 (多量に混入)	褐灰色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
128	平 瓦	縦位　狭 2.0 　　広 2.3 横位　中 2.2 　　側 1.8	386.32	黒雲母 (混入)	褐灰色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。分割界線。 ナデ消し。 〔凸面〕ナデ。
129	平 瓦	縦位　狭 2.3 　　広 2.3 横位　中 2.8 　　側 2.0	104.39	鉱　物 (茶褐色) (混入)	〔外部〕 灰黒色 〔内部〕 褐灰色	良　好	〔凹面〕特殊な布目(小斑点状を呈する)。 〔凸面〕ナデ。 〔側面〕２段から成る。
130	平 瓦	縦位　狭 1.3 　　広 2.0 横位　中 1.6 　　側 2.0	363.52	鉱　物 (混入)	白灰褐色	甘　い	〔凹面〕布目。模骨痕。 〔凸面〕格子目叩き。 凹：8×12mm。凸：5×6mm。
131	平 瓦	縦位　狭 2.1 　　広 2.2 横位　中 2.2 　　側 1.9	235.78	白色粒 (混入)	灰　色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。 〔凸面〕格子目叩き。 凹：8×8mm。凸：6×4mm。
132	平 瓦	縦位　狭 2.3 　　広 2.2 横位　中 2.3 　　側 2.3	345.02	精　良	〔凹面〕 灰白褐色 〔凸面〕 灰白色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。分割界線。 粘土紐痕。ヘラ削り。 〔凸面〕格子目叩き。 凹：11×8mm。凸：3×4mm。
133	平 瓦	縦位　狭 1.7 　　広 2.1 横位　中 2.0 　　側 1.8	289.04	鉱　物 (混入)	灰　色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。模骨痕。粘土紐痕。 〔凸面〕格子目叩き(短冊型)。 凹：4×16mm。凸：4×3mm。
134	平 瓦	縦位　狭 2.0 　　広 1.8 横位　中 1.7 　　側 2.0	288.59	精　良	灰　色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。粘土板合わせ目。 〔凸面〕格子目叩き(短冊型)。 凹：4×16mm。凸：3×5mm。
135	平 瓦	縦位　狭 2.6 　　広 2.3 横位　中 2.4 　　側 2.3	263.44	鉱　物 (黒色小斑点) (混入)	褐白色	良　好	〔凹面〕布目。 〔凸面〕太めの条痕。 凹：4～5mm。凸：１cm 深さ：1.5mm。
136	丸 瓦	縦位　狭 2.1 　　広 1.9 横位　中 2.0 　　側 2.4	368.02	白色粒 (混入)	灰　色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。布端痕。 〔凸面〕ナデ。指頭圧痕。 いびつな造り。

第30表　出土遺物観察表⑮



第37図　出土遺物実測図⑭



第38図　出土遺物実測図⑮

No.	器　種	器　厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼　成	調　　整
137	丸 瓦	縦位　狭 2.2 　　広 2.4 横位　中 2.0 　　側 2.7	335.25	白色粒 (多量に混入)	灰　色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。 〔側面〕破面。
138	丸 瓦	縦位　狭 1.7 　　広 2.1 横位　中 2.0 　　側 2.8	395.54	白色粒 (混入)	灰　色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。 〔凸面〕ナデ。指頭圧痕。
139	丸 瓦	縦位　狭 2.2 　　広 2.2 横位　中 1.9 　　側 1.9	374.51	白色粒 (混入)	灰茶色	良　好 (堅緻)	〔凹面〕布目。指頭圧痕。ナデ。 〔凸面〕ナデ。
140	丸 瓦	縦位　狭 2.1 　　広 2.1 横位　中 2.2 　　側 1.7	249.85	鉱　物 (茶褐色) (混入)	褐灰色	良　好	〔凹面〕布目。分割界線。 〔凸面〕ナデ。

第31表　出土遺物観察表⑯

〔瓦の分類〕

布目瓦については、調整方法によって、第13次調査から下記の様に分類している。

分類	調整方法	細分類	形　　状
Ⅰ類	格子叩き目	Ⅰa	大型の方形
		Ⅰb	中型の方形
		Ⅰc	小型の方形
		Ⅰd	大型の短冊形
		Ⅰe	中型の短冊形
		Ⅰf	小型の短冊形
Ⅱ類	条　痕	Ⅱa	横方向で、深く明確な条痕
		Ⅱb	縦方向で、深く明確な条痕
		Ⅱc	浅い条痕で、ナデにより単位不明のもの
		Ⅱd	浅い条痕で単位がわかり、幅が狭く、間隔の広いもの
		Ⅱe	浅い条痕で単位がわかり、幅が広く、間隔の狭いもの
		Ⅱf	深い条痕で単位がわかり、幅と間隔が広いもの
Ⅲ類	縄　目	—	――――――
Ⅳ類	調整により叩き目が消去されている	Ⅳa	滑らかな器面
		Ⅳb	帯状の圧痕が付く

第32表　布目瓦の分類表

第14次調査で出土した布目瓦の分類

〔単位：mm〕

分類	細分類	実測図No.	凹　面	凸　面	幅	間　隔	深　さ
Ⅰ類	Ⅰa	130	8×12	5×6			
		131	8× 8	6×4			
		132	11× 8	3×4			
	Ⅰb	—	—	—			
	Ⅰc	—	—	—			
	Ⅰd	—	—	—			
	Ⅰe	133	4×16	4×3			
		134	4×16	3×5			
	Ⅰf	—	—	—			
Ⅱ類	Ⅱa	—			—	—	—
	Ⅱb	—			—	—	—
	Ⅱc	—			—	—	—
	Ⅱd	—			—	—	—
	Ⅱe	—			—	—	—
	Ⅱf	135			4～5	10	1.5
Ⅲ類	出土例なし。						
Ⅳ類	Ⅳb	—					
	Ⅳa	111～129					

第33表　14次調査出土の布目瓦の分類表①

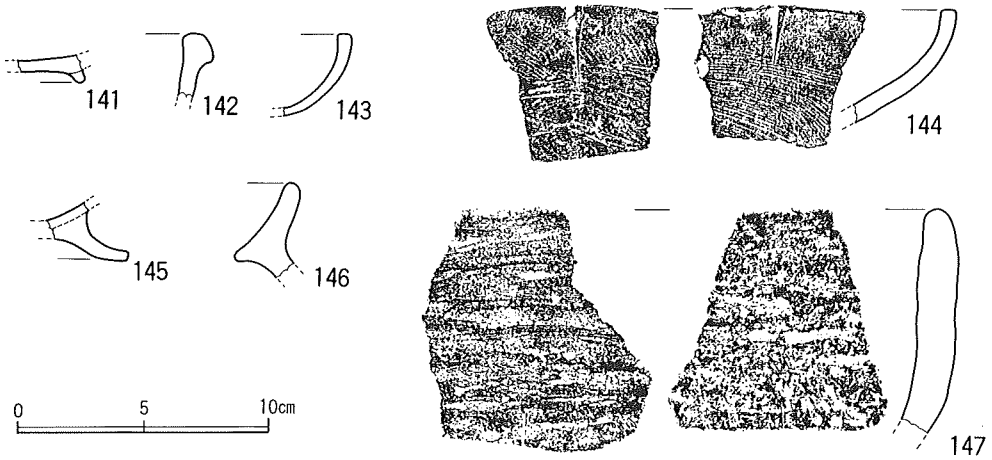
(注)図示しなかった布目瓦(調整はすべてナデ)の色調と重さは下記のとおりである。なお、色調については、第13次調査で分類したものを基準とした。

色　調	焼　成	重さ(kg)	備　考
白　色	軟	—	平　瓦
灰黒色	軟	1.9	〃
灰白褐色	やや軟	15.6	〃
灰　色	硬	8.3	〃
灰茶色	軟	1.0	〃
茶　色	硬	—	〃
褐　色	やや軟	0.8	丸　瓦
橙　色	硬	6.9	平　瓦
灰褐色	やや軟	10.7	〃
計		45.2	

第34表　14次調査出土の布目瓦の分類表②

2．20調査区

少量の遺物が表土から出土している。141は高台付き椀の土師器である。142は近世陶器で、器面に茶黄色の釉がかかる。143～146は弥生土器で、143・144は椀、145は高台付き椀、146は小児用甕棺の口縁部である。147は縄文土器の甕で、体部は肥厚する。



第39図　出土遺物実測図⑯

No.	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼　成	形　態	調　整
141	高台付き土師器椀	底部 4.0 高台 4.5	精　良	白灰色	良　好	付け高台は短く、外側へ張り出す。	〔内外器面〕 ローリング。
142	近世陶器	上位12.0 中位 6.0	精　良	茶黄色 (釉がかかる)	良　好	口唇部は大きく肥厚。	〔内器面〕 強いナデ。
143	弥生土器 椀	上位 6.0 中位 4.0 下位 3.5	鉱　物 (やや多し)	乳白色 〔内部〕 灰黒色	良　好	体部は大きく内弯。 口唇部は扁平。	〔内外器面〕ナデ。
144	弥生土器 椀	上位 6.0 中位 7.0 下位 6.5	鉱　物 (やや多し)	褐灰色 〔内部〕 灰　色	良　好	体部はやや内弯する。 口唇部は扁平。	〔内器面〕横ナデ。 〔口唇部〕ナデ。 〔外器面〕 横ナデ。斜めの刷け目。
145	弥生土器 高台付椀	高台端部 5.0	精　良	乳褐色 〔内部〕 黒灰色	良　好	付け高台で、弯曲しながら大きく外側へ張り出す。 端部は、ややめくり上がっている。	〔内底面〕ナデ。 〔高台〕 外側：丁寧なナデ。 内側：丁寧な横ナデ。
146	弥生土器 小児用甕棺	口縁部 上位 8.5	精　良 白色粒 (少量)	〔外器面〕 灰褐色 〔内器面〕 褐灰色	良　好 (堅緻)	口唇部は丸味を帯びる	〔外器面〕 丁寧なナデ。 〔内器面〕 丁寧な横ナデ。
147	縄文土器 甕	上位 1.3 中位 1.5 下位 1.1	白色粒 (多量)	灰褐色	良　好 (堅緻)	体部は肥厚し、直線的に伸びる。	〔外器面〕 強い横ナデ。 〔内器面〕 横ナデ。ザラザラ。

第35表　出土遺物観察表⑰

第Ⅴ章　まとめ

(1) 平成４年度(第14次)の調査で注目すべき事は、次の２点である。第１点は、19調査区から、鞠智城の終末期(９世紀末)に該当する36号礎石建物が検出された事で、第２点は、町道から東側の上原地区で2,000㎡に及ぶ遺構の空白地帯(20調査区)が見つかった事である。

第１点は、これまで建物の年代が創建期(７世紀後半)に限られていたので、貴重な発見である。ちなみに、36号建物の礎石には、総てに地業穴が掘られており、内、一つの地業土からは９世紀末の高台付き土師椀(44頁 第26図 No.53)が出土した。この事により、建物は『文徳実録』や『三代実録』に記載された記事内容と同一時代のものである事が判明した。この36号建物について、大方の礎石は大幅に傾いており、過年度に発見された礎石にない現象を呈していた。これに加えて、全体的に粗雑な整形で寄せ集めの観が強いものであった。(礎石自体は二次的な再利用をも意味する) これらの事は、鞠智城の終末期を象徴する検出状況と言えるのではあるまいか。

第２点は、町道から西側の下原地区(字・長者原)との対比で興味がある。下原地区からは、これまでに49棟を数える建物が検出されている。特に、近年の第10～13次調査を例にとれば、約25,000㎡の調査区域内から実に43棟が検出されているのである。もちろん、すべてが同一時代のものではないが、驚くべき建物の数と言えよう。従って、上原地区において2,000㎡にも及ぶ遺構の空白地帯が出現した事は一考に値する。

この事に関連した調査結果がある。第６次(昭和55年度)と第10次(昭和63年度)に上原地区の一部を発掘調査しているが、1500㎡を調査した第10次でも建物は１棟のみの検出にとどまった。トレンチ調査の第６次では、建物の存在を確認していない。

以上の事からしても、下原地区と上原地区とでは建物の分布状況に大きな違いがある事は確かである。これは又、城域を使用目的に応じて、いくつかのブロックに分けていく試みにも繋がる事になる。かかる意味においても注目すべき調査結果である。

(2) 出土遺物では、19調査区から９世紀代の高台付き土師椀の出土が目立ったものの、これに見合う須恵器の出土は皆無に近かった。大方は７世紀後半のものである。この事は、ここ数年の調査でも気する所であったが、今回、顕著な事象として出現した高台付土師椀と須恵器との時代的不整合は、今後の研究課題である。

(注) 図示しなかった細片土器の重量は下記のとおりである。

＊土師器 (杯や高台付椀)	0.9 kg
＊土師器 (古墳時代)	10.4 kg
＊弥生土器	8.0 kg
＊須恵器	2.0 kg

(3) 土塁線については、調査箇所に限るが、版築状態にはない事が判明した。となれば、従来から言われている様に地山の削り出しという事になるが、この点に関しても確証が得られなかった。ちなみに鞠智城の土塁線とされるものは、台地の縁を巡る尾根線状の高まりで、小山状のものがアップダウンを繰り返し、部分的に馬の背の地形がつながる事になる。土塁線の解明は、今後の大きな研究課題である。

(4) ① 城域の問題は去年以上の進展を見なかった。崖線と尾根筋の組み合わせによって形造られる城域ラインは確かに理にかなうものである。囲繞ラインの確定という点で、朝鮮式山城の定義にあてはまっている。が、鞠智城の場合、大野城や基肄城とは地形的に大きく異なる事が明らかである。従って城域の線引きにあたり「はじめに、机上のプランありき」という一面がある事は否めない。

真の城域と見なされる内城の囲繞ラインについても疑問は残る。佐官ドンから灰塚～長者山(木野地内)ラインが自然地形利用の土塁線であるなら、「涼みケ御所」から「ゴンゲンサン」の山頂へ至る馬の背の尾根筋をどう説明したらよいか。さらには「灰塚」から「長者山(米原地内)」に至る尾根ラインはどうなるのか。ちなみに、これらは全くの同一地形と言って良い。それは単に囲繞ラインに乗るか、はずれるかの違いに過ぎないのである。

ゴンゲンサンの山頂には遺構が埋没している様に思える。山頂は狭いが平坦面が有り、礎石状の岩の露出も見られる。

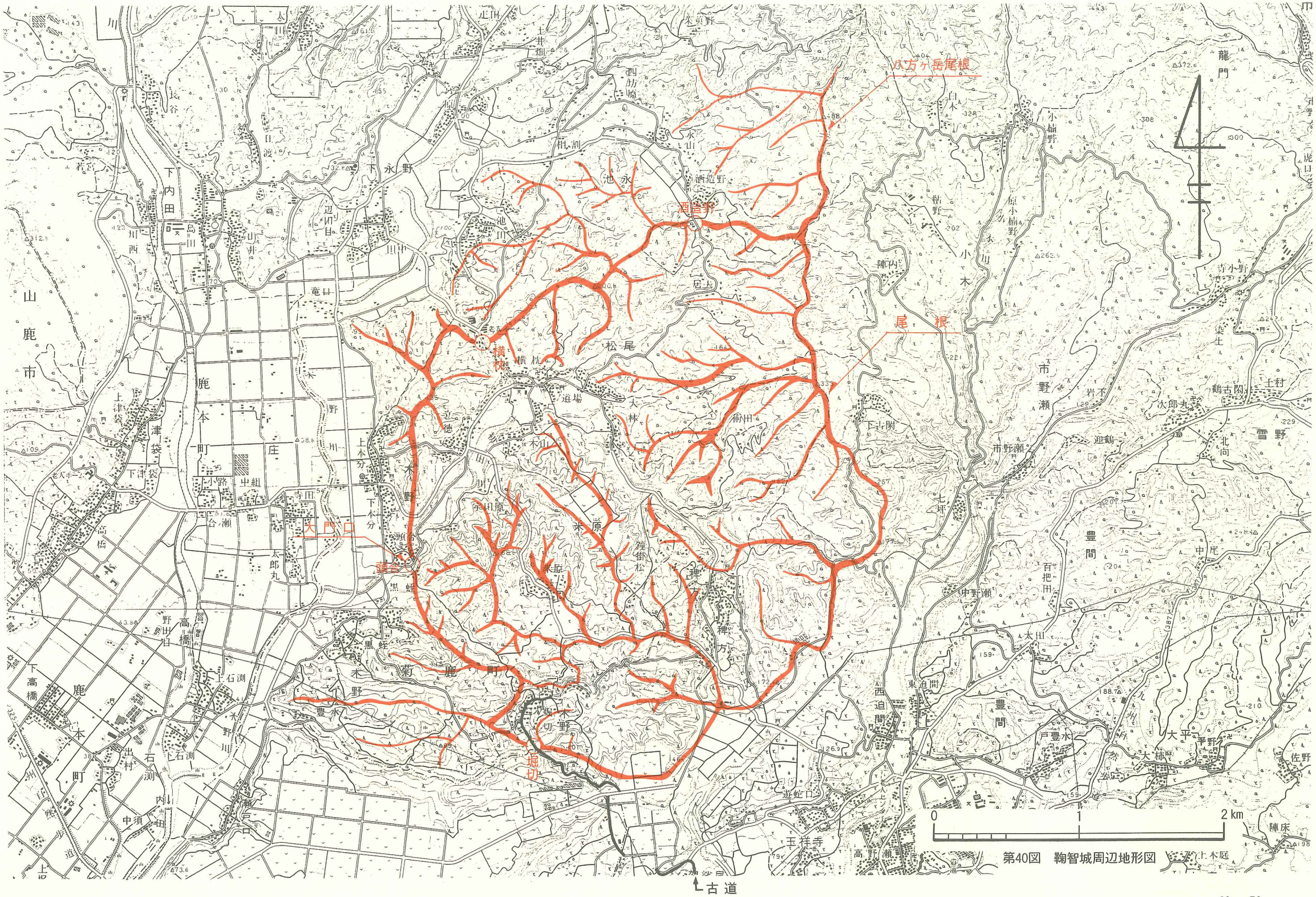
② 今のところ、城の北域ラインから門礎石の検出はなされていない。しかし、この区域には台地の中央部から開析谷がくだっている事を再認識すべきである。したがって、開口箇所に城門や水門の施設が必要である事は言うまでもない。出宮徳尚氏(岡山市教育委員会)は水門の存在を強く推している。

③ 概して、城の北側の守りは地形的に見ても弱い。となれば、やはり米原台地の西側にあたる「大門」口が問題となっている。ここで米原台地の西隣りに「頭合」を南端とする尾根筋が「金頭山」方向へ北進している事を思い起こす必要がある。この地形により前出の「大門」口と「頭合」の間を仕切れば、敵の北への進入が大筋で防げる事になる。一見すればひ弱に見える北の守りは、案外、この辺のところに因があるのかも知れない。

〔付記〕

右頁、第40図 鞠智城周辺地形図は、米原台地を巨視的に見立てた場合、その周辺地でいかに開析谷が発達しているかを示したものである。

地図上に現われる鞠智城への進入路は、北で酒造野、北西で横枕、南西で頭合・大門口、南で堀切箇所に限られている。この中で大きな谷口はやはり頭合・大門口である。



第40図　鞠智城周辺地形図

〔付論〕　鞠智城調査資料

竹下輝幸氏(菊鹿町文化財保護員)から、同氏によって保管されていたガリ刷りの史料をいただいたので、本報告書に収録する。

昭和初期の鞠智城に対する見解が述べられており、貴重な論文である。

久保山善映師　　鞠智城見学私見　　昭和6年3月7日

久保山師は佐賀県基山村の坊さんで先には、基肄城、大野城を発見された学者で本年3月7日熊本の平野先生方の御案内にて当地踏査になりました。

此の文は其の時の御感想御意見です。

基肄城研究上大なる遺感であったことは仝城の南部にも厳重なる防備を施せることや、本誌三号に掲げた様な小水城の観がある。関屋の遺址などは、有明海方面より侵入する外敵に備える為であろうと想像せられながら、鞠智城の史跡が明らかでない為に、積極的に立証することが出来ない事であった。

従来諸先輩の天智天皇当時の国防施設を論議せられるのにも、鞠智城の存在には余り重きを払っていない様であった。本問題に関して有力なる権威である竹内陸軍少将が筑紫史談第四十六集に、太宰府を中心としたる国防構築と言う御発表にも何等鞠智城に触れていない様である。

私はどうもこれが腑に落ちなかった。それで熊本県の知己の方々や、学校や役場へ手紙を出して其の手蔓を見出そうと努めたが、それは全く失敗であった。然るに昨年11月30日黒板博士が基肄城の実地踏査を行なわれた時に、熊本県史蹟調査員平野文学士が御同行下さったことは、何よりの仕合せであった。私は上の事情を述べて鞠智城研究の必要を訴えたが、先生も最初はどうかとお考えになったらしかった。それから私は手紙を差し上げて卑見を開陳した。其の要領は我が帝国が支那大陸に面している地方は我が九州の西海岸である。それでもし唐の来襲を想像するならば、此の方面を警備すべき当然のことであらねばならない。現に我が肥前に、松浦郡の西南海中にある志賀島や彼杵郡高来郡に多くの烽を置かれた事は、何よりの証拠と言はねばならぬ。従来我が肥の前後は地理上の国防上の第一線に立っていながら、余りに此の問題に冷淡で博多方面のみを重視した嫌いはなかったか、元寇覆滅の地が堂々たる元寇殲滅云處なる記念碑の聳立せる今津湾でなくて、肥前の鷹島であることは、雄弁に是を物語っているのである。遣唐使の航路から考えても、唐との交通上東支那海横断と云うことは考慮せねばならぬとの考えである。平野先生は熊本の地歴学会の幹部の方々や、菊池郡の同好の方々と熱心に調

査せられて鞠智城第一推定地を発見せられて（平野先生は此の事について言っておられます。本地を鞠智城推定地としたのは、実は大正８年頃大阪毎日記者中島秀雄君によって唱えられたもので自分を発見者と云はれるのは心苦しと）、２月１日前記の諸先生145名、比較研究の為め我が基肄城の見学を催されて私は其の案内役を仰せつかったが、その際の御約束により本月７日鞠智城推定地の見学を行なった。在熊中の梁井卓一氏も同行せらるることとなった。私共は平野先生外３名の方々に案内せられて目的地（熊本から五里余り）に到着した先生からの電話によって城北校から４名の先生の御出迎を受けて御懇篤なる案内の下に想定の見学を終わり熊本に引き返した。勿論未だ推定地で確定した訳ではないが、色々な方面から推して十中八九間違いないと考えられるし、平野先生はじめ地歴学会の諸先生、地元の先生の熱心な研究振りでは、其の確定せらるるのは単に時間の問題であろうと思われる。此の鞠智城の顕現は、我が基肄城価値を確実にする許しでなく、国史研究上多大なる影響を興うるものと信ずるから、管見を録して諸先輩の方々の叱正を仰ぐと共に、肥前史談に連載中の、基山の史蹟については一回中止して、会員諸君の御参考に供することとする。

一．推定地

熊本県菊池郡城北村字米原付近　山鹿隈府の中

二．文献より見たる鞠智城

日本書紀（天智天皇紀）四年二月條の又築長門城へ筑紫城二は城三の誤りではないか。それは続日本紀（文武天皇）二年五月の條甲申令太宰府繕治大野基肄鞠智三城仝書三年十二月條の甲申令太宰府修三野、稲積二城とありて、天智天皇の四年に築いた大野、基肄の両城と合わせて、筑紫の五城と称するからである。兎も角我が九州に朝鮮式山城が五城あったことは間違いあるまい。此の鞠智城が文徳実録、三代実録に掲げられた肥後国菊池城院であることは想像に難しくない。即文徳天皇天安二年戊寅閏二月二四日丙辰肥後の国言す。菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。云々、同年六月二十日己酉、太宰府言す。去月一日（中略）肥後国、菊池城院の鼓自から鳴り、同城の不動倉十一宇火くと。陽城天皇の元慶三年にも肥後の国菊池城院の兵庫云々の記事がそれである。兵庫が兵器貯蔵所であるから当然のことと言はねばなるまい。また不動倉が城内に設けられたのも、其の性質上尤もなことであろう。もし不動倉は非常時に備ふる糧食の貯積所であるからである。

類聚三代格に用事中、太政官符を以って不動穀者遠年の諸非常之備、尋常之時不可輙用といい或いは臣聞洪範八政以食為首。帯里百萬□粟非守。故先生制政充倉□。往哲垂規期手足食と言えるが如き證すべきである。貞観八年十二月八日には太政官符を以て右不動之物石国家貯積。非有官符何輙開用。と不動穀を開用することを禁制してある。菊池城の不動倉十一宇火の記録

は、同城内に非常時に対する糧食が準備せられていたことを語るものであろう。恐らくこの不動倉は復興されたのであろうが、王政の弛綾と共に、菊池城、兵庫と共に廃頽して、肥後國志に所謂蔵床として名残を止めたではないか。同志の土居は即ち土塁で、水城の堤を土居山と云ふに等しく長者屋敷と称して展望に富あるところは、守城司跡とも見ることが出来よう。

一．現存する遺構

① 土塁

基肄、大野城の如く鮮明ならざるも、断続的に高台の周辺に残存している。

② 礎石

肥後國志に記せられた如く、耕作に妨げありとして大部分埋めもどされたるも路傍、畔半等に多数移動せらるるを見る。長者屋敷付近に原状のまま残存せるもの二ケ所あり、礎石間の距離は基肄、大野両城と同じく７尺である。

③ 布目瓦

長者屋敷付近其他に散乱していたが耕作の邪魔になるとして漸次取り除けりと言う。当日平野先生が拾われたのを中山博士の御鑑定をお願いしたが切り口がないので年代鑑定が出来なかった。(佐藤記、其後数枚を拾って居るが末だ鑑定を受けず、巴瓦見出さず)

④ 焼米

隈府行の道路の右手に素人目には基山の焼米と同じ様な焼米を出すところがある。

⑤ 地名

木(城)山涼(烽)殿蔵床、祭屋敷、木(城)野城、米原、長者屋敷等があり道西半里許りの所に鹿本郡、日(火)の岡がある等史跡を偲ばせる地名が多い。

⑥ 伝説・米原長者の伝説

米原長者と国分長者との間を絡まる車路の伝説は鞠智城と国府との駅路を暗示するものであろう。

⑦ 地理上の観察

太宰府南方の第一線、即ち有明海方面の警備としては、海岸を距ること稍遠きに失する感があるが、下の諸点から考察すれば却って適当な地点を認めることが出来よう。

a：菊鹿両郡の平野を脚下に俯儼する高地出、近く水島台を控えた形勝な地である。

b：肥後北方の平野で太宰府との交通も便利であったと考えられること。筑後の福島に出る路があり、後世菊池氏の太宰府地方の出動は皆これによっている。古の駅路もここを通じていたと想像せらるること。

c：山城の任務は単に軍事上ばかりでなく、有事の際には城下の官衙を移し付近の住民を収容保護する必要があるから、直接敵の攻撃を蒙る海岸地方より海岸に遠ざかった地を

安全とすること。

d：朝鮮式山城では腹背敵を受け易い地は、適当でないとの事であるが此の点も沿海地方より奥まった地が良いのである。

e：軍事上の糧食を観慮することは云ふまでもないことで現に菊池城に不動倉を設けたので、当時の用意が伺われるので、この不動倉に充つべき穀は、これを菊池平野に求めたのではないか。肥後国は往時九州誰一の上国で、延喜式によれば、正税公厳各四十萬束で恰も筑前・肥前両国分に相当する。これは一面同国の農業が夙に発達することを證するもので、特に同地方を重視したことにもなろうと思われる。

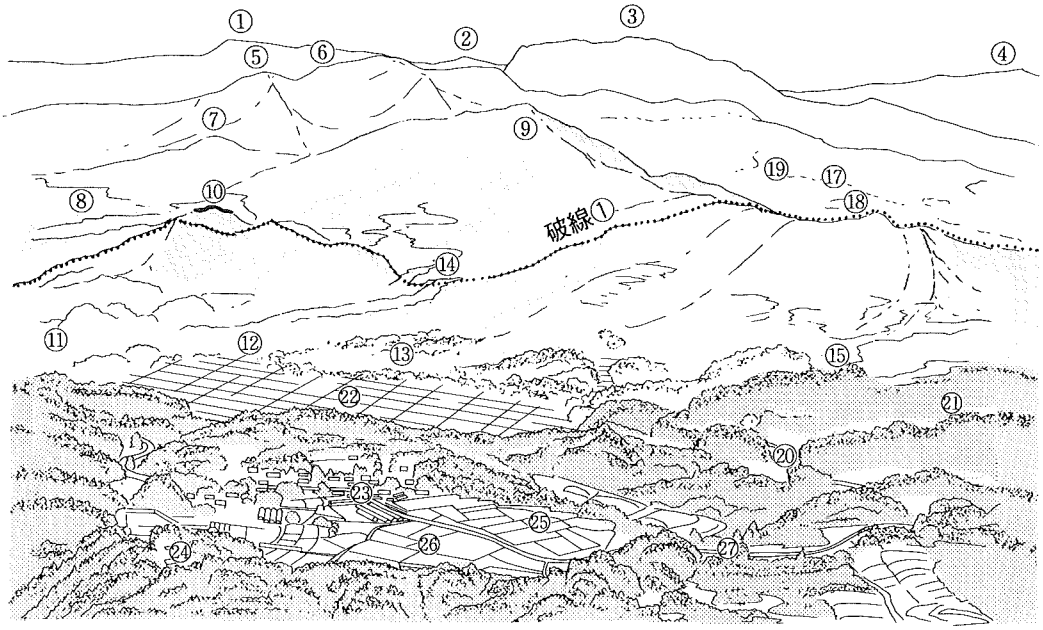
f：地形が築城に適している事である。朝鮮式山城を築くには栲老峰といって、四方高く中低き山地が最も之に適し、その次は蘓峰とて其山の頂が平かに広くして、四方が切立ったのがよいと言うことであるが、それは理想であって恰好の地は容易にあるものでないから、大野山や基山はこの栲老峰の部に属し、米原付近の台地は蘓峰といっても差支あるまい。本分の方から米原に上って行く時は丸林住吉宮へ登って行く気分がせぬでもないが、長者山から展望すれば山と言う感じよりは高台と云うほうが、適当の様に感ぜられる。

g：形式、前に述べた様な地形であるから、大野、基肄両城を凹字型と云うならば、鞠智城は高台とも云えよう。鞠智城で特に注意を惹くのは前方半環状に長く続かせる防禦線である。これは大野城では水城の線に相当し、基肄城では昨年五月に発見した。山口村筑紫村の境界に施せる。第一防禦線は基肄城より直角に東に向かっているが、鞠智城のは其の外側に半環状に施されていることである。これは地形によって築かれたもので目的の上からは変りはあるまい。鞠智城の場合では本城と外郭との接合点は特に研究を要すべきものではなかろうか。鞠智城のこの形式は香川県稜歌郡の城山城(正史には欠けているが朝鮮式山城と称せらる)と酷似している。城山城では本城の土塁を第一車路とし外側の土塁線を第二車路と名づけている。(基肄城でも)筑前山口の方では、この土塁線を車路と云って居るが、此の車路の名称は大野城にも、三野城にもある様であるがこれは土塁線が環状に山を取りまいている為ではなかろうか。兎も角、鞠智城の形式は香川県の城山城取り巻くよく似た形式の様である。

勿論この鞠智城址といったのは推定地で、まだ確定したものではないが、前述の文献、伝説、遺跡、地理等の各方面から考察すれば十中八九は確実のものであろうと思われる。此の地は後世菊池氏の十八外城の第一線で、今川氏と対向せし戦蹟であり、明治十年の役には彼我の激戦地として砲塁、塹壕等縦横に残存している。

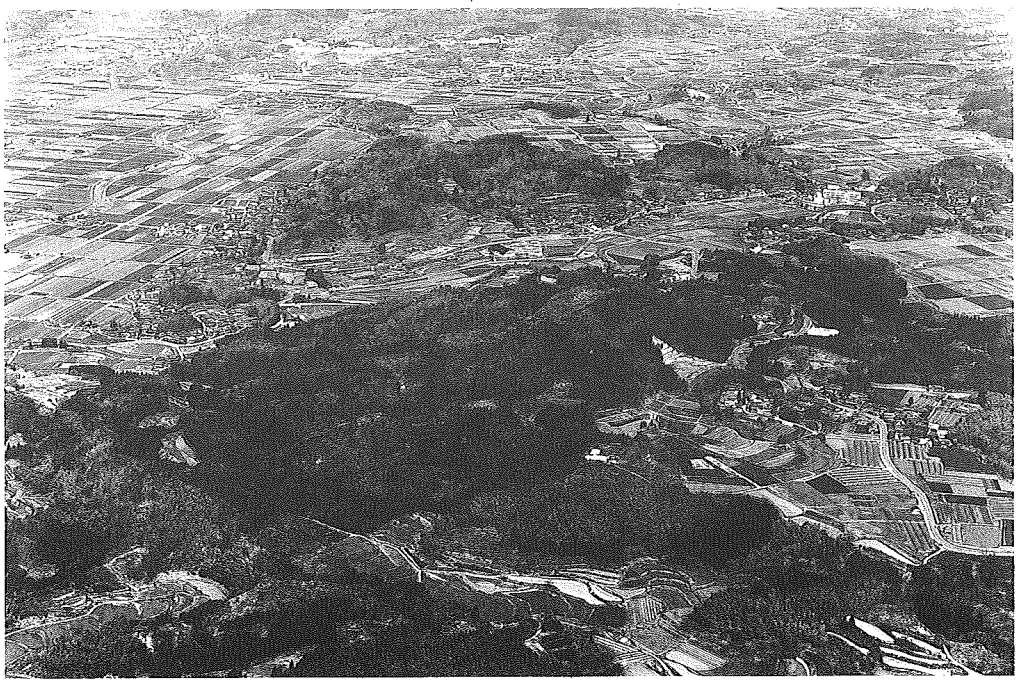
写　真　図　版

図版１　八方ケ岳の南側山麓に築かれた鞠智城

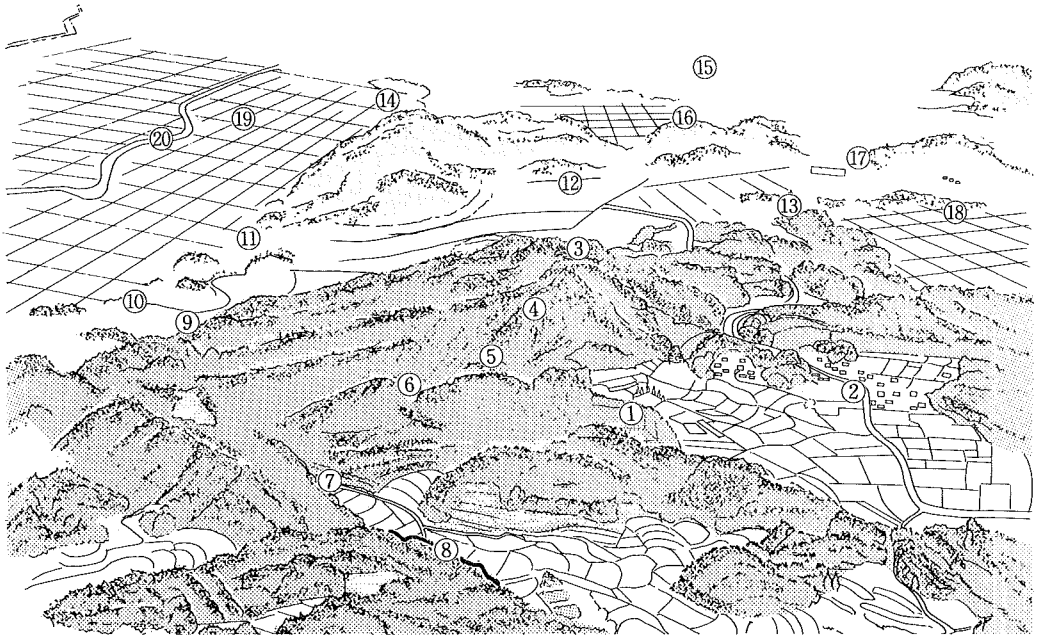


① 国見山（福岡県境）
② 三国山
③ 八方ケ岳
④ 酒呑童子山（大分県境）
⑤ 城床（中世山城）
⑥ 猿返山
⑦ 隈部館（中世）
⑧ 永山
⑨ 夫婦岩
⑩ 金頭
⑪ 木山
⑫ 道場
⑬ 大林
⑭ 酒造野
⑮ 術田
⑯ 足手荒神
⑰ 龍門（菊池市）
⑱ 陣内（龍門地内）
⑲ 白木（龍門地内）
⑳ 鐘掛松
㉑ 稗方
㉒ 木山畑総地区
㉓ 米原
㉔ 長者山
㉕ 上原
㉖ 下原（字・長者原）
㉗ 三枝の石垣

＊破線①はかつて提唱された外郭線。

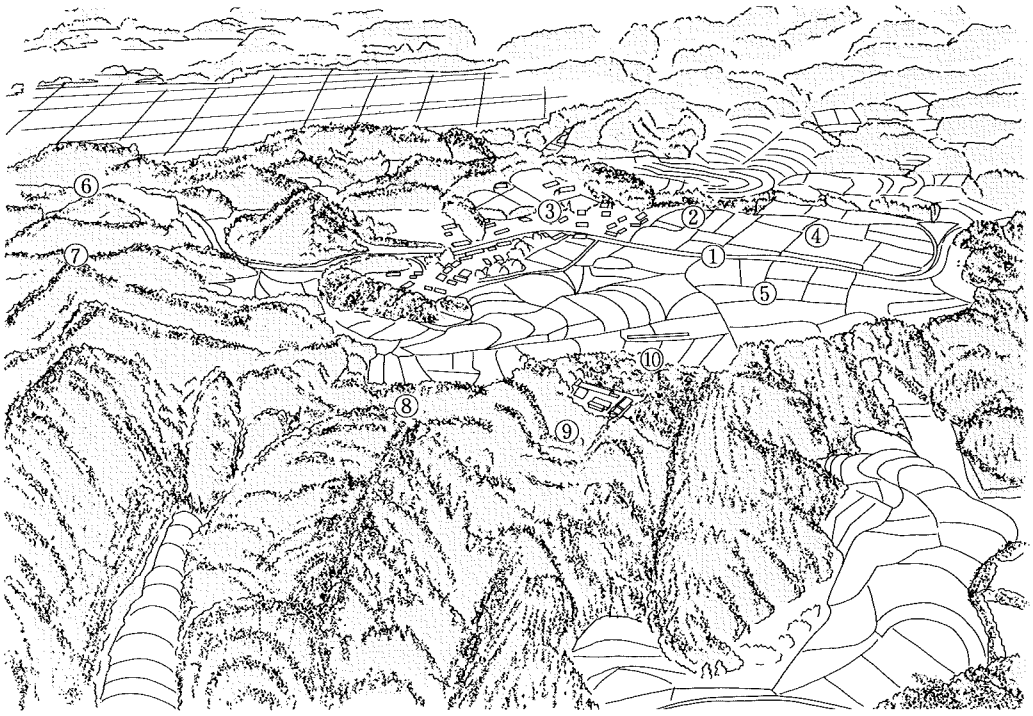


図版２　鞠智城の北側と西側をのぞむ



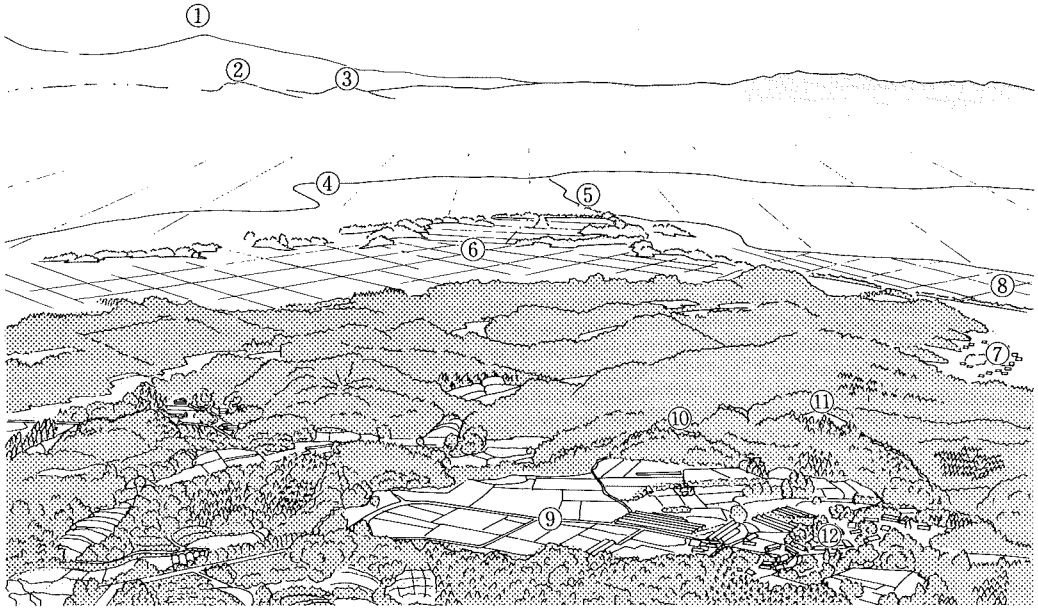
① 長者山（字・長者原）
② 米原
③ 佐官ドン
④ 涼みケ御所
⑤ 灰塚
⑥ 長者山（大字・木野）
⑦ 池の尾門礎
⑧ 屏風岩ライン
⑨ 大門
⑩ 下本分（頭合）
⑪ 上本分
⑫ 立徳
⑬ 木山
⑭ 腰掛松
⑮ 下永野
⑯ 木野城（中世）
⑰ 横枕
⑱ 道場
⑲ 鹿本平野（条里制）
⑳ 木野川

図版３　鞠智城の中心域をのぞむ



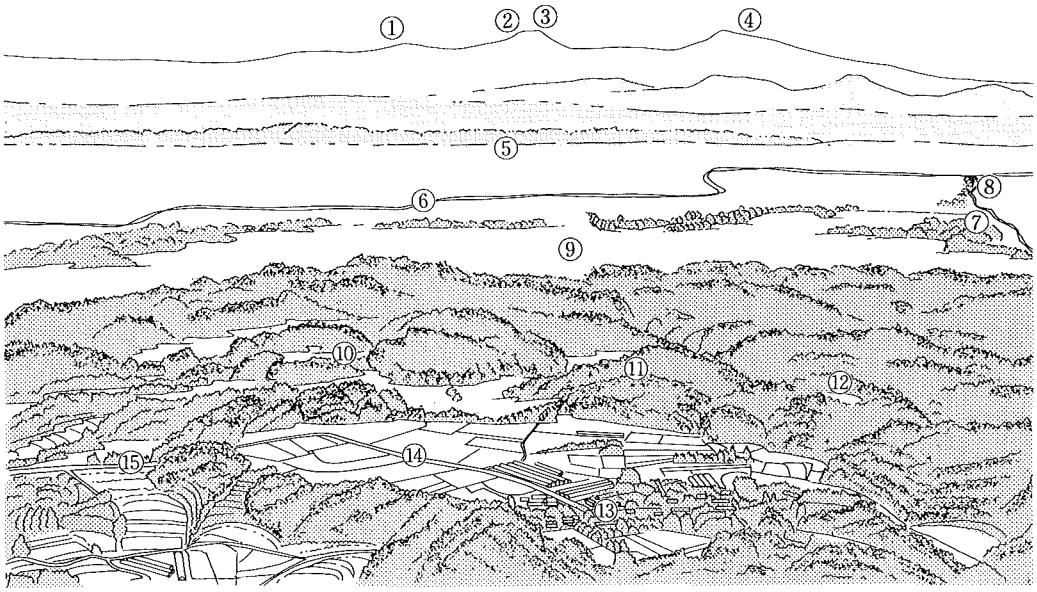
① 町道（立徳・稗方線）
② 少監ドン
③ 紀屋敷
④ 上原
⑤ 長者原
⑥ 佐官ドン
⑦ 涼みケ御所
⑧ 灰塚
⑨ 長者山
⑩ 宮野礎石

図版４　鞠智城の南側をのぞむ

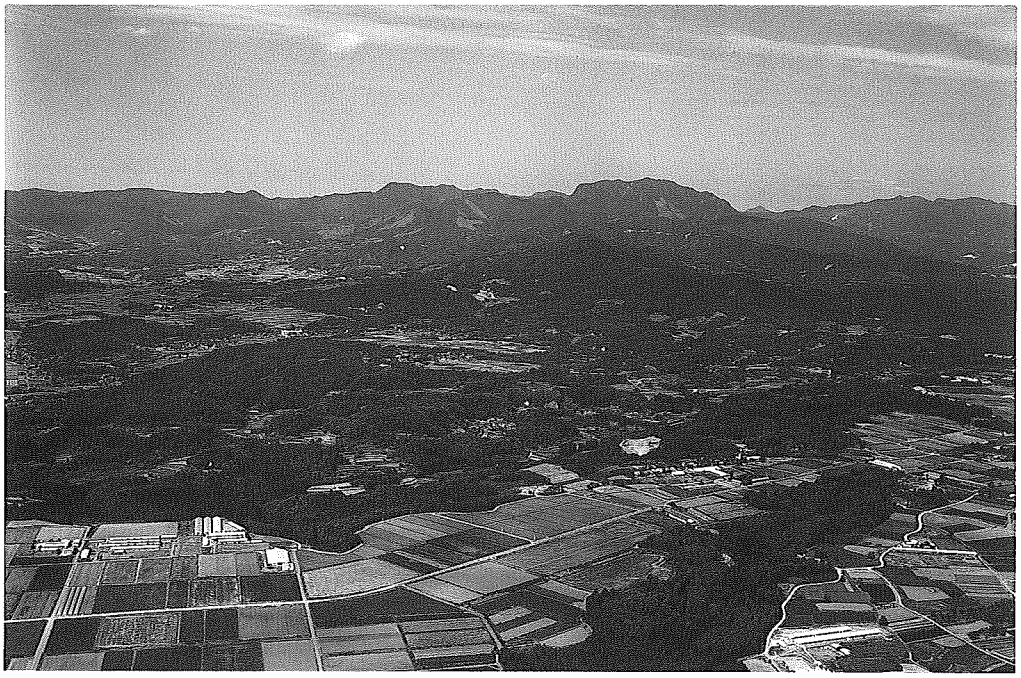


① 三の岳（金峰山）
② 岩野山
③ 平尾山
④ 菊池川
⑤ 内田川
⑥ 台台地
⑦ 黒蛭
⑧ 石渕淵
⑨ 町道
⑩ 長者山
⑪ 灰塚
⑫ 米原

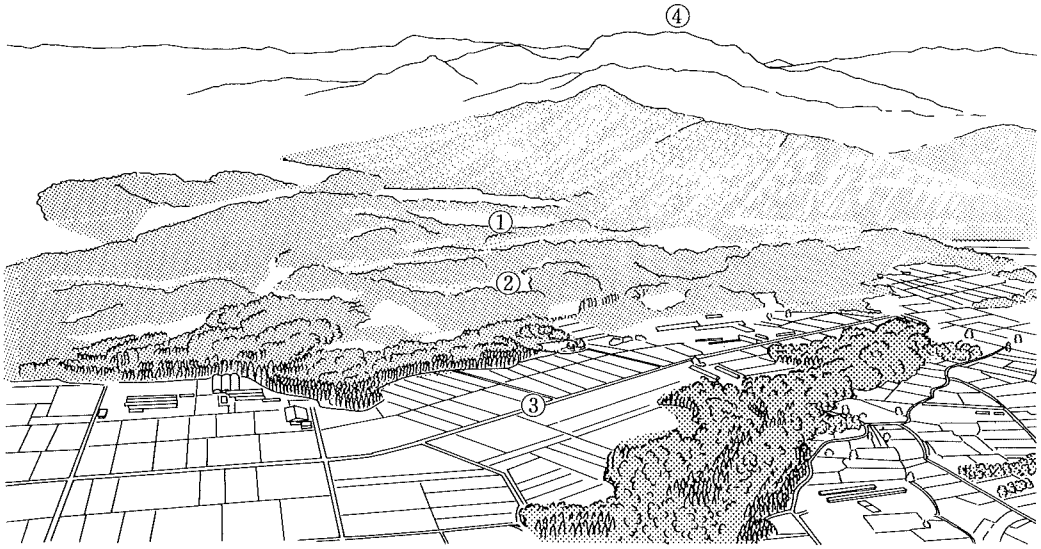
図版５　鞠智城の南西側をのぞむ



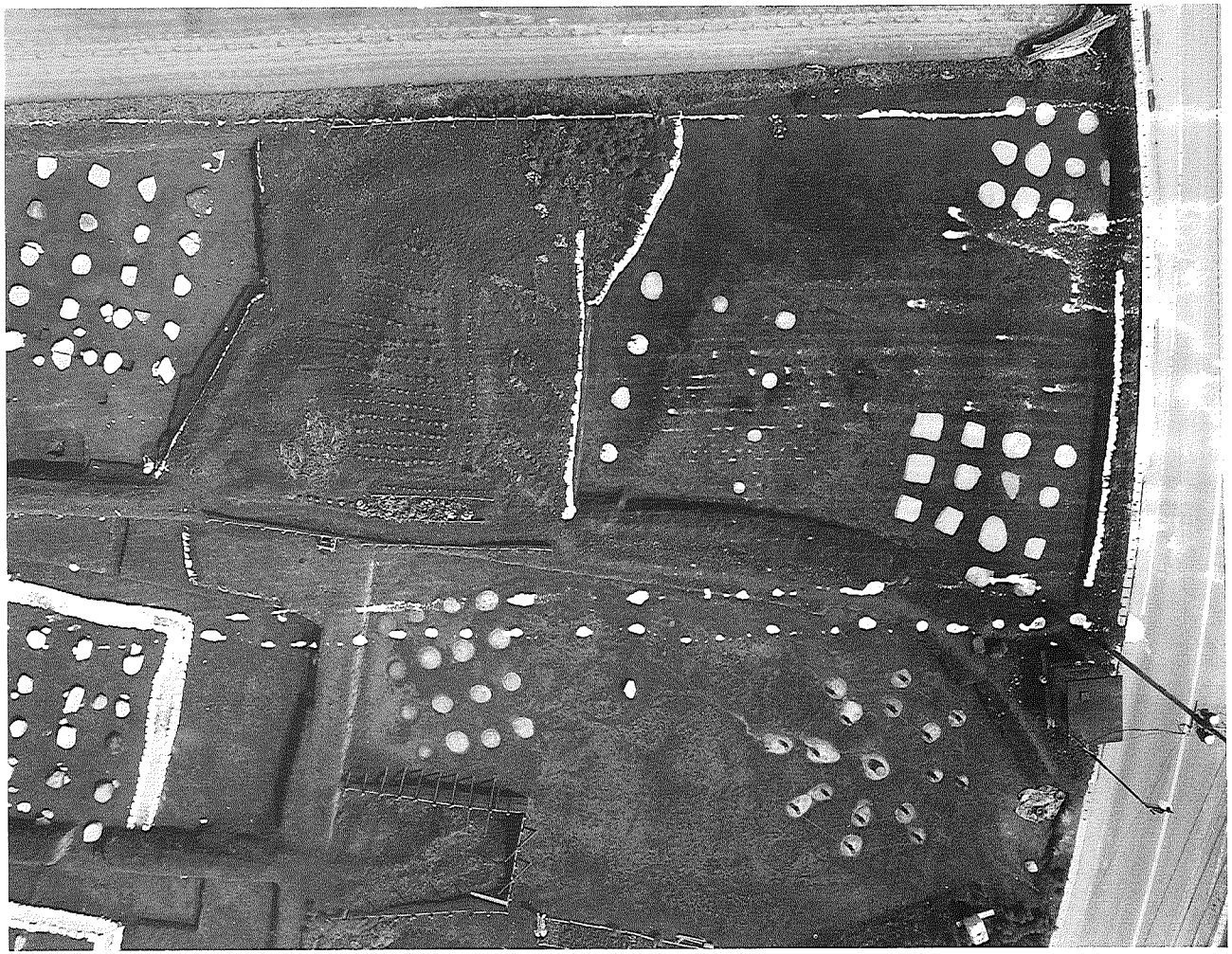
① 荒尾山
② 一の岳（金峰山）
③ 二の岳（金峰山）
④ 三の岳（金峰山）
⑤ 菊池川
⑥ 迫間川
⑦ 水鳥城（中世）
⑧ 内田川
⑨ 台台地
⑩ 堀切
⑪ 長者山
⑫ 灰塚
⑬ 米原
⑭ 町道
⑮ 三枝の石垣



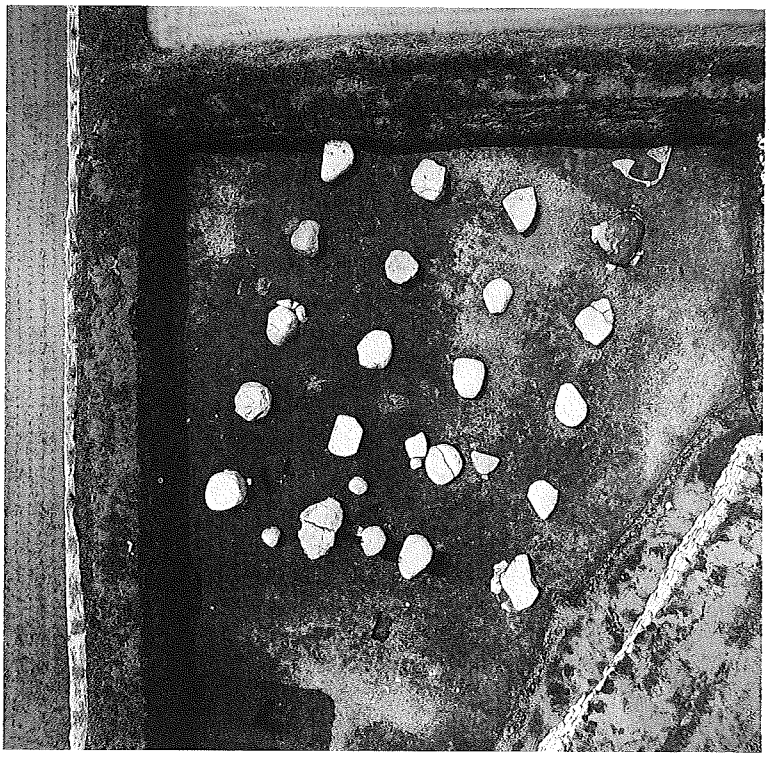
図版６　鞠智城を南側からのぞむ



① 鞠智城　　② 堀切　　③ 台台地　　④ 八方ケ岳

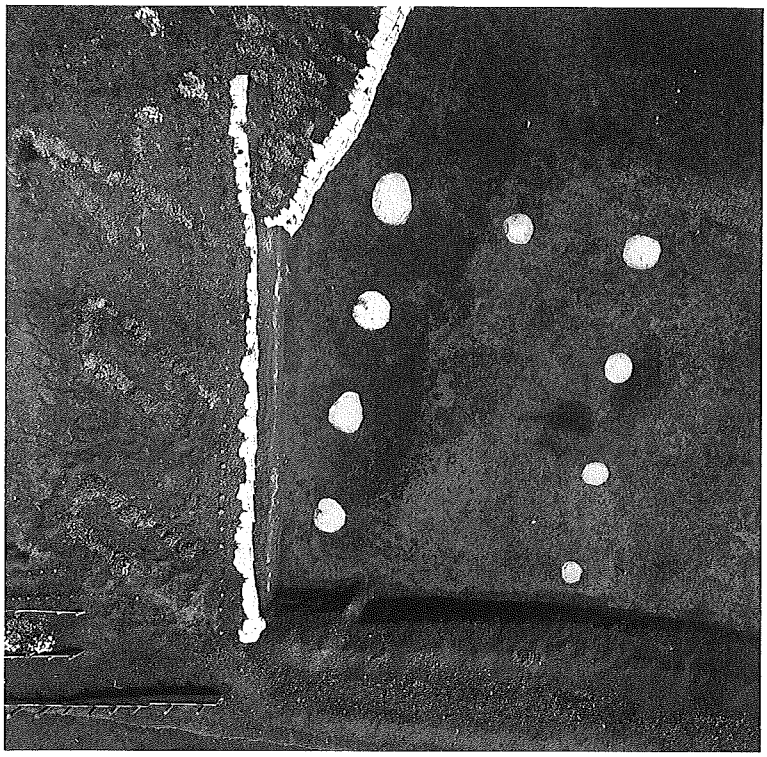


図版７　第19調査区（下段は13次調査　12区・16区）



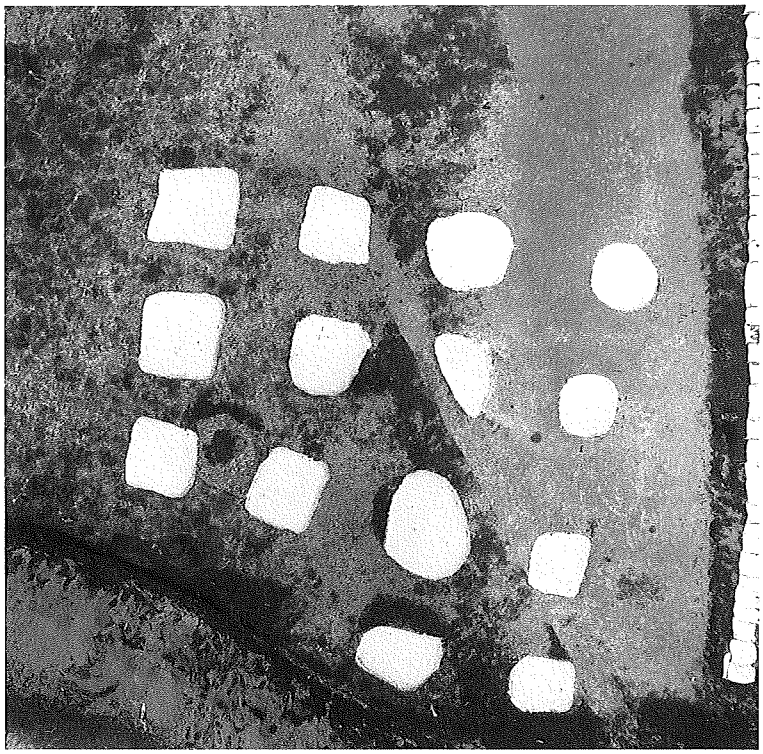
図版 8

36～40号建物跡

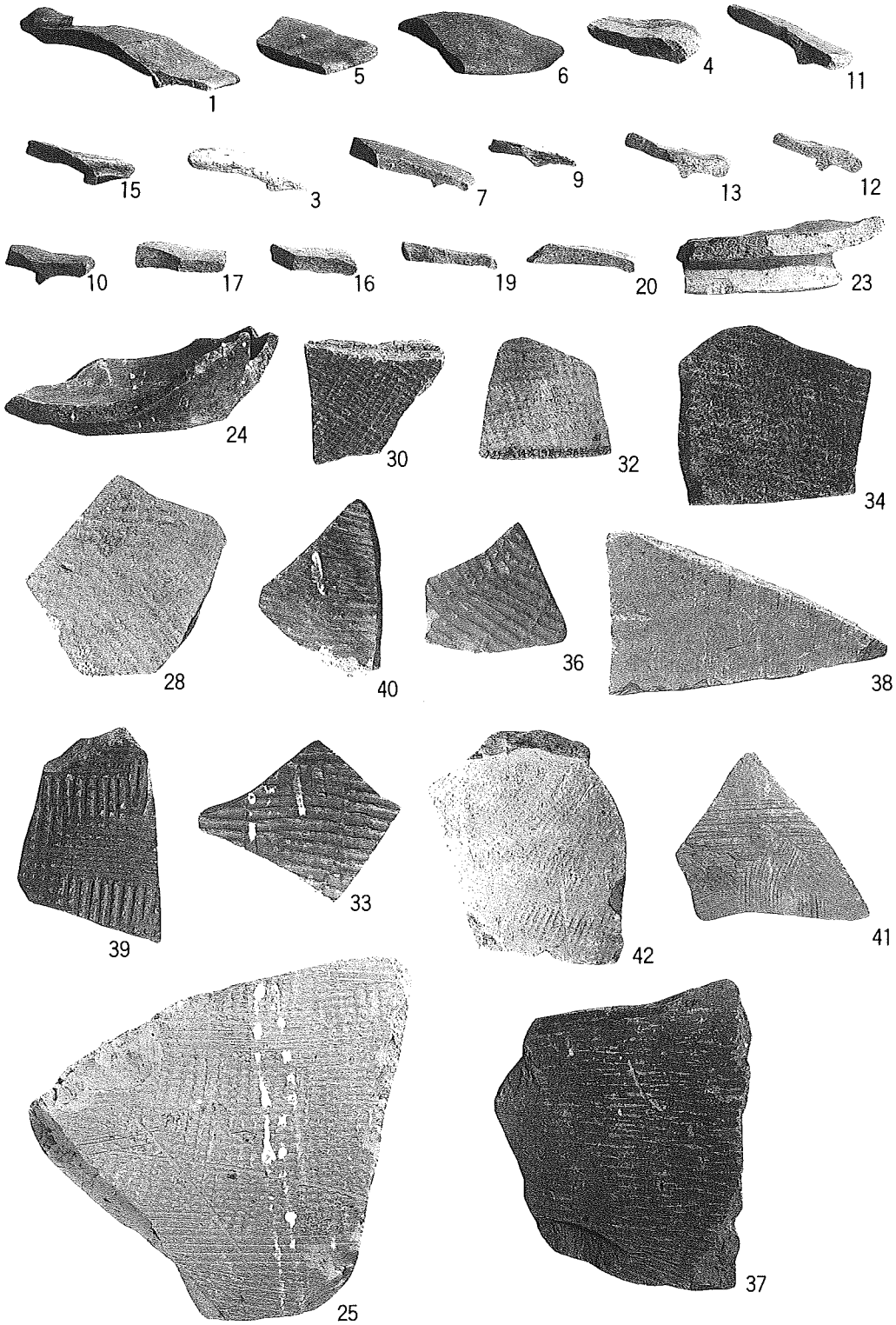


図版 9　41号建物跡

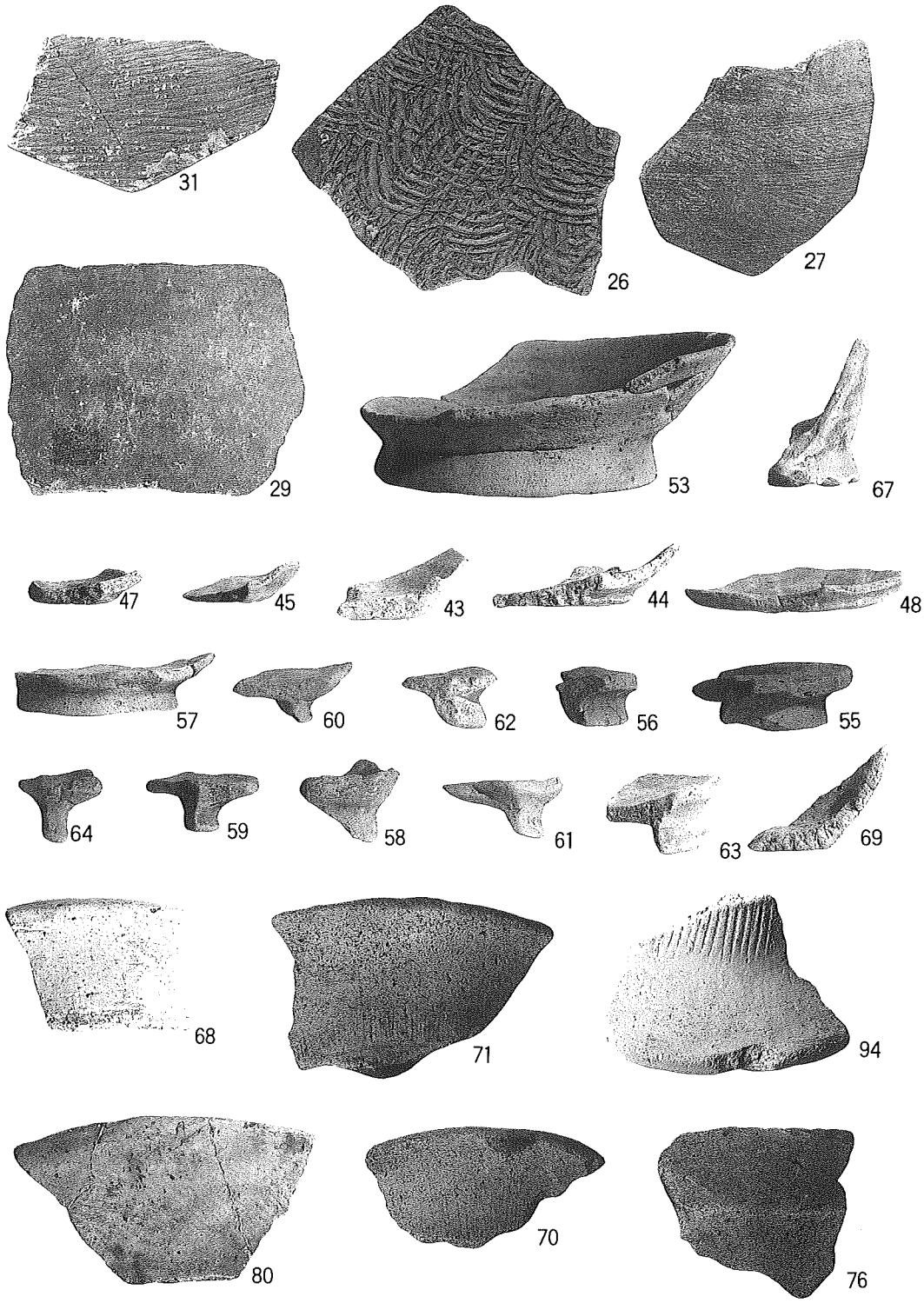
図版10　42号建物跡



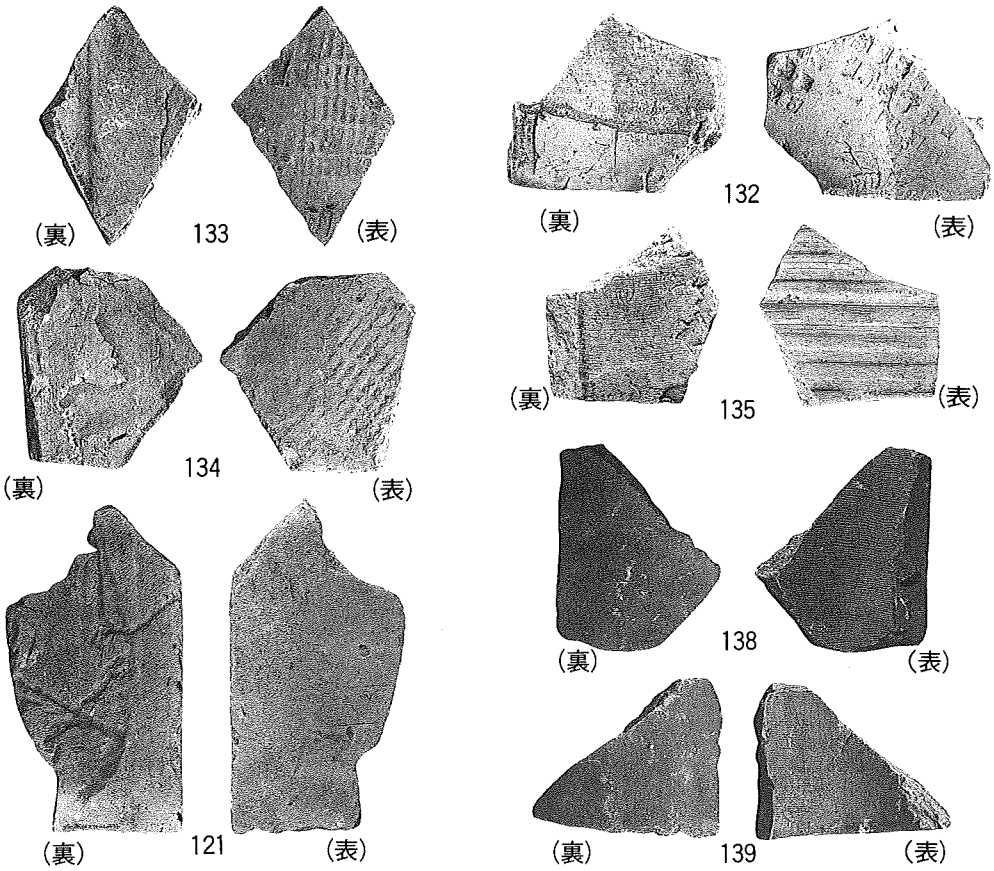
図版11　43号建物跡



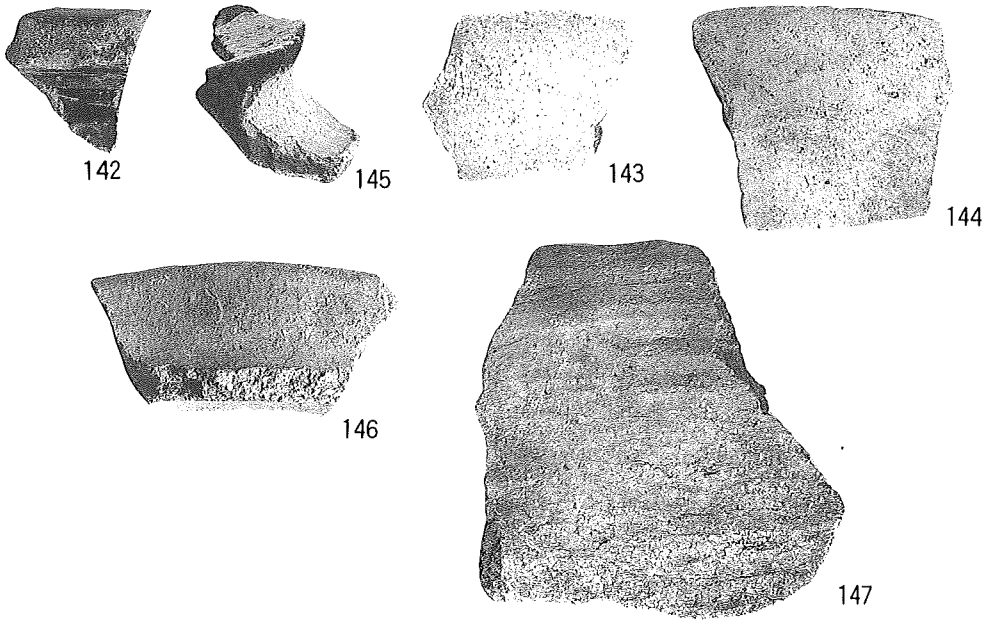
図版12　出土遺物①（19調査区）



図版13　出土遺物②（19調査区）



図版16　出土遺物⑤（19調査区　瓦）



図版17　出土遺物⑥（20調査区）

熊本県文化財調査報告　第130集

鞠　智　城　跡

── 第14次調査報告 ──

平成５年３月31日

編集発行：熊本県教育委員会
〒860
熊本市水前寺６丁目１－18
TEL　096－383－1111（代）
文化財調査第２係（内6716）

印　　刷：（株）大和印刷所
〒862
熊本市戸島町920－11
TEL　096－380－0303

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 130 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日